

あるか、それを捜し出すことも出来ない程暗かったが、手で觸ると門の戸は嚴重にしまつてゐることが判つた。

二人は無言のまま、袖を引き合つて垣根に沿つて歩いていつた。五六間もゆくと、空が開けていくらか四邊が明るくなつた。と、大きい方がつと足を止めて、傍の垣根を指した。

そこに一尺ぐらゐの穴が開いてゐるのを見つけたのだ。すると小さい方が何事かうなづきながら、地上に身體を伏せたとおぼしめ、犬のやうに四ん這ひになつて、する／＼と垣根の中に潜り込んだ。大きい方はそれを見とゞけると、そのまま足を返して、元來の方へと歩いて行つた。

庭の中に忍び込んだ少年は、小鼠のやうに植込の間を縫うて、建物の正面へと進んでいつた。燈火のもつてゐるのは、正面階上の一室、それも二尺ぐらゐ開いた雨戸の間から、明るい障子紙が見えるばかり。

少年はその燈火のもれる眞下まで來ると、足を停めてじつと上を見上げた。が、そこには物音一つなく、人のゐさうな氣配もない。少年は爪先立つて伸び上つた。しかし、いくら背伸びをしても、閉め切られた障子の中を覗ひ知らう由はない。

それでも少年は一步もそこを動かさなかつた。動かないばかりか、息をひそめ耳を立て、獲物をねらふ猫のやうに、きつと二階の障子を睨んでゐた。静寂な數分間が經つた。

渚に寄る波の音が、單調なリズムを織つて響いて來る。

その時、突然、町はづれの街路の方から、澄み切つた歌聲が聞えて來た。

春高樓の花の宴

めぐる 盃影さして

千代の松が枝わけ出でし

昔の光今いづこ

哀調を帯びた歌調が、靜かな海岸の夜に、堪らないやうな餘韻を残して響く、歌詞は「荒城の

月」それにしても、初秋の寂しさに、人の心を哀みに誘ふその歌ひ手は、そも何人であらう？

歌は更につゞく。

秋陣營の霜の色

鳴きゆく雁の數みせて

うゝる劍にてりそひし

昔の光——今いづこ

消え入るやうな哀切な調が、颯々として響いた時、少年の瞳をひきつけた二階の障子に女の影法師が描いたやうにぼろと映つた。と思ふと、その障子が半分ぐらゐ靜にく／＼開かれて、若い女の姿がそうとそこに現れた。

あゝ荒城の夜半の月
 變らぬ光、誰がためぞ——
 燈火を背にした女の姿が、その哀調に誘はれでもしたやうに思はず前へ乗り出した。
 その瞬間、ポケットに隠れた少年の手が、サツと頭上に伸びた。白いハンカチがその手の先に
 ひらくと動いた。
 眼の下の庭。暗にふる白いハンカチ。
 影繪のやうな女の手が、それに應へるやうに靡いた。少年は彼女の眞下へ向いて歩み寄らう
 とした。が、その折も折、ガラ／＼と音がして階下の雨戸が突然中から開かれて、變な男がぬら
 と顔を突き出した。
 右斜かひに二三間距離があつたのと、その間に小さい庭木が植つてゐたので、運よくも氣づか
 れないで濟んだものゝ、少年はひやりとして縮み上つた。見れば今の間に二階の障子も閉め切ら
 れてゐる。彼女もそれと氣づいたであらう。愚圖々々してゐる時ではない。
 少年の姿は掻き消すやうに植込の中に消えた。

三人の密議

「どうだつた？ 何か反響があつたかね？」 松林の中で、出會つた二つの黒い影がまたひそ／＼

と話してゐた。
 「大有りです。障子が開きましたよ。」
 「障子が開いたつて？」
 「二齣目のお終ひのところまで來た時でしたよ。そうと二階の障子が開いて、女の顔がのぞいた
 のです。」
 「咲ちやんだつたの？」
 「それが燈火を負つてるので、顔はまるで見えないのです。でも、僕がハンカチを振ると、手を
 振つて答へたんですから間違ひつこありませんよ。」
 「無論、間違ひはあるまい。『荒城の月』は僕も咲ちやんも大好きの歌で、學校へ行つてゐる時分、
 よく二人で歌つたんだから、それを僕が歌へば思ひ出すにきまつてゐる。それからどうしたの
 ？」
 「僕、咲子さんか如何か確かめようと思つて、話の出来るくらゐ近くへ行つたのです。ところが
 折悪しく、下の雨戸が開いて番人らしい男が顔を出してうろ／＼したので、見附られない中
 にと思つて、僕さつさと逃げ出して來たのです。」
 「それは宜かつた。見附かつたら萬休だからね。今晚は偵察戦だけで結構だよ。ぢや、そろ／＼
 引揚げて、ゆつくり明日の策戦をめぐらすことゝしよう。」

大きい方——それは言はずと知れた敏夫である——がさう云つて、踵を後に返さうとした時、街燈まばらな一本町を、まつしぐらに此方へ向いて疾驅して来る一臺の自動車。

つと道を避けて、路傍に立ちながら、走り過ぎる自動車の後を見送つた敏夫が、思はずアツ！と叫んだ。叫んだも道理、敏夫の眼に映じた自動車の番號は正しく 2400 號ではないか！

「水谷君、悪漢の自動車だ！」
さう言ふも一緒、敏夫はパラ／＼と驅け出さうとした。しかし、その必要はなかつた。何故と言つて、自動車は直ぐ左に曲つて、先刻二人が覗つた望水樓の門前にびたと停つたからである。それでも、二人は足を早めて、その背後に近いた。

玄關の開く音がして、ついで門の戸がぎいと鳴つて内側に開いた。すると、それを待ち兼ねてゐたやうに、黒い二つの影がすうと門の中に入った。再び重い扉がぎいと鳴つた。

翌の日の午前十時過ぎ。

敏夫と水谷少年が朝寢の床を這ひ出して、遅い朝飯をすましたところへ、内儀さんが上つて来て來客を傳へた。

「もう、やつて來たナ。どうか此方へ上げて下さい。」

内儀さんが下りてゆくと、間もなく入れちがひに上つて來たのは、一昨日の晩別れたばかりの三千夫青年。

「やア、電報を有り難う！」

三千夫はさう言つてから、そこに見馴れぬ少年がゐるのに氣がついて、後の言葉を躊躇つてゐる様子。

「これは水谷君です。唉ちゃんをよく知つてゐるので、助手格で働いてもらつてゐるのです。敏夫は二人を紹介してから

「でも馬鹿に早かつたですね。電報は何時につきました？」

「零時半頃だつたでせう。今朝、もつと早くと思つたんですが、昨日一日駆けずり廻つたもので、身體がへと／＼になつて起きられなかつたのです。」

「御同様ですよ。僕たちも今起きたところですよ。それで活動の結果はどうでした？」

「それが勞して功なし、最後の土俵際までいつて、すつかり背負投げを食つたんです。まつたく散々でしたよ。まア僕の方の失敗談は後廻しとして、急用つて何んです？」

「急用といふでもなかつたんですが、君にちつとも早く知らして上げたいと思つて、あんな電報を打つたんです。といふのは、問題の自動車を發見したのです。」

「何處で？」三千夫の目がざらりと光つた。

「こゝでよす。それも昨夜——」

「待つて下さい。番號は？」

「2480ですよ。」

「2430ぢやなかつたですか？」

「いえ、確に2480でした。」

「怪しいなア、2430の筈だが……」

「だつて、君は2480と言つたぢやないですか？ 間違ひつこありませんよ。僕は待つてる自動車

の後へくつつくやうにして見たんだから。」

「それだから怪しいんです。病院の看護婦も2480といふし、僕も2480といふ自動車を見たので

す。ところが、2480といふ自動車は別にあるのです。」

三千夫は昨日の朝、桃井病院を訪うたことから、三宅辯護士邸の門前で同一番號の自動車を發

見したと、それから警視廳や蓬萊自動車を訪問して、問題の自動車が2430號であること、それ

が市川在の東といふ人に賣拂はれたといふ事實を確めた次第を話して、

「僕はもう占めたと思つたのです。それで晩飯も食はんで、そのまゝ自動車を市川へ走らしたの

です。市川へ着いたのは七時半頃だつたでせう。それから彼方此方と捜しまはつたんですが、東

といふ家は何處にもないのです。しかし蓬萊自動車の主人が嘘を言ふ筈もないからと思つてよく

よく捜してみると、停車場の近くに空家がありましたね、東といふ人がその家を手附を置いて二

三日借りてゐたといふのです。だから、つまり自動車の賣買取引を内密にするために、二三日そ

こを借りうけてゐたんですね。ところが、要するにそれだけで、後は何にも分らないのです。」

「成程、それで話が僕の方へ連絡して來るのです。昨夜、僕たちが問題の自動車を發見したとい

ふのが、その東といふ男の借りてゐる別荘の前なんです。」

「ほう！ 別荘つてこの近くですか？」

「望水樓と云つて、こゝから二丁ばかりしかないのです。それも、實は——」

今度は敏夫が望水樓探檢の経路をすつかり話して、

「で、咲ちゃんがそこに監禁されてゐることも、東といふ男が内海か石井の變名であることも、

もう間違ひないんです。だから、望水樓で取引きをしては、勘づかれる恐れがあると思つて、わ

ざと市川の空家を借りて、そこで蓬萊自動車の主人と會つたんです。」

「きつと左様いふ順序でせう。しかし、自動車の番號が怪しいですね。2480號は確に桃井博士の

自家用自動車ですよ。」

「桃井博士の自動車とは無論別物ですよ。僕はあなたの話を聞いた時、ふと思ひついたことです

が——それも、蓬萊自動車の番號が2480號だと聞いて思ひついたんですが、問題は3と8です

よ。それで、僕は決して3と8を見間違へたんではないのです。確に8に相違なかつたんです

からね。それで僕の考へるのには、3を8と書き換へたんですよ。ちよつと筆を足せば、3は8になりますからね。」

「なる程！」三千夫が思はず膝を打つた。「さうです。きつと左様に違ひないです！」

「それで、とに角、内海達悪漢が根拠をこの望水樓へうつして、咲子さんをこゝへ監禁してゐることは確實になつたのです。ですから、問題は百合子さんですが、これも自動車の持主が判明した以上、捜し廻る必要はないことです。それにもう愚圖々々してゐる時ではありませんから、僕はこゝで、一刀兩斷の策戦に出て一擧に勝負を決しようと思ふんです。」

「といふと？」

「それです——その策戦をこれから御相談しようと思ふんです。」

躍り出た怪漢

静かなく海岸の夜。

薄曇りの空には、またたく星の光も見えず、海は暗く凧いで、渚に寄する波音が聞えるばかり。

その静けさを破つて、千葉街道をまつしぐらに、南に向いて駛つて来る一臺の自動車があつた。狭い稲毛の街を一直線に突き抜けて、町端れに出たその自動車が、急に速度をゆるめて、松

林の道を左へ曲つた時、突然、何處かで、ピーツ！と呼子の笛が鳴つた。

と、それが合圖でももあるかのやうに、自動車の前方から、サツと暗を射る懐中電燈の光線！同時に、

「停れ！」と威嚴のある命令的の聲がして、傍の松林から躍り出した黒い影。

不意の出来事である。面くらつた運転手が、ハツと呼吸をのんで自動車を停めるも一緒、今度は横合の暗から今一つの黒い影が、電光のやうに飛び出して、自動車のドアを力まかせに開け放すと、座席の中にぐつと片足踏み込んだ。

「誰だ！ 無禮者！」

自動車の中から聲がした。

「誰だか今に分ることだ。静にしまへ。これが見えないか！」

白い銃口が眼の前に光つた。それが恐ろしいピストルであることに初めて気がついた自動車の主人公は、あわてゝ座席から立たうとした。と、壓かぶせるやうに、また叱責の聲がした。

「反抗したら生命はないぞ。じつとしてゐたまへ！」

その聲に威壓されたか、自動車の主は、再び座席に着きながら、

「金が欲しいと云ふのか？」

傲慢な、でもいくらか顫えを帯びた聲で訊き返した。

「誰が金なんか欲しいものか。欲しいものは外にあるのだ？」
 ピストルを突きつけた男がきつぱりと言ひ放つた。その時、右側のドアが不意に開いて、懐中電燈の光線が、車内の主人公を眞向から照しつけた。和服姿に中折帽を冠つた見るからに堂々たるその紳士は、右手を擧げてまぶしさうに眼を射る光線を遮りながら、狼藉者を叱り飛ばさうとでもする風だつた。しかし、その餘裕もなく、先方から先づ口を切つた。

「やつぱり思つたとほりだ。君は悪漢内海に違ひあるまい。いゝところでお目にかゝつた。もう逃げやうたつて駄目だ。さア、おとなしく自動車を出たまへ！」

「失敬なことを言ふ！ 一體君は何者だ？」

「僕が何者であるか、顔を見れば分るだらう。君のために密室へ監禁された笹井敏夫だ。」

「え、笹井敏夫だと！」

流石の悪漢内海も、それが敏夫であると聞くと、思はず驚きの聲を擧げた。

「で、一體、何の用があると云ふのだ？」

「今更しらつばくれるのは止したまへ。何の用があるが、君自身の胸に聞かがい。」

「な、何んだと？」

「分らなければ言つて上げよう！」 敏夫は突きつけたピストルの手もゆるめずに、「しかし、その前に行つておくことがある。僕は君に對して怨みがあるのだ。君の家へ監禁されて逃げ出した時

のあの怨みだ。もし、僕の命令をきかないで、少しでも抵抗するやうなことがあれば、僕たちのもつてゐる二挺のピストルは何等の躊躇なく、君に向つて發射されることを豫告して置く——」

「先づ第一に、僕たちに對して、決して抵抗しないことを宣言したまへ。」

敏夫の聲は凜として響いた。

「……………」

「生命が惜しいなら宣言したまへ。僕たちは死を覺悟してかゝつてゐるのだ。もし、君が抵抗するなら、今も云ふとほり、拳銃の引鐵を引くばかりだ。」

「仕方がない——抵抗はしまい……………」

「宜し、それでは、次ぎに僕たちの命令は何であれ、無條件で服従することを盟ひたまへ。」

「無條件で？ そんな馬鹿なことが……………」

「では生命が惜しくないといふのか。」

「いや——」

「ぢや、無條件服従を盟ひたまへ。」

「盟ふ——」

「澁々ながら盟つたね。よし、では僕たちの用件を提出しよう。先づ、君はこの自動車から下りるのだ。そして僕たちと一緒に望水樓へ行つて、あすこに居る護衛の男に君自身の口から、二階

に監禁してゐる女を玄關まで連れて来るやうに命じるのだ。」

「監禁してゐる女と？」

「まだ白ばくれるのか！ 望水樓の二階に僕の従妹の吉井咲子が監禁されてゐることは、ちやあんと分つてゐるのだ。君が蓬萊自動車店の古自動車を買つて、番號を書き直したことよりも、もつとよく分つてゐるのだ。」

「……それまで知られてゐては已むを得ん、では、あの女を玄關まで呼び出して、君たちに渡せば、それで宜いといふのか？」

「それで宜い。いや、今一つ用事がある。それは運轉手と一緒にこの自動車を借りたのだ。東京へ着けば用はないから、直ぐお返しする。これは君の追跡を妨ぐためにも否應なしに借りなければならぬのだ。」

「勝手にするがよい！ 否應なしなら相談も何もないものだ。」

「君なら左様考へるだらう。しかし、僕たちは君のやうな悪漢ではない。無斷で他人の自動車を使したくはないのだ。が、そんなことはどうでもいゝ、僕たちを案内して咲子さんを引渡したまへ。」

いざと云へばピストルから弾丸が飛んで出るのである。いかに悪漢内海といへども、生命は惜しいにきまつてゐる。彼は言はれるまゝに澁々と自動車を降りた。

「水谷君！」

敏夫の聲に應じて、水谷少年が自動車の背後からひよいと出て來た。

「君は運轉手を監視して、何時でも出發の出来るやうに用意を頼むよ。」

「承知しました。運轉手君、自動車をぐるりと廻したまへ！」

運轉手がハンドルをとつて、自動車の方向を變へてゐる間に、敏夫と三千夫は悪漢内海を圍んで、松林の中の暗い道を歩き出した。

望水樓の門前まで來ると、敏夫が拳を上げて門の扉をトントンと叩いた。間もなく内玄關の格子が開いて、庭下駄の音がしたと思ふと、やがて重い門の扉が靜に開いた。と同時に、三千夫の手にした懐中電燈が、そこに立つ男の顔をパツと射つた。

四十前後の人相の悪い番人の面喰つた顔が三人の前に現れた。彼は拳銃を身構へた二人の青年に兩方から圍まれた内海を見て、聲も出ないまでに驚いたらしく、呆然として三人の様子を見くらべてゐるばかりであつた。

「さア、宣言を實行したまへ！」

敏夫の聲には威嚴があつた。

「……………」

「愚圖々々しないで實行したまへ！」

「うん、仕方がない、内藤、二階にゐるあの吉井咲子といふ女をつれて来てくれ。」
内海がしぼり出すやうに言った。
「前からゐる方ですね。」

「うん。」

敏夫と三千夫が思はず顔を見合した。不用意の間に、番人の口を洩れたその言葉には聞きずてならぬところがある。「前からゐる方」がありとすれば、そこには「後から来た方」もなければならぬ。それは百合子ではあるまいか？

「三千夫君、君、その男についていつて、二階を調べてくれたまへ。抵抗したら遠慮はいらん、ピストルをぶつ放すんだ。」

「よし、来た。」

三千夫は番人にピストルを突きつけながら、追立てるやうにして玄關を中に入つていつた。

三分、四分、五分——待ち遠しい緊張した數分が過ぎた。と、バタ／＼と廊下を小走りに走る幾つかの足音が聞えて、開け放つた玄關から轉げるやうに走り出た女の姿。つゞいてまた一人。

「敏夫さん！」

「おう、咲ちやん！ 百合子さんも？」

「え、百合子さんもいらつしやつたわ！」

「さう！ ぢや直ぐあの自動車へ乗つて下さい！ 三千夫君は？」

「大丈夫、僕は殿だ。」

最後から悠々と出て来た三千夫を見ると、敏夫は安心しながら、内海をきつと睨まへて、

「ぢや、これで赦して上げる。その代り、これ限りこの事件からは手を引きたまへ。もしこの上、いろんなことをするやうだつたら、今度は警察へ報告するから、そのつもりでゐたまへ。ぢや、さよなら！」

別れの言葉を投げるも一緒、敏夫は三人の後を追うて、自動車に飛び乗つた。

「皆ゐるね。おや、水谷君は？」

「僕はこゝに居ますよ。」

運轉手臺の傍から、元氣のいゝ少年の聲。

「では、出發だ！」

自動車は五人を乗せてスタートを切つた。が、松林の道を街道へ出ようとする時、——また十間も行かない内に、背後から

ズドン！ と銃聲一發。と同時に、パーンと耳を聳する凄まじい音響。

「しまった！ タイヤが！」 敏夫が叫んだ。

運なる哉。一發の弾丸、それがところもあらうに自動車のタイヤへ命中したのだ。

「残念だが、自動車が動きません。」
運轉手が絶望の聲を擧げた。

「仕方がない、電車にしよう。唉ちゃんも百合子さんも降りて下さい。水谷君、君、二人を電車まで案内してくれたまへ。海氣館の横手を抜ければいゝんだ。僕たちは内海をとちめておいて直ぐ行くからね——もし、手間取るやうだつたら、待たないで電車に乗つてくれたまへ。あゝ、それから——唉ちゃん！ 東京へ着いたら三宅さんところが一番近くて安全だから——」

逃れゆく道

暗い／＼松林の中の細道を、唉子と百合子は手を取り合つて、轉げるやうに走つた。海氣館の横をぬけ、丘を越えて電車へ出る近道は、土地の人さへ燈灯ならでは踏み迷ふやうな小道である。一昨日からの滞在で、案内知つた水谷少年がついてゐたので宜かつたものゝ、もし二人きりであつたなら、恐らく松林の中を朝までも彷徨ひ歩いたことであつたらう。

松の根方に幾度かつまづきもした。——さては丘の斜面から危ふく迂り落ちようとしたこともあつた。それよりも三人の膽もひやしたのは、やつと丘の上まで來た時、背後の方でつゞけ様に二發の銃聲を聞いた時であつた。三人は闇の中で互ひに顔を見合した。誰が射つた彈丸であらう？ 敏夫か三千夫に、もしものことがなければよいが……。

口こそ出さね、互ひに不安な氣持に包まれながら、と云つて足を後に返すわけにもゆかず、とも角も、三人は道を急いで停車場まで出たのであつた。

電車が來た。が、誰も乗らうとはしなかつた。乗り降りの客が、今時分、土地に見馴れぬ二人の姿を、いぶかし氣に見てゆくのを、きまりわるげに外見しながら、彼女達は寂しい停車場の片隅に、敏夫と三千夫を待つてゐた。

が、二人の姿は却々に見えなかつた。二十分近くも待つてそろ／＼次の電車が來る時分になつてもまだ二人はやつて來なかつた。その中に何時の間にか、停車場へ集つた土地の人々の間に、松林の中の銃聲の話が交されたした。

三人は自分自身の噂でも聞くやうな氣がして、小さくなつて聞耳を立てゝゐた。しかし、時ならぬピストルの音がして、四邊の人が騒いでゐるといふだけで、誰も詳しいことを知つてゐるものはない。

そこへ東京行き電車が來た。三人は顔を見合して立ち上つた。口こそ出さなかつたが、二度も電車をやり過しては、驛夫たちの目にも怪しまれるといふこと、そして二人のことが氣にはかゝりながら、間諜々々してゐて萬一内海に捕まるやうなことがあつてはと、一同が同じ思ひで立ち上つたのであつた。

夜のことではあり、電車の中は空き／＼であつた。次ぎの檢見川の停留場で、もしや二人が乗

りはしないかと、三人は窓から顔を出してみたが、それも空な望みに過ぎなかつた。電車は二本の鐵路を轟々の軋りを立てながら、十幾つの驛を通つて、九時近くにやつと押上の驛に着いた。

もうこゝまで来れば、安全地帯である。いくら悪漢たちが追掛けて来ても、何にも恐れることはない。警官もれば、正しいものに必ずや味方をしてくれる群集もゐるのである。

三人はこの安全地帯で、敏夫と三千夫の引揚げて来るのを待ちたかつた。でも、そこには待合室がない上に、今まで気がつかなくつたが救はれた歡びに、あわてふためき望水樓を飛び出したので、咲子は庭下駄を、百合子は汚い草履をつつかけたまゝである。頭髮や衣類はとも角も、さうした足許を、じろくくと往來の人に見られるのが、二人にはこの上もない苦痛であつた。

待合す先は決つてゐる。日本橋の三宅辯護士邸へ！ さうだ！ 雑沓の中に立ちすくんで、多くの人から疑惑の眼差を向けられるよりも、自分たちの味方である三宅氏の家へ行つて、二人を待つ方がどんなにいゝかれない。

さう思つた咲子は、水谷少年に命じて自動車を呼ばした。三人は膝を並べて乗り込んだ。

「わたくし、まだ名前も申上げないで居りますが――」

自動車が動き出すと、百合子が初めて口を開いた。望水樓を出て以來、三人の間にはまだしみじみと話をする閑もなかつたのだ。

「ほんとに――わたしは吉井咲子と申しますの。えゝ、あなたのお名前は、よく承知してゐますの。敏夫さんと二人で、あなたの行方ばかりお捜ししてゐたんですもの。あすこにいらつしやらうとは夢にも知りませんでしたわ。島田さんが、百合子さんゝつてあなたのお名前を呼んだ時には、わたしほんたうに吃驚しましたの。」

「わたしも、三千夫さんの聲を聞いた時は、夢ではないかと思ひましたの。病院にゐた時、三千夫さんからの迎へだといふので、自動車で乗ると、そのまゝあんなところへ連れて來られたので、わたしもう助かる見込みはないと諦めてゐたんでございますもの。」

「御尤もですわ。でも、今度こそは大丈夫でせう。島田さん、敏夫さん、それに三宅さんまでついでゐるんですもの。」

「三宅さんと仰有ると、わたしが自動車にはね飛ばされた時、救つて下さつた方でせうか？」
「そんなことがありますか？ わたし存じませんの。實はわたしも悪漢に欺されて、少時監禁されてゐたんですから、留守中のことは何にも知りませんが、三宅さんはわたしたとの味方になつて、あなたを捜し出すために、力をかけて下さつた方ですよ。」

「では、きつとあの三宅さんだと思ひますわ。わたし、そんな方だとは知らないものですから、お疑ぐりして出鱈目なんか言つて済みませんでしたわ。」

「出鱈目つて、何のことですか？」

「ダイヤのことで、宜い加減なお話をしたんでございます。」
 「ダイヤのことですつて？」 咲子の眼が急に光つた。「では、あの問題のダイヤは、まだ誰の手に渡らないで、あなたが隠していらつしやるんでございますか？」
 「多分、隠したところに、そのまゝあるだらうと思ひますの。それを、わたしつい三宅さんといふ方をお疑ぐりしたものですから、三千夫さんにまで出鱈目を申上げたのでございます。これから行つてお目にかゝつたら、わたしよくお詫を申上げて、すつかり眞實のことをお話ししたいと思ひますわ。」

「眞實」の物語

夜の街を縫うて、自動車は三宅辯護士の門前に停つた。咲子が玄關に立つて訪ふと、折よく在宅とのこと、三人はそのまゝ應接間へと通された。

「やア！」

あわてた様子で扉を開けて入つて来た三宅氏は、そこに居並ぶ三人の姿を見ると、さも驚いたらしく、頓狂な聲を擧げた。そして少時は椅子につくことも忘れた風で、じろくくと三人の顔を見くらべてゐたが、

「これは意外ですな。もう會へないかと思つた方が、揃ひも揃つて御人來とは！ それに水谷君

まで——いや、これは珍しい。」

三宅氏は驚きの聲を連發しながら、

「咲子さんは悪漢に誘拐されて利根川へ投身したと云ふし、百合子さんも病院からまた行方不明になつたと云ふし、重ねくの變な噂にすつかり膽をつぶしてゐたんです。それが、お二人とも揃つて——一體どうしたといふんです？」

「御挨拶もしないで、直ぐお話も失禮ですけれども、百合子さんと二人で稲毛に監禁されてゐたのを、今夜、敏夫さんと三千夫さんに助け出してゐたといひ、逃げて来たんでございます。詳しいお話はゆつくりでないといふ出来ませんけど——」

「稲毛？ 千葉の稲毛ですか？ へえ！ それは驚きましたね。で、敏夫君と三千夫君は？」

「途中で自動車がパンクしましてね。それもあの内海が後からピストルを射つたのが、運わるくダイヤへ命つたんですの。それで、わたしたちだけ、こちらへ来て待つてゐるやうに言つて、二人は後へ残つたんですの。」

「ほう！ ぢや、今にこゝへ來ますね。しかし、どうも意外だ。あなた方が揃つて無事なお顔をみせようとは全く意外でした。ところで、百合子さんはもうすつかりお元気になりましたか？」
 「有り難う御座います。まだお禮も申上げませんで——お蔭様ですつかり快くなりましたでございます。」

「笹井君などとお訪ねした翌々日でしたか、病院へ電話をかけると、あなたがまた行方不明になられたといふので、驚いて直ぐ島田君に電話をかけたんですが、二人で行きちがつてばかりゐて會へないもので大變心配してゐたんです。」

「ほんとうに御心配ばかりお掛けして申譯ございません。島田から迎へに來たといふものですか、何の氣もなく自動車に乗ると、そのまゝ千葉までつれてゆかれたのでございます。」

「左様でしたか、悪漢の悪智恵には敵ひませんね。それは左様と、敏夫君と三千夫君は敦賀へ行つて、うまくダイヤを見つけて來たのでせうか？ 咲子さんは、その話を聞きませんか？」

「それが——」口を開きかけた咲子は、ふと自動車の中の話を思ひ出して、百合子の方に目配せした。

「そのことなら、わたしからお詫びを申し上げなくてはなりません、百合子は言ひにくさうに面恥げな様子をしながら、「ほんとうに何といつてお詫びを申したらよいか分りませんが、實はあのダイヤはある人から、しかと頼まれましたもので、わたし眞實の受取人が出て來るまでは、誰にも渡してはならないと思つてゐたのでございます。それをいゝんな人がどうにでもしてわたしの手から奪ひとらうとしますので、わたしはすつかり記憶を失つた風をして、あるところへ隠したまま、今日まで誰にも言はないで黙つてゐたのでございます。この間、病院でお目にかゝつた時も、實は申譯ありませんでしたが、いくらか皆様をお疑りするやうな氣持がありましたもので、

敦賀の海岸へ隠したなんて出鱈目を申し上げたのでございます。」

「ほゝオ、するとあれは嘘だつたんですね。いや、大切な品を預つたら、それくらゐに人を疑がつてかゝらなくては責任が果せません。決して悪くは思ひませんよ。では、長い間、記憶を失つてゐられたといふのも嘘ですね？」

「えゝ、わたし記憶を失くしたやうな風をしてゐたのでございます。それでないと、ひどい目に會はされるにきまつてゐたんでございますもの。」

「成程！ 左様でせうとも。いや、一年餘りもの間、記憶を失つた風をして押し通されたとは偉い。とても、普通の人間に出來ることではないですな。それで、ダイヤは一體何處へ隠してあるのです？」

問ふ人はもとより、咲子と水谷少年も呼吸をのんで、百合子の答へ如何にと待ちうけた。

「それに就いては、わたくし敦賀へ上陸した當時のことから、今一度改めてお話をしなくてはなりません。」

百合子は足掛け二年の間、自分の胸一つに押しつゝんでゐた消えたダイヤの秘密を、言葉靜に語り始めた。

「この前、病院でお話をしました時には身邊に恐ろしい敵があるやうな氣がして、海岸の岩孔の中に隠したと申上げましたが、あれは全く口からの出まかせでございました。尤も隠し場所を捜

して海岸傳ひに岩孔のところまで行つたことは間違ひではありませんが、頂つた鞆革の囊の中に何が入つてゐるだらうと思つて、取出してみると目もくらむやうな金剛石でございませう。わたしはそれを手にとつて見入つてゐる中に、岩孔の中なんかへ隠しておくのは危険だと思ひ出しました。好い隠し場所ではあるが、どうして人目に觸れないものでもない。それよりもいつそ自分の身體へ隠し持つてゐる方が、餘程、安全だと思つたのでございませう。そしていろ／＼と考へた末、ふと思ひついてダイヤを自分の頭髮の中へ包みかくして、鞆革の囊だけ孔の中へ押し込んで置いて、何氣ない風で棧橋へ歸つて來ました。そして汽車に乗らうとしてゐる時、突然、後頭部を打たれて卒倒したことは、この前も申上げたとほりでございませう。氣がつくと、わたしは旅館の一室に寢かされてゐましたが、ふと目を開けて枕頭にある女の人の人を見た時、わたしはハツと思ひました。と云ふのが、氣を失つて倒れる時まで、わたしに付きまとつてゐた恐ろしい敵といふのが、誰あらう、その女だつたからでございませう。やつぱり沈んだ船に乗つてゐて、わたしが露西亞人からダイヤを頂つた時、直ぐ傍にゐるばかりか、ボートへ乗つて棧橋へ上るまで始終わたしの傍を離れないで、何だかを監視してゐるやうに思へたその女なのでございませう。わたしは油斷はならぬと思ひました。名も知らぬ女が、縁も由縁もないわたしを、そんなに親切にしてくれるから、第一怪しいと思つたのです。わたしのさうした心配はやつぱり當つて居りました。頭部の痛みを堪へながら、床の上に起き上ると、もし何か落しものはしなかつたか、大切なもの

を何處かへ置き忘れはしなかつたかなどと、訊かれるのでございませう。わたしはぼんやりした顔をして、何も知らないと思つた。その間にも、わたしはダイヤのことが氣にかゝつて、頭髮をなほす風をして、そつと手で觸つてみました。幸ひにもダイヤは失くなつてはゐませう。た。

「その後も、手を代へ品を換へて、うるさく訊かれましたけれど、わたしは過ぎ去つたことは一切切忘れた風をして、一言も口を利きませんでした。それで最後にはたうとうわたしは記憶を失くしたものだと思つたでせう。その女は、わたしを自分の姪だと言つて、守島雪子だなんて勝手な名前までつけて、東京へつれて來たのでございませう。そんなにまでして私を、東京へつれて來たのは、わたしが記憶を失くする前に、何處かへダイヤを隠したものだと思ひこみ、どうにかしてわたしの記憶を元どほりに呼び返して、ダイヤを手に入れようと考へたに違ひありません。それで東京へ着くと、間もなく小田原の療養院へ入院させられ、一年近くも監禁同様の目に遭はされましたが、二週間ばかり前、内海といふ方が守島さんの代理だと言つて、わたしを迎へに來て、また東京へつれ歸られたのでございませう……。」

「成程、随分長い間苦しい目をされましたね、百合子が一息つくのを待つて、三宅辯護士が言つた。それからのことは敏夫さんや咲子さんのお話で、大體判つてゐますが、すると問題のダイヤは今でもやつぱりお頭髮の中に隠してゐられるんですか？」

「いゝえ、わたし敦賀から東京へ来るまでは、頭髪の中に隠してゐましたけれど、東京へ着くと直ぐ座敷牢のやうなところへ入れられましたので、それからほとんど目に遭はされるかもしれないから、頭髪の中へ隠しておくのも危いと思つて、新しい隠し場所を探してゐる中に、ふといゝところが見附かつたのでございます。」

「ふむ、そのいゝところといふのは？」

三宅氏が急ぎ込んで訊いた。咲子と水谷少年が片唾を呑んだ。

「その座敷牢の壁の上方に、油繪の額が懸つてゐました。わたしは、その裏へ隠さうと思つて、夜、皆が寝静つた時分を見はからつて、椅子の上へ上つて、そうと額を取り外してみましたが、しますと、額縁で隠されてゐた壁の隅つこのところに、小さい孔がありましたので、こんないゝところはまたとないと思つて、ダイヤを取出してそこへ隠したのでございます。」

「ほう！ 壁の中へ！ で、その座敷牢のある家といふのは、青山のこの前、敏夫君が監禁されてた家ぢやないんですか？」

「左様でございます。わたくし、その時、笹井さんに初めてお目にかゝつたのでございますが、笹井さんが監禁されていらつしたその座敷牢でございます。」

「さうですか！ では、大凡見當がついてゐます。ぢや、これから直ぐ取出しに行くことにしませう！」

さう言ふも一緒、三宅氏がはじかれたやうに勢ひ込んで立ち上つた。その様子があまりに急つたので、三人はいさゝか面喰つた形で、直ぐには答へも出来なかつた。

「でも、もう随分遅いんでございませう。」

百合子に代つて、咲子がやつとさう答へた。

「遅いと言つて、まだ十時半です。善は急げです。それにあすこは内海の仲間が怪しいと睨んで、始終調べに行つてるやうですからね。」

「内海の仲間と言ひますと？」

「石井といふ奴です。何はあれ、ちつとも早く取出しに行く方がいゝんです。」

「敏夫さんや三千夫さんが歸つてから、一緒だといゝんですけれど……。」

「こちらで待つてゐてもらへば宜いでせう。何に三十分とはかゝりませんよ。さア、行きませう。」

「でも、もうあの家へは誰も入つてゐないでせうか？」

百合子が心配さうに言つた。

「人が入つてゐても大丈夫です。事情を話せば判ることですから。石井に先手を打たれたら、それつきりです。直ぐ出掛けることにしませう。」

三宅氏はさう言つて、書生に自動車を呼ばせると、三人を急ぎ立てながら、自分から先に立つ

て玄關に出た。

咲子と百合子が先づ座席へついた。三宅氏がその後につづいた。最後に残つた水谷少年は、乗らうか如何しようかと躊躇つてゐる風であつたが、やがて思ひ決した風で

「僕はアパートメントへ歸らなくてはなりませんから、これで失禮します！」

と言ひながら、開け放たれた自動車の扉をパチンと閉めた。

「残念だわね。一緒にゆけば歸りに送つて上げるけど——」

「でも餘り遅くなりますから、明日またお目にかゝります。」

咲子と水谷少年の間に、別れの言葉が交されるも一緒に、三人を乗せた自動車は、そのまま消えたダイヤの在所へ向けて駛り去つた。

青山の家へ

明い街から暗い通りへ、三人を乗せた自動車は幾度となく街角を曲つて、やつと小暗い街の中に停つた。

眞先に自動車を出た三宅辯護士は、運轉手に何事か命じながら、二人を伴つて門燈もついてゐない右側の大きい石門の前に近づいた。

「百合子さん、あなたが、少時いらつしやつた家といふのはこゝでせう？」

「え、わたし家の中にばかりゐましたので、よく分りませんが、たしかこゝだつたやうに思ひますの。」

百合子が庭を控へた暗い建物を透し見ながら答へた。

「さうでせう。こゝは舊、守島夫人が借りてゐて、後に内海に譲つた家ですから。門燈もついてないところを見ると、まだ空家のまゝと見えますね。入つてゆきませう。」

「でも、一應ことわらなくてもいゝでせうか」

咲子が傍から心許なげに言つた。

「大丈夫です。どうせ空家だし、それに普通の用事とは違ふんですから、何とでも辯明は出来ますよ。」

三宅氏はさう言ひながら、正門と並んだ潜戸を抜けて、砂利を敷いた前庭を右斜に、内支關の前に立つと、そうと雨戸に手をかけた。そこには鍵がかゝつてゐなかつたと見えて、雨戸は音も立てずに開いた。すると三宅氏は、

「こゝに待つて、下さい。今スイッチを探して、電燈を点けますから。」

と云つて眞暗い家の中に入つていつた。二人が内支關の前に身體を寄り添ふやうにして立つてゐると、やがて目の前に明い電燈の光がパツと點いて、三宅氏が此方に向いて麾いた。

咲子と百合子は後について、薄暗い廊下に無氣味な足音を響かせながら、二階から洩れる微か

な光線をたよりに静に静に階段を上つていつた。

「この部屋だつたでせう？」

階段を上りきると、三宅氏がつと後を振り向いて、直ぐ右側の西洋間を指した。

「さうでございます。」

恐ろしい思ひ出に、心を衝かれたであらう、百合子が曇つた聲で答へた。

その時、三宅氏はもう懐中から小さい鍵を取り出して、扉の鍵穴に差込んでみた。そしてどうして合鍵など持つてゐるのだらうと咲子が不審に思ふ間もなく、扉を開けてつかくくと部屋の中に入つた。

仄暗い五燭の電燈、ひびの入つた周囲の壁、そして片隅の鐵格子——それは百合子にとつて恐ろしい思ひ出の部屋であるばかりでなく、讀者の方々も恐らくまた記憶されてゐるであらう敏夫が内海のために圖られて、監禁されたあの密室であつたのだ。

三人の瞳は期せずして、左側の壁、十字になつた壁柱の上にかゝつた油繪の額にそゝがれた。

埃にまみれ、蜘蛛の巣につままれた古ぼけた油繪の額。すすけて色調も變つたそのみすぼらしい風景畫の裏に、何十萬圓とも知れぬ稀代の寶玉、レガリア金剛石が、人目を避けて隠されてゐようとは、誰が思はう！

この部屋の中には、百合子の後に敏夫がゐた。しかし、わが身を救ふに急であつた敏夫は、そ

こに自分が探し求めるレガリア金剛石が隠されてゐるようななどは夢にも思はず、その油繪を振り返つても見なかつた。敏夫の他に悪漢の群が幾度か、この密室に出つ入りつしたに違ひない。守島夫人、内海——そして三宅氏の話によれば、彼等の仲間である石井は、今も尙ほこの家を見張つてゐるといふ。

でも、いくら彼等が疑ひの眼を見はらうとも、よもこの古ぼけた油繪の裏に、レガリア金剛石が隠されてゐようとは氣がつかかなかつたであらう。

三宅氏も咲子も、口にごそ出さなかつたが、心の裡では、この平凡な、しかも奇抜な隠し場所を見出した百合子の頓智に心からの敬意を表して、半ば驚嘆の眼光で額縁を見上げてゐたのであつた。

「この油繪の裏なんですか？」

三宅氏がわれに返つたやうに訊ねた。

「え、あの裏の壁にひびが入つて、ちよつとした孔が出来てゐますの。その中へ隠してありますの。」

「よろしい。ぢや、私が取り出させよう。踏臺がなくてはとどきませんね。」

さう云つて、四邊を見廻した三宅氏は、曾て敏夫が窓から逃げ出した時、細引の端を結へた椅子に目をつけると、それを壁際に引寄せて、足許に氣をつけながら、静にその上に上つた。そして

蜘蛛の巣や埃にまみれた額縁をそつと取り外すとそこに縦横に交錯した壁柱の十字型が現れた。「その右上の隅に小さい孔がございませう。」

百合子が秘密の孔を教へた。

「待つて下さい。ひどい埃で……」三宅氏はハンケチを出して額や目尻を拭ひながら、

「あゝやつと目が開いた。成程、この孔ですね。」

「えゝ、その奥の方を捜して下さいまし。」

三宅氏が食指を突つ込んで、少時、手さぐつてゐたと思ふと、

「ほう、何か觸るものがある。用心して大分奥へ突つ込んだと見えますね。あゝ、やつととゞきましたよ。……出て来ますよ、段々と……。」

その聲が終らないに、紙の中から抜き出された三宅氏の指頭に、燦然たる光を放つ多面形の物體！

三人の口から、思はずアツ！といふ驚きの聲がもれたも當然。それこそ百合子が死を賭して守りとほした、また敏夫や咲子が生命をかけて今日が日まで捜り求めて来たレガリア金剛石であつたのだもの！

「成程、見事なものだ！」

恍惚として、指頭の寶玉に見入つてゐた三宅氏が、先づ感嘆の聲を發した。

「眞實に見詰めてみると眩いやうでございませうね。」

咲子が同じやうに言葉をついた。

「さうでございませう。ですから、わたし頭髮の中に隠してゐた間も、人目につきはしないかと思つて、随分心配しましたの。」

「さうでせうとも。でも、あなたが苦心をなすつたお蔭で、今日まで無事で——」

そこまで云つて、突然、言葉を切つたと思ふと、三宅氏は急に目を見はつて、何事か聞耳を立てた。その様子に咲子と百合子は、怪訝な面を見合せると、

「貴女方には聞えませんでしたか？ 何だか人の足音がしたやうでしたが——。」

「いゝえ？」

「確に階下の廊下を歩く音でしたよ。もしかすると内海の仲間が後を嗅ぎつけてやつて来たかもしれん。先刻もお話したやうに、石井といふ奴が始終この家を見張つてゐるといふ話ですからね。念のために、調べて来ませう。僕が歸つて来るまでこゝに待つて下さい。」

三宅氏はさういふも一緒に、そのまゝ入口の方へ歩き出した。と、何と思つたか、咲子が後から唐突に、

「ちよつと！」と云つて呼び止めた。

「何か御用ですか？」

三宅氏が足を停めて振向くと、

「外へいらつしやるなら、ダイヤをお預りしておきませう。」

「ダイヤを？」三宅氏は意外な面持をしながら、「僕が持つてゐては、心配だといふんですか？」

「さうでもないんですけれど、お預りしておく方が確かだと思ひますの。」

「おや、やつぱり心配してゐるわけせう。大丈夫ですよ。あなた方二人で番するよりも、僕一人の方が餘程安全だと思ひますがね。」

「では、わたし達も一緒に参りますわ。」

「何ですつて？」三宅氏の語氣が打つて變つたやうに急に荒々しくなつて來た。「今のあなたの言葉は、僕を疑つてゐるんですね？」

「いゝえ、そんなわけぢやないんですけれど……。」

咲子は言葉の尻を濁した。

「だつてダイヤをこつち預けよ。でなければ隨いてゆくなんて、僕を疑つてゐなければ云へないことぢやないですか！」

「そんなに仰有るなら、わたしも申しますけど、内海の仲間なんか今頃後をつけて來る筈がありませんわ。」

「だつて現に足音がしたではないですか！」

「いくら足音がしたつて、石井が來る筈は斷じてありません。」

「斷じてない！ どうしてそれが分るのです？」

咲子も咲子なら、三宅氏も三宅氏である。守島夫人のところ初めて知合になつて此來、何にかにつけて少からぬ援助をしてくれた三宅氏に向つて、咲子ともあらう者がどうしてこんなぞんざいな口の利き方をするのだらう。また三宅氏にしたところで何にも顔色を變へてまで詰り程のことでもなさ相に思はれるのに……。

意外？ 眞に意外？

「あなたは僕を疑ひ、僕に反抗しようとしてゐるんですね？」

咲子が黙つてゐるのを見、三宅氏は威壓するやうな口吻で言つた。しかし、咲子も負けてはゐなかつた。

「御自分からさう決めてかゝつていらつしやるなら、世話はありませんわ。失禮な言ひ分ですけど、御自分で疑つてくれと言はんばかりぢやありませんか？」

「な、何んですつて？」

「さうではありませんか。第一ダイヤをわたし達に預けたつて何にも不都合はない筈だし、それに石井がどうかのかうのと仰有るけど、石井なんて人が二人もある筈はありません。」

「え？ 何をいふんです、貴女は？」
 「おとぼけなすつてはいけません。あなたは御自分のお顔のことを忘れていらつしやいますね。先刻、額縁を下してからハンケチで額の埃を拂つた時、左の眉根にはりつけた伴創膏がとれたことに、まだお氣がつかないでせう。その大きい黒子——もう隠したつて駄目です。あなたこそ内海の仲間の石井ではありませんか！」
 少女とは思へぬ大膽不敵な咲子の言葉。その言葉の是非と眞偽を疑ぐる前に、三宅氏の右手が懐を探つたと思ふと、ぬつと咲子の面前に突きつけられた自動拳銃。
 と同時に、三宅氏の顔は見る／＼悪魔の相に變つて來た。
 「ふん、よく看破つた。お察しのとほり僕は内海の仲間、三宅辯護士とは肉身の仲の石井だ。かうなつたら仕方がない、何も彼もすつかり話してやらう。僕と内海は鳳榮丸沈没の當時からダイヤの在所を捜してゐたのだ。それが百合子さんの手にあることを知つて、その行方を捜さうとしてゐる時、内海が銀座のカフェーで君たちに會つて、うつかり百合子さんの名を言つたばかりに、君たちの疑ひを招いて、競争で百合子さんを捜すことになつたのだ。しかし、あの時にはもう守島夫人の手に百合子さんがあることは、僕たちの方で分つてゐたのだ。が、僕たちが守島夫人を捜し出すと同時に、君たちも守島夫人の隠れ家突き止めて、愈々競争の段取りとなつたのだ。ところで内海は君たちに顔を知られてゐる。守島夫人との交渉は自然僕が擔當しなければならなくなつた。が、その僕も、ちらとではあるが丸ビルの事務所と顔を合してゐる。そこで、色々考へた擧句、僕とは瓜二つと言はれる程顔の似てゐる兄が病氣で引籠つてゐるのを幸ひ、たゞ一つ似てない眉根の黒子を隠して、三宅辯護士になりすまして旭アパルトメントへ出掛けていつて、守島夫人に百合子さんの譲りうけを談判したのだ。守島夫人は百合子さんが眞實に記憶を失くしたものと信じてゐたので、僅の金で百合子さんを我々に譲り渡す決心をした矢先、女中に住み込んだ君が餘計な邪魔をして遂々殺してしまつたのだ。殺したと云つては悪いかもしれぬ。しかし、二萬圓の金で賣らうとしてゐた大切の秘密を、脅迫されて君たちにも洩らさなければならなくなつた。そこへ僕が顔を出したので、驚きの餘り心臓麻痺を起して死んでしまつたのだから、君が殺したと言つても差聞へはあるまい。が、結句、守島夫人が死んでくれたことは僕たちにとつては勿怪の幸ひだつたのだ。何故と云つて、僕たちは二萬圓の金を支拂はないで、百合子さんと守島夫人の住居であつたこの家を、そつくり譲り受けたからだ。それからは内海の在所を探さうとして、うるさく付きまとふ君たちを誘ひ出して監禁してみたり、遠方へ連れ出したりして、その間に百合子さんの口からダイヤの秘密を聞き出さうとしたが、百合子さんは何としても口を開かない。一方、君の相棒の笹井敏夫がこゝから逃げ出したので、我々としても油断の出来ないこととなり、最後の手段として百合子さんを引越先の市ヶ谷の家から、わざと隙をつくつて逃げ出さし、自動車ではね飛ばすやうな際どい芝居も演つたのだ。その芝居がうまく當

らなくなつた。が、その僕も、ちらとではあるが丸ビルの事務所と顔を合してゐる。そこで、色々考へた擧句、僕とは瓜二つと言はれる程顔の似てゐる兄が病氣で引籠つてゐるのを幸ひ、たゞ一つ似てない眉根の黒子を隠して、三宅辯護士になりすまして旭アパルトメントへ出掛けていつて、守島夫人に百合子さんの譲りうけを談判したのだ。守島夫人は百合子さんが眞實に記憶を失くしたものと信じてゐたので、僅の金で百合子さんを我々に譲り渡す決心をした矢先、女中に住み込んだ君が餘計な邪魔をして遂々殺してしまつたのだ。殺したと云つては悪いかもしれぬ。しかし、二萬圓の金で賣らうとしてゐた大切の秘密を、脅迫されて君たちにも洩らさなければならなくなつた。そこへ僕が顔を出したので、驚きの餘り心臓麻痺を起して死んでしまつたのだから、君が殺したと言つても差聞へはあるまい。が、結句、守島夫人が死んでくれたことは僕たちにとつては勿怪の幸ひだつたのだ。何故と云つて、僕たちは二萬圓の金を支拂はないで、百合子さんと守島夫人の住居であつたこの家を、そつくり譲り受けたからだ。それからは内海の在所を探さうとして、うるさく付きまとふ君たちを誘ひ出して監禁してみたり、遠方へ連れ出したりして、その間に百合子さんの口からダイヤの秘密を聞き出さうとしたが、百合子さんは何としても口を開かない。一方、君の相棒の笹井敏夫がこゝから逃げ出したので、我々としても油断の出来ないこととなり、最後の手段として百合子さんを引越先の市ヶ谷の家から、わざと隙をつくつて逃げ出さし、自動車ではね飛ばすやうな際どい芝居も演つたのだ。その芝居がうまく當

つて、百合子さんが敦賀の海岸にダイヤを隠したと言つてくれた時には、僕はどんなに喜んだことか。どうせ島田や笹井の前でなければ事實を言ふまいと思つたので、二人を呼んではあつたが、百合子さんがダイヤの所在を言へば、あの二人もその場から駆けつけるに相違ない。先手を打たれては九仞の功を一簣に缺くといふもの。そこは我々はぬかりはない。仲間の内海を東京驛の近くに待ち合させ電話でしらせるやうに、すつかり準備があつたのだ。そして萬事は計畫どほりに行つたのだ。しかし、あれだけに企んだ芝居も、百合子さんの芝居には勝てなかつた。我々は百合子さんのために見事な背負投げを食つたのだ。敦賀から空手で歸つて来た内海の報告を聞いて、地團太を踏んで口惜しがつても仕方がない。我々は更に第二の手段に出て、百合子さんを再び市ヶ谷の病院からつれ出して稲毛の望水樓へ監禁して、否認なしにダイヤの在所知らうとしたのだ。それから後は、もう説明するまでもあるまい。君たちが苦心をしたやうに、僕も變装を看破られまいとして、黒子を隠したり、顔の相好を變へたり、随分苦心したものだ。その甲斐があつて、遂に最後の勝利は我々の手に歸したのだ。今一つ言つておかう、我々はある外人から頼まれて、このダイヤを捜してゐたのだ。その外人はこのダイヤと引換へに、三十萬圓の金を我々に支拂ふことになつてゐる。我々はその金が手に入り次第、日本を後に姿を晦してしまふのだ。可哀相だが、それまでは二人ともここに辛棒してゐてもらはねばならぬ。もし、抵抗するか、聲を擧げて喚きでもすれば、氣の毒だがこの引鐵を引くまでだ。では、左様なら！」

憎さも憎し、三宅辯護仕とは眞赤な偽り、變装の悪漢石井が人もなげなる捨台詞を残して、入口の方へ踵を向けようとしたその刹那、半ば開け放たれたまゝの扉の影から、飛鳥のやうに躍り出した二人の青年。

一人が悪漢石井の頸をハツシと打てば、今一人は背後から石井の頸部に飛びついた。間、數秒。音を立て、拳銃が下に落ちるのも一緒、二人の青年は、石井を床に組み敷いて、大盤石のやうにその背の上に乗つてゐた。

*

*

*

*

*

その翌の日の午前。

數寄屋橋に近いカフェー「あやめ」の階上に、敏夫と三千夫咲子と百合子、それに水谷少年が加はつて、愉快的な慰勞の祝賀會が開かれた。

部屋の中に特別の飾り物こそなければ、數々の御馳走が並べられた食卓の中央には、窓をとほして射し込む麗かな春の太陽をうけて、目も眩いレガリア金剛石の光。テーブルを圍む五人の面も亦、その金剛石のやうに、晴れやかに輝いてゐた。

「愉快だつたね！ 石井の奴に何も彼もすつかり白状させておいて、その後で文句も云はせず捕へるなんて、まるで芝居のやうだつたよ。」

「ほんただわ。でも、ドアの隙間から敏夫さんの顔が覗くまでは、わたし内心びく／＼してゐた

んですよ。」

「ピストルを突きつけられては、誰だつていゝ氣持はしないからね。でも、咲ちゃんは偉いよ。敢然として石井に喰つてかゝつたから。」

「だつて、黙つてゐたら、外からドアに鍵をかけられておいてけぼりを食ふにきまつてゐるんですもの。わたし、最初、あそこへ行つた時から變だと思つたのです。内玄關の前へ眞直ぐに行つて、さつと雨戸を開ける。電燈をつける。それから二階へ上ると直ぐ合鍵を出してドアを開ける。まるで自分の家のやうに振舞つてゐるんですもの。誰だつて不審を起すにきまつてゐますわ。それへもつて来て額縁を取り外した時頭から塵埃をかむつたのでハンケチで額を拭いたでせう。すると、その拍子に大きい黒子が左の眉根に飛び出したので、もう證據歴然、油斷がならぬと思つたわ。でも、あの時、あなたの顔が廊下に見えなかつたら、いくらわたしだつてあんな強いことは言へなかつたのよ。ほんとうに敏夫さんの顔を見た時は、わたし生き更つたやうな氣持がしたわ。それも考へてみれば水谷さんのお蔭ですわね。」

「さうとも、水谷君がゐらなかつたら、どんなことになつてたかも知らないんだ。僕たちも氣が氣でなかつたけれど、内海の奴がしつこく後を追つかけて來るので、仕方なく引返して二人で内海をとつちめめたのさ。すると、そのまゝ打棄つておくわけにもならず、駐在所へ突き出すと、巡査の奴愚圖々々してゐて一時間近くも手間取つたんだ。それから停車場へ駆けつけて、押上から自

動車を飛して三宅氏の家まで來ると、水谷君が門のところに待ち構へてゐて、斯々いふわけで三人で青山の方へ自動車を走らしたが、何だか怪しい氣がするので、僕たちの來るのを待つてゐたといふだらう。その時はまだ三宅氏を疑ぐる氣にはなれなかつたが、水谷君がさういふので、とも角も後を追つて來てみると、僕たちの自動車が停るも一緒、三宅氏の運轉手がバタ／＼と門の中へ駆け込んだので、さてはと思つて後を追驅けて引捕へ、水谷君と此方の運轉手に番をさせておいて、さうつと二階へ上つてみると——勇敢なる吉井咲子嬢が變装の惡漢石井を相手に……」

「戲談ごとちやなかつたわ。あの時のことを考へると。でも水谷さん、あなたはどうしてあの人が怪しいと判つたの？」

「どうしてといふ程の理由もないんだけど、僕は應接間へ通されて、あの人の顔を見た時から變な氣がしてたんです。それといふのが、咲子さんが守島さんのところへ女中に化けて入る前に、あの人が二三度夫人のところへ來たことがあるんです。僕、その時、あの人が石井といふ名刺を一度出したことを覚えてゐるので怪しい／＼と思つてゐたんです。それで應接間に坐つて話を聞いてゐると、咲子さんがダイヤを取出しに行くのは明日にしようと言ふと、内海の仲間の石井が青山の家を監視してゐるからちつとも早く行かなくてはと言つたでせう。で、僕、愈よ怪しいと思つて、用がある風をしてわざと後へ残つたんです。」

「まア、左様だつたの。それでわたし達が助かつたんですわね。左様言へば、三宅さんが石井に

似てるといふことは、始終言つただけで、わたし達はあの黒子ですつかり欺されてゐたんだわ。」

「それに僕達は眞物の三宅さんの顔を寫眞で見てるんだから、なほいけなかつたんだ。何しろ自分から瓜二つと云つてもいゝ位似てると云つてるんだから、黒子を隠されては分りつこないさ。」

「しかし、黒子も黒子だけ、彼等も随分智慧をしぼつて活動してたものですね。自動車の番號を塗り變へて誤間化したり、百合子さんを自動車ではね飛ばしてみたり、それから敦賀行きの時に、病院の前で僕たちを引留めて汽車に乗り遅らせたり、中々苦心をしたものですよ。」

「眞實ですね。でも、敦賀行きは滑稽でしたね。あれは我々も百合子さんに一ばいだまを食つたんだ。ハ、ハ。」

敏夫が大きい聲で笑つた。

「あれは、ほんとうに濟みませんでした。」百合子が詫るやうに云つた。「あの時は、まだ何だか皆さんをお疑りするやうな氣持がしてゐたものですから——」

「何んのくく。」敏夫はあわて、打消しながら「あれで宜かつたのです。あの時、眞實のことを言つてゐられたら、どんなことになつてゐたかしれません。僕たちの云ふのは、内海の奴が自分で敦賀へ行つておきながら、海岸の岩孔へ石井と書いた置手紙を残してあつたので、石井の奴つきりダイヤを取り出して、敦賀の町に朝の汽車を待つてゐるに違ひないと思つて、三千夫君と二人

で黒子附きの石井の人相を言ひながら、敦賀の宿屋を片つ端から捜して廻つたのです。何ぞ圖らん石井は東京にゐて、敦賀へ来たのは内海だつたんだから、いくら捜しても分りつこないんです。それはさうと啖ちやんの佐原行きの経緯はまだ聞かないね。僕と三千夫君とは二日もかゝつて佐原中を捜したんだ。その後から啖ちやんが利根川へ身投げしたなんて新聞へ出たもので、もう二度とは會へまいと思つたくらゐるだ。」

「まあ、そんなことが新聞へ出てたの？ 頼まれたつて身投げだけは御免だけど……わたし、敏夫さんの行方が知れなくなつたので、自動車を捜したり、今から思ふと馬鹿々々しいけど石井の三宅さんところへ相談に行つたりしてゐると、あなたからの電報でせう。開けてみると千葉の香取神社の近くの何とかいふ別荘まで来てくれとあるので、直ぐそのまゝ汽車に乗つたんです。そして夜八時過ぎに佐原で下りると恰度俺も自動車もないので、とぼくと香取まで歩いて、途中で會つた人に別荘を聞いて行つてみると、そこに内海が待ち受けてゐて、逃げようたつて逃げられず、そのまゝ別荘の横手を通つて佐原の町へつれられていつて變な家へ三日程監禁されてゐましたの。そして四日目でしたか、夜東京へつれて歸つてやると云つて、身體一つで何にも持たずに自動車へ乗せられて、稲毛へつれて來られたのです。」

「成程、すると稲毛へつれて來られた時、啖ちやんの洋傘や手提げを内海の奴が利根川の岸へ打棄つて身投げをした風に見せたんだ。つまり僕たちを斷念させるために、芝居を演つたんだ。」

「さうでせう。わたしの持物は何一つ渡してくれなかつたんですもの。」
 「無論、さうだよ。僕と三千夫君とが捜しに行つたことを知つたので、事面倒と思つてそんな芝居を演つたんだ。ところで、これで皆の苦心談はひとほり聞いたわけだが、何と云つても第一の殊勲者は百合子さんだ。その次ぎは咲ちゃん！」
 「いゝえ、わたしよりは敏夫さんが功勞者よ。その次ぎは島田さんに水谷さん。」
 「どうして僕なんか、ほんのおつき合ひで却つてお邪魔をしたんですよ。僕よりは水谷君の方が餘程功勞がある。」

三千夫が謙遜しながら言ふと、その後について、百合子が、
 「わたしこそ皆さまにお詫びやお禮を申さなくてはなりません。わたしのために皆さまに大變御心配をおかけしたのでございますもの。」
 と低い聲で詫るやうに言つた。

「いや、百合子さんは何と言つても別格官幣大社に祭り上げなくてはいかん。第一、身命を投げ出してレガリア金剛石を守つた功勞者だ。百合子さんがなかつたなら、この愉快な大冒険もなかつた筈だからね。それから僕個人としては生命を助けてもらった大恩人だ。石井を逮捕したあの部屋から逃げ出すことが出来たのは、偏に百合子さんのお蔭だ。何としても金鷄勲章功一級は動かぬところだ。」

「さうですとも」 咲子が賛成の意を表した。
 「百合子さんは、全く別格大社にお祭りしなくてははいけないわ。それから後の四人は皆同じやうに功勞があつたことにしておけばいゝぢやないの。」
 「さうだ。それで一つ祝杯を擧げませう！」
 三千夫がさう云つた時、入口のドアがさつと開いて、
 「待つて下さい！ 私も祝杯のお仲間へ入れてもらひたいんです！」
 と言ひながら、つか／＼と入つて來た一人の紳士があつた。

大團圓

「やア、西尾さんですか。」
 敏夫は紳士を見ると、急いで椅子から起ち上つた。
 「さアどうぞ此方へ席をこしらへてお待ちしてゐたのです。皆さんに御紹介します。この方が僕たちに、今度の愉快な冒険を與へて下さつた西尾さんです。ダイヤの秘密や百合子さんのことを教へて下さつた上に、調査を始めてから今日まで隠れたる援助者として、僕達のために精神的にも物質的にも非常な力をかけて下さつた方です。——それから、こちらが島田三千夫君、次が小花百合子さん、その向ふが水谷一郎君です。皆、僕たちを助けて一緒に働いて下さつた方です。」

敏夫が一同を紹介せると、西尾氏は満面に喜びの色をたゞへながら、「皆さんには、何とお禮を申してよいか分りません。敏夫君と咲子さんが非常な活動をして下さったことは、十分に承知して居ましたが、百合子さんの御苦心や、島田さん水谷さんのことは、今朝の新聞を見て初めて知りました。皆さんのかうした冒険と活動のお蔭で、レガリア金剛石は無事に我々の手に入ったのです。重ねて、皆さんに厚く御禮を申し上げます、そこで、一體どういふ理由で、レガリア金剛石の行方捜査を私が敏夫君と咲子さんにお願ひしたかといふこと、つまり私とレガリア金剛石との關係を皆様にお話したいと思ひます。實は、私は大正三年から十年頃まで、政府の重大な使命を帯びて露西亞へ行つてゐたのです。その間に、露西亞のいろ／＼な方面の人々と知己になりましたが、その中に露西亞政府の秘密探偵局長を勤めてゐた人があつてその人が一昨年の十月でしたか、私に手紙を寄越して、露西亞の宮廷から盗み出されたレガリア金剛石が、悪漢の手によつて日本から米國へ運ばれるらしいから、それを途中で逮捕してもらひたい。どうか日本の警察へその旨盡力を頼む、そしてもし無事にダイヤを取返すことが出来たらば五萬圓の謝禮をすると言つて來たのです。そこで早速警視廳へ出頭して手配を依頼しましたが、悪漢の乗つた船が沈没したために、折角の手配も滅茶々々になり、どうやら小花百合子さんといふ少女の方が、沈没の際にダイヤを預つたらしいといふ噂が傳つただけで、話は立ち消えになつてしまつたのです。そこへ敏夫君と咲子さんが新聞へ廣告をせられたものでお知合となり、

大體のお話をして、ダイヤの行方を捜すやうに、お頼みしたわけなんです。簡単にお話すれば、まあ、かういふ譯で、それで私はたゞ今こちらへ參る途中、中央郵便局へ立寄つて、露西亞の友人へダイヤが発見された旨の電報を打つて置きましたから、いづれ近日中に五萬圓のお禮は差上げられることと思ひますが、それまでの間この金剛石は敏夫君と咲子さんの名義で、××銀行の保護金庫へ保管を托したいと思ひますが如何でせう。」

「結構です！ 貴方のお考へどほりになさつて下さい！」

「ぢや、さういふことにして、さて、それでは皆さんと一緒に祝杯を擧げることゝしませう。私が年長の故をもつて、一つ音頭をとりませう。皆さん、酒杯を手にお取り下さい。」

一同が酒杯を手にして立ち上ると、西尾氏が朗かな聲で、

「萬歳！」を叫んだ。その後について、五人は部屋も破れんばかりに萬歳を連呼した。

(をほり)

黄
龍
鬼

電話室の紙片

午後九時三十分、三等特急列車が東京驛に着くと一緒に、プラットホームへ飛び下りた春夫少年は、ぞろ／＼とつゞく人波を縫ひながら降車口へと急いだ。土曜日を中に祭日と日曜とが都合よく、くつついたのを幸ひ、春夫君はお母さんの病氣を見舞ふべく、木曜日の午後東京を立つて、静岡在の郷里へ歸つてゐたのである。それも他のことなら、決して歸省などする筈ではなかつた。お母さんの病氣といふので、仕方なく、氣にかゝる野球試合も見ないで、歸つていつたのである。金曜日がS中學との取組、それは六對二で見事に勝つた。土曜日がK普通部との試合。それも三對二で勝つてゐる。そこまでは新聞で知つてゐるが、さて今日のW中學との決勝戦はどうだつたかしら？

お母さんの病氣が、大分快い方に向いたので、夕方静岡から汽車に乗つた春夫君は、たゞそればかり氣にかゝつて、途中で夕刊も買つてみたが、午後二時締切の夕刊に試合の結果が出てゐる筈がない。

勝つたか敗けたか、一刻も早く知りたさに、特急列車ももどかしい思ひをして、今やつと東京驛へ着いたのである。春夫君が人波を分けて降車口へ急ぐのも無理はない。ちつとも早く自動電話へ駆けつけて、友人のM君に電話で試合の結果を訊かうといふのだ。

切符を渡して、構内電話の前へ急いだ春夫君は、電話室の中をのぞきこんでがっかりした。會社員風の男が交換手を相手に何か大聲で話してゐる。呼出し番號でも聞き違へたのを呷鳴りつけてゐるらしい。

どうせ手間取ると見た春夫君は、足を返すと、さつさと永樂町の方へ歩き出した。呉服橋の袂に自動電話のあることを思ひ出したのだ。

足を早めて、自動電話の前まで来ると、春夫君はドアを開けるも、もどかしさうに受話器を取つたが、間の悪い時は仕方のないもの、先方の電話はお話中。

「なアんだ、折角急いで来たのに……」

春夫君は受話器を元にもどしながら呟いた。その時、ふと眼についたのは、送話口の下に落ちた小さい紙片。

ノートを破いたらしい二寸四方位の紙片の上に鉛筆の走り書き。
次にこの電話室へお入りの方にお願ひ。高輪二三〇七番を呼出し警告を——
餘程慌てたものらしく、後がぶつ切れになつてゐる上に、中には判讀しかねる文字もあるが、
要するに高輪千三百七番の電話を呼び出して、何の意味か警告を發してくれといふのだ。

人殺しだ？

「怪しいナ？ こんなものを置いてゆくなんて？」春夫君は呟いた。「悪戯だらう……きつと高輪千三百七番の電話の持主を馬鹿にするつもり悪戯に違ひない。」

さう思つて、一度投げ棄てた紙片を、春夫君はまた手に取上げて讀み直した。

「もし、眞實に何にか急用でもあつて、書き残したものだつたら氣の毒だナア。まかり違つたつて五錢白銅一つだ。呼び出してみよう！」

春夫君は再び受話器を耳にあてた。

「モシ／＼、高輪の千三百七番！」

交換手が番號を繰返した。先方を呼出す信號が聞える。一分、二分、三分——待ち遠しい數分が過ぎて、やつと先方へ通じたらしい。

「五錢お入れ下さい。」交換手の聲。

チーンといふ音

「モシ／＼。」

春夫君の聲はいやに緊張してゐるが、先方からは何の答もない。

「モシ／＼」春夫君は繰返した。「高輪の千三百七番ですか？」

やつぱり返事が聞えない。いや返事はしてゐるかもしれないが、はつきりとそれが聴きとれな
いのだ。

何だか、送話器へ口をあて、苦しい呼吸づかひをしてゐるやうな音が響く。しかし、それは話を
をする聲ではない。

「モシ／＼、こつちの聲が聞えますか？ あなたは誰方です」

春夫君は聲を張り上げて呼んだ。しかし答へるものは、依然として、苦しうな人の呼吸使ひ
ばかり、その内にどさりと人の打倒れるやうな音がしたと思ふと、突然、

「もう遅い——松井君は今死ぬとこだ！」

と唳鳴り散す聲がした。と同時にガチャンと受話器をかける音がして、電話はふつつり切れて
しまつた。

事は容易でない。今の聲と、初の呻き聲とは明に別人だ。すると、そこには確に二人の人間
がある。しかも、その一人は今將に最後の呼吸を引取らうとしてゐる。他の一人はその傍にあつ

て嘲るやうに叫んでゐる。

「人殺しだ！ きつと人殺しに違ひない！ それで警告の意味が分つたんだ——」
春夫君は電話帳を取上げると、大急ぎでページを繰りながら、松井といふ苗字のところを開けた。そして十も二十も列んだ同姓の中から、高輪局内の居住者をひらつてゆくと、有つた。

先づ目についたのは高輪一三〇七の番號。加入者は松井義郎——
府下荏原郡目黒村××地と、先刻の紙片の端へ書きつけると、電話帳はそこへ投げ出して、後をも見ずに飛び出した。と、折よく通りかゝつた小型の貸自動車！。

「目黒驛まで！ 全速力！」

呼び止めるが早いか、春夫君はもう自動車に飛び乗つて、座席から叫んだ。

ざろりと光る眼

明い町、暗い町を、自動車は全速力で疾驅して、三十分とかゝらないに目黒停車場の前まで来た。「ついでだ。橋を渡つて交番まで行つてくれたまへ！」

自動車が交番の前で停ると、春夫君は運転手に賃銀を拂つて、そこにゐた巡査に松井といふ家を訊いた。

「松井さんですね。これを眞直ぐにゆくと、右側にある和洋折衷の家です。」

行つてみると、成程、和洋折衷の家があつて、門燈に「松井」とある。間違ひない。春夫君は潜門を抜けて玄關に立つた。

呼鈴を押したが返事がない。ドン／＼と玄關のドアを叩いて見たが、やつぱり答へる聲がない。ハンドルを握んで、ぐつと廻すと、意外にもドアはすつと開いた。

春夫君はつか／＼と中に踏み込んだ。電燈はついてゐるが、がらんとした人の居さうな氣配はない。見ると廊下から右が日本室で、左が西洋間になつてゐる。

がうがうと凄まじい音を立て、省線電車が通つた。電車は直ぐ目の下を走つてゐるのだ。異常な緊張に打ち顫へる足許を踏みしめて、春夫君はじつと、耳を立てた。と森とした静けさの中に、變な呻くやうな聲が聞える。それも直ぐ間近に——。

春夫君は聲をたよりに、左側のドアを押した。應接室を兼ねた書齋らしい部屋である。一步その中に足を踏み入れた春夫君は、思はずそこに棒のやうに突つ立つた。

眼の前に——絨氈を敷いた床の上に、洋服姿の一人の男が仰向け様に打つ倒れて、苦しさうに藻掻き足掻いてゐるではないか！

「あなたは松井さんではありませんか？」春夫君は片膝ついて、耳許に口をつけながら訊いた。

「どうなさつたんです？」

「ぼ、ぼくは松井だ……たうとうやられた……。」

いかにも苦しきような聲がきれぐに聞えた。と、思ふと、彼は最後の力を腕にこめて、やつとその頭を擡げながら、

「そ、そこに……そこに……」

と向ふのカアテンを指した。見ると、襖代りに引いた樺色のカアテンの蔭から、ぢろりと此方を睨む異様な顔——春夫君はおやと思つた。

それは日本人の顔ではないのだ。一目でそれと知れる支那人の顔だ。しかも、よく見れば背の曲つた小男の僂儂なのだ。

二人の眼と眼が合つた。と、支那人はひよいとカーテンの蔭から躍り出して、春夫君を目がけてぢろりと詰り寄せて来る。その手には海軍用の大型ナイフが光つてゐる。

流石の春夫君も、これには聊か驚いた。多少の危険はもとより覺悟はしてゐたが、白刃を手にした僂儂の支那人が眼の前から飛び出さうとまでは思はなかつた。

しかし、今更後へは退けない。年齢は十五の少年でも、腕に覺えの柔道がある。相手は高の知れた僂儂のちびだ。

よし、さあ何處からでもかゝつて来い？

暗の線路の上へ

ナイフが頭上にきらりと光つた。

と見る、春夫君はつと身體をかどめて、飛鳥のやうに相手の咽喉へ掴みかゝつた。必死の突撃不意を突かれた支那人はよろ／＼として、どさりと倒れた。その拍子に、ころりと手からナイフが落ちた。

組んずほぐれつの格闘が始つた。二人は上になり下になつて轉げ廻つた。相手が普通の大人なら、もとより春夫君は一とたまりもなく組み敷かれたに違ひない。が、小男の上に僂儂と來てゐる。戦ひは正に五分々々だ。

その中に春夫君は相手の右手を掴んで、ぐつと背後に捻ち上げながら、床の上に落ちたナイフを拾つて、開け放つた窓の外に投げた。

もう安心だ！ 相手は俘虜も同然だ。——と思つたのが間違ひの因、春夫君が氣を許した一瞬間、相手は渾身の勇を出して跳ね起き様、窓を目掛けて走り寄つた。

こゝで逃してなるものか！

春夫君は立ち上ると一緒に脱兎の如く後を追ふた。そして窓から外に飛び出さうとする支那人の後から、さうはさせじと組んでかゝつた。その折も折、また凄まじい速力で電車が通つた。線路は窓の眞下にある。

支那人は一生懸命春夫君の手を振り切つて、ひらりと窓の椽に飛びついた。春夫君も必死だ。

右手を伸して、相手の襟頸をぐつと掴んだ。が、その時支那人の身體は、もう窓の外にあつた。春夫君は襟頸を掴んだまゝ、引ずられるやうに、自分も一緒に窓を外に乗り越えた。そして省線電車の線路へ向けて、急傾斜をした十餘間の土手を二人はころ／＼と毬のやうに轉げ出した。かうなつたらもう運だ！一團となつて轉げ落ちる二つの身體は、ゆくところまで往つて下になつた方が負である。

春夫君はその負け運を引いてしまつた。夢中になつて、相手の身體に組みつきながら、ころころと轉げ落ちてゆく内に、ドシンと背を打ちつけたと思ふと、春夫君は石ころを敷いた線路の上に、仰向け様になつてゐた。でも、春夫君は決してその手を放さなかつた。しつかりと相手の服を掴んだまゝ、上にならうと必死になつて戦つた。しかし先刻からの格闘にいゝ加減疲れた上に線路の上では思ひのまゝに働けない。相手はそこをつけ込んで、咽喉輪をぐん／＼締めつける。苦しい。今にも息が寒りさうだ。このまゝ死んでしまふかも知れない——目の前に薄い霞がかつたやうな氣がする。

海賊團の一味

遠い雷のやうな音を耳許近く聞いて、春夫君はふと目が覺めた。氣がつくと自分は線路の上に寝てゐる。遠雷と思つたのは直ぐ眼の前に進つてゐる貨物列車の

響きではないか！

危ふいところで、轢き殺されるところであつた。慌て、跳ね起きると一緒に、列車は轟々の音を立て、眼の前を走り去つた。

後は眞暗い闇——兩側の家は高い土手の上にある、線路を照す電燈は螢のやうな淡い光を投げてるばかり——僂の支那人は何方へ向いて逃げたのか、皆目見當もつかなかつた。取逃したのは残念だが、後へ残して來た瀕死の人も氣にかかる。春夫君は遂に追跡を斷念して、土手を上へ攀ぢはじめた。轉げ落ちる時は、夢中で氣がつかなかつたが、窓の下には、低い生垣があつた。氣がつかなかつたと云ふよりも、恐らく、窓口からその上を越して墜落したに違ひない。春夫君はその下を潜り抜けて、やつとのことで窓から中に入つた。書齋へ行くと、主人は依然として蟲の息で苦しんでゐた。間諜々々してゐる時ではない。春夫君は支關を外に飛び出すと、近所の醫師へ駆けつけた。醫師が來て、應急手當の注射をすると、主人の松井氏はいくらか元氣を回復して、床の上に起き上りながら、

「有り難う——君のお蔭で、僕は助かつたんだ！」

と春夫君の手を握つた。

「一體どうなさつたんです？あの支那人は何者です？」

「あれは恐ろしい黃龍鬼の仲間だ。僕に怨みを晴しに來たのだ。僕は彼奴を捕虜にしようと思

つて、不覺をとつたのだ。残念だが仕方がない——それにしても、白根君にこの事を云つてやらなくちやならんが。困つたなア。電話がかゝるといふだけ……」

「白根つて如何した人です？ 僕、行つて来ませうか？」

「君が行つてくれる？ 有り難い。御苦勞でも頼む——白根といふのは僕の親友で、一緒に海賊團を探してゐるんだ。永代橋を知つてゐるね。あの橋を渡ると、右側に船津屋といふ家があるんだ。そこへ行つて金仙春と聞いてくれたまへ。」

「金仙春つて、支那人の名前ぢやありませんか？」

「あゝ、名前は支那人だが、その人に會つて、松井の使者だと云へば宜いんだ。」

「分りました。永代橋を渡つて、右側の船津屋といふ家、そこへ行つて金仙春と聞くんですわね。」

「さうだ、濟まないが君、頼むよ……」

「承知しました。ぢや、これから直ぐ行つて来ます。」

暗い階段を上つて

「ストッププー」

深夜の町を、まつしぐらに驅けて来た自動車が、永代の橋に差しかゝると、不意に停車の聲がかゝつた。

「橋向ふぢやないんですか？」

慌て、ブレーキをかけた運転手が、背後を振向く閑もなく、自分からドアを開けて、ひらりと飛び下りた春夫君は、運転手の云ふまゝに、財布を開けて賃銀を拂ふと、そのまゝ足を早めて歩き出した。

行先は無論橋向ふだ。いや、橋の袂を右へ行くのだ。しかし、船津屋と云つた目的の家のまんな前はもとより、その間近くへまでなりと、直々自動車を乗りつけることは、ちよつと考へものだと春夫君は思つたのだ。

何故と云つて、自分が今訪ねてゆくのは變名の入金仙春氏だ。船津屋といふのは何だか知らぬが、隅田の川尻、品川灣を前に控へた河岸ふちの、恐らくは船頭や水夫の出入する酒場か旅籠に違ひない。それが旅籠にしる、木賃宿にせよ、とにかく其處に、支那人の變名を使つて潜み隠れてゐることは、取りもなほさずその周圍に何等かの危険があるといふことを語つてゐると見ねばならぬ。その危険區域へ向けて、夜も眞夜中に近い今頃、堂々と自動車を乗りつけることは、火を掴んで爆薬に近づくも同然だ。

用心に亡びなし、さう考へて春夫君は橋の手當で自動車を棄てたのである。

夜氣深く、長い橋上に一人の人影もなく、霞は大川の面一面に立ちこめて、晝間見る濁江の隅田川とは、まるで異つた趣がある。

橋を渡ると、成程、直ぐ右へ向いて、河岸ぶちをつけた狭い通りがある。街頭の灯もまばらな薄汚いその通りへ、一步足を踏み入れると、潮臭い海の臭気がふんとする。釣道具、あさり、蛤——いづれは海に縁故のある小さい商人の店を一軒々々看板をのぞきながら、二三十間も来ると、目についたは軒にかゝつた舊式の四角い街燈。消えかゝつたその文字を讀むまでもなく、入口の硝子戸に墨黒々と大きく書いた船津屋の三字。春夫君はいきなりその硝子戸に手をかけようとして躊躇した。中から聞える騒がしい人聲。それは、明に酔漢達の聲である。

しかし、愚圖々々してはゐられない。訪ねた家が判つた以上、一刻も早く自分の使命を果さねばならぬ。

春夫君は硝子戸をガラリと開けた。濛々と立ちこめた煙草の煙、胸につかへるやうな酒の臭。その中に細長いテーブルを圍んで、ぐでんぐでんに酔つぱらつた赤黒い四人の顔。一目でそれと知れると船乗なのだ。

變な顔をして、此方を振向く酔漢達には目もくれず、春夫君はつかくと帳場の近づいた。

「伺ひますが、こちらに金仙春といふ方がゐませうか？」

こくりくと居睡りをしてゐた赤ら顔の主人は、きよとんとしながら、春夫君の顔を見た。

「金仙春さん——あゝ、瀬戸物つぎの支那人ですかい。居ますよ。その戸を開けて、階段を上

ると二階の突き當りの部屋ですがね。」

春夫君を教へられるまゝに、帳場の右手を入つて五燭の電燈に照された薄暗い廊下を眞直に、

キイ／＼と音のする狭い階段を上つてゆくと、燈火の點いた突當りの部屋。

「御免なさい！ 金仙春さんはこちらですか？」

飛び出した怪漢

「御免なさい！」

春夫君は繰返して呼んだ。

「金仙春さんはゐませんか。僕は目黒の松井から来たんですが——」

中からは何の答もない。夜が更けたので、きつと眠つてゐるに違ひない。それを起すのは氣の毒だとは思つたが、こゝまで来て引返すわけにはゆかぬ。春夫君はなるだけ音をたてぬやうに用心して、そつと障子を押し開けた。

と返事がない筈。そこには誰も人はゐないのだ。でも、がらんとした部屋の中を見廻すと、新甍がひろげたまゝになつてゐる。壁には支那人がよく冠つてゐる土耳古帽のやうな帽子が、ズボンと一緒にかゝつてゐる。片隅には瀬戸物をなほす道具であらう、小さい鞆も置いてある。それに電燈をつけつばなしにしてあるところを見ると、家を外に出掛けたものでないことは確かだ。

「便所へでも行つたんだらう。少時待つてみよう！」

春夫君は獨言を云ひながら、入口に近いところに坐つた。と、待つ間もなく、ミシ／＼と階段を踏む足音が聞えた。てつきり白根氏に違ひない。

部屋的主人が歸つて来るのに、黙つて坐り込んでゐるといふ法はない。春夫君はつと起ち上つて障子を細目に開けながら階段の方を覗いた。

辨髪をくる／＼と頭に巻いた一人の支那人が、階段を今昇りきつたところである。

「金仙春さんですか？」

春夫君が障子の隙間から顔を出して訊くと、相手はいかにも驚いたやうに、つと足をとめてちつと此方を見詰めてゐる。

「貴方は金仙春さんではありませんか？ 僕は目黒の松井さんから來たんですが……、」

「あゝ、松井さんから——、」

松井と聞いて、やつと合點がいつたらしく、

「あゝ、さうですか——、」

と云ひながら、靜に此方へ向いて近づいて來る。

「松井さんのところへ、僞僂の支那人が來て、ひどい亂暴をしたのです。幸ひに大した怪我はなかつたんですが、海賊の仲間らしいんだから、貴方にさう云つてくれとのことで、僕自動車で驅

けつけて來たんです！」

ちつとも早く、托された使命を果たしたかつた春夫君は、呼吸もつかずに報告した。

「ありがたう、ゆつくりと落ちついた聲で相手が答へた。「それは御苦勞でした。ぢや、此方へ來て下さい。」

さう云つて金仙春氏は、廊下を向ふへ歩いてゆく。何處へゆくのか知らないが、多分、店の者の目につかないやうに、裏門からでも外へ出るのだらうと、その後についてゆくと、前よりもつと險しい梯子段を下り、木戸の鑿を外して、眞暗い路次の中へ出た。路の廣さが先刻の往來とは違ふ。きつと裏通りであらう。

それにしても、一體何處へつれてゆくつもりだらう？ 春夫君は一口も物を云はずに、自分の傍に寄り添ふやうにして、黙々として歩くその人が、何だか變に思はれ出した。

その折も折、目の前の物蔭から、ヌツと躍り出したものがあつた。何の豫告もなく、全く不意に飛び出したので、二人は思はず足を停めた。

「……………」

黒い影が、意味の解らぬ早口で、何か話しかけた。と思ふと、春夫君の傍から、それに答へる聲がした。支那語だ！

おやと思つた春夫君が、暗を透して相手を見ると、これは意外、それは先刻の僞僂ではない

か！

組んずほぐれつ、死物狂ひの格闘を演じた、あのちびつこの僂僂なのだ！

水上の追跡

春夫君がそれと気がついた時、僂僂の方でもやつぱりハツと思つたらしい。互ひに顔を合せた以上、もう後へは退けない敵である。打つか打たれるか。愚圖々々してゐる時ではない。先んずれば人を制すだ。春夫君は身體を曲げ、拳を固めて、僂僂の男の咽喉頸目がけて力一ぱい突つかゝつた。暗中の不意打。拳はうまく下顎を突いて、僂僂のちびはうんと云ひ様打つたふれた。

が、占めたと思つて、ホツとしたのは只だ一瞬。背後から大きな手が、春夫君の肩にかゝつたとと思ふと、野獸のやうな罵聲と共に、殴りかゝつた者がある。

金仙春だ！ いや、金仙春とばかり思つてゐたが、實はさうではなかつたのだ。偽りの金仙春——僂僂と同じ海賊團の一味なのだ。

「何にを！」

搦まれた肩を、死物狂ひで振り切ると一緒に、握り固めた拳固を上げて、盲滅法打つてかゝると、何處へ當つたか急所の一撃。よろ／＼と相手の逡巡／＼閑を見て、春夫君は打倒れたちびの僂

僂を躍り越えて、一目散に駆け出した。

しかし眞暗い路路の奥である。路が何方へ曲つてゐるのか、更に見當はつかないのだ。夢中で遮二無二走つてゆくと、これはしたり、打つかつた行手には見上げるばかりの高い塀。右か左か、逃げ路のあるべき筈を、暗の悲しさ。つい囊の中に逃げ込んだのだ。

足を返せば敵がある。進まんには身長よりも高い塀がある。そのみか、ひた／＼と寄する小波の音。塀一枚を隔て、そこは明に大川の流なのだ。

塀を乗り越えるか？ 後へ退くか？ いづれにしても危険である。だが、退いて支那人の手に捕まるよりも、拔手を切つて向ふ岸へ泳ぐ方が、まだ／＼安全の率が高い。

「よし！ 裸體になつて泳ぐんだ！」

決心すればわけはない。走り高飛の要領、ひらりと両手を塀にをかけて、猿のやうによち昇ると、爪先で足場を捜しながら、塀の彼方へ下り立つた。

見れば大川端は端ながら、そこは大川の支流になつた堀割川の岸であつた。四邊を見廻すと、半町ばかり彼方の河岸に、小型のボートが繋いである。雲を通してはあがあるが、確にボートに違ひない。

「さうだ、あれをちよつと借りてやらう！」

文字通り渡りに舟だ。春夫君はほんたうに救はれたやうにホツとした。しかし、ボートは見

えても、そのボートに近づくことは容易でなかつた。
 何故と云つて、春夫君は今、堀割の河岸縁、岸と堀との僅かな隙間に辛くも身體を置いてゐるのだ。一呎に足らぬその岸の上を、堀に身體をくつつけながら、やもりのやうに横に匍ふ藝當は、六尺の堀を越えるよりも、危険でもあれば、時間もかゝる。
 尺取蟲の進むやうに、一步々々に要心して、やつとボートの傍まで来るには來たが、今度は棒杭にもやいだ綱を解いてのけるに手間がとれた。その綱もやつと解けた。そしてボートを岸に引き寄せて、舷に手をかけた時、シュー、シューと水をきるオールの音。
 「この深夜にボートを漕ぎ出す物好きもあると見える——」
 咄くやうに云つた時、春夫君はハツと思つて身を屈めた。立ち單めた霞の中を、今、眼の前に迫つたそのボートから、聞える二人の話聲——
 それは、明に先刻の二人の聲なのだ。

海賊の巢窟へ

その時、春夫君の心に、異常な冒険心がむら／＼と燃え立つた。
 あの二人が海賊の仲間であることは、少しも疑ふ餘地がない。彼等のために、暗の路上で捕つて、ひどい侮辱を受けることは、春夫君としては到底堪えられなかつたので、必死となつ

て逃げて來たが、先刻と今では場合が違ふ。今度は此方が追つかけるのだ。彼等の行方突きとめるのだ。

この眞夜半に、大川にボートを漕ぎ出すのは、獲物を捜して歩くのか、それとも自分達の巢窟へ歸つてゆくかにきまつてゐる。今一步突込んで考へれば、獲物を捜してゆくにしては、二人といふものは人数が少い。恐らく根據へ歸るのだ。

その根據を突きとめて、それを報告してやれば、何ぼうか松井氏は喜ぶだらう！

春夫君はボートの中へ飛び乗つた。立ち單めた深い霞に、海賊の姿は少しも見えぬ。しかし水を切るオールの音は、直ぐ間近に聞える。その音を目標に、春夫君はなるべく水音を立てないやうに、海賊の後を追うてゆく。

堀割を外に、大川の流に出ると、海賊のボートは左へ向いて進み出した。下流をさしてゆくのだ。

陸上の追跡も同然、つかず離れず、約五六百メートルも來たであらうか、前方を行くオールの音がハタと止んだ。と思ふと、何かしらコトンといふ音がしたきり、後はひつそりとして聽えるものは岸を洗ふ水音ばかり。

二分、三分——春夫君は、聽耳を立て、ちつと待つた。が、何時まで経つてもオールの音も、話聲も聽えて來ない。たうとう我慢がしきれなくなつた春夫君は、今物音のした方向へ靜に——

ボートを進めた。

と、これは意外、五六間もゆかないのに、ボートの舳がゴツンと何かに突き当たった。見ると、それは河岸ぶちの棒杭——四邊にはボートも海賊の姿もない。

水を切るオールの音が聞えないのに、ボートを漕ぎ去った筈がない。それなら何處へ行つたらう？ ふと氣がつくと立ち竝んだ二本の棒杭の向ふに、黒い水門の口が見える。

「あすこだ！」

春夫君は思はず膝を打つて呟いた。と同時に、何を躊躇ふこともなく、水門に向けて一直線に船を進めた。

地下室の抜路のやうな穴を、ぐんぐんと進んでゆくと、有つた！ 一隻のボートが水門の行詰りに繋いであつた！ やつぱりこゝだ。

それにしても彼等は何處へ行つたらう？

春夫君は石段を昇りながら、四邊を見廻すと、右斜に縫ふた小路の奥から洩れて来る燈火の線！

「あすこだ！」

春夫君は拔足差足、燈火を目的に近寄つた。がやくといふ人聲——それがみんな意味のわからぬ支那人の聲だ。

春夫君は燈火の漏れる穴を睨んだ。やつと小犬一匹抜けられる位の穴である。

「虎穴に入らずんば虎兒を得ずだ！」

春夫君は四つん這ひになつたと思ふと、身體を斜にして、生命懸けでその穴をくぐり抜けた。

身體を斜にして、やつとの思ひで、その穴をくぐり抜けた春夫君は、ホツと大きな呼吸をした。たうとう虎穴へ入つたのだ。

見ると光線は直ぐ右手のカーテンの間から洩れて来る。抜き足、差足、厚い緞子のカーテンの前まで進んでそうと隙間に目を當てると、春夫君は思はず一步後へ身を退いた。

揃ひも揃つて恐ろしい面構へをした十四五人の支那人が、二つのテーブルを取圍んで、酒を啣りながらガヤ／＼と騒いでゐるのだ。その中には例の僮僕の小男もゐる。

こゝが海賊團の根據にきまつた。もう他に用はない。ちつとも早く取つて返して報告しよう！ さう思つて足を後に返さうとした時、大蛇のやうな二つの手が、春夫君の背後からむんづと頸筋を捕まへた。聲を立てる閑もなかつた。いや、大鷲の爪にかゝつた小雀も同然、聲を立てるこ

とが出来なかつたのだ。

羅漢のやうな支那人が、春夫君を輕々と兩手に掴んで、部屋の中へ入つてゆくと、僮僕の小男が眞先に立ち上つて、大きな聲で喚いた。その後から一同ががやく／＼と騒ぎ出した。捕まれた頸筋の痛さに、春夫君は目を白黒させて藻掻いてゐた。自分がどうされるのか、彼等が何を云つて

るのか、そんなことを考へる餘裕もなかつたのだ。すると大將らしい一人の支那人が、傍へやつて来て、手にしたタオルでぎゅうと春夫君の顔を包んだ。

と同時に、頸筋を掴んだ手がゆるんだ。しかし目隠しをされた春夫君は、一切の自由を奪はれたも同然、もう、どうすることも出来なかつた。

「僕は日本人だ！」

春夫君はふと目を醒した。

長い夢を見つゞけてゐたやうな気がせられる。それも餘りに長い夢だつたので、何に一つこれといふ記憶もなく、何だか頭の中に薄い霞でもかゝつてゐるやうな氣持である。

「一體、自分は何處にゐるのかしら？」

見れば周囲は眞白い板の壁、天井からぶら下つた五燭の電燈、部屋の中には汚い眞蘆が敷いてあるきり。自分は今までその眞蘆の上で寝てゐたのだ。

見覚えのない部屋である。勿論自分の居間ではなく、友達の家でもない。

「はて？ こゝは何處だらう？」

立ち上らうとすると、足許がゆらくとする。足が痺れてゐるのかしら？

いや床が——部屋

全體が揺れてゐるのだ。いよくもつて合點がゆかぬ。

見ると、向ふに扉がある。

不甲斐ないが仕方がない。春夫君は四つん這ひになつて、扉の傍まで匍つていつた。そして右手を伸して、把手につかまり、やつと兩足をぐつと踏へた。それから扉を開けようとしたが、鍵がかかつてゐてびくともしない。

ドン／＼と叩いてみた。しかし誰も答へる聲がない。耳をすますと、何處かで波の碎けるやうな音がする。その間にも、身體はゆらりと揺れて、把手を掴んだ手を離せば、そのまゝバタリと倒れさうだ。

「これは船だ！ 海の上だ！」

春夫君は思はず叫んだ。と同時に、今までぼんやりしてゐた頭腦の中が、急に油を注された機械のやうに、目眩しい活動をはじめた。

——目黒から永代橋へ——船津屋を出て、あの暗い路路での大格闘——ボートで、二人を追跡して、海賊の本據へ忍び込んだあの冒険——それから誰かに頸筋を掴まれて、否應言はさず目隠しをされたあの瞬間。

そこまでは、瞭々と目の前に思ひ浮ぶ。が、それからさきの記憶の絲が断れてゐる。タオルか何かで、ぎゅつと兩の眼を包まれた瞬間、呪文のやうな聲を聞いた。それが記憶の最後である。

「はテ？ それから如何されたんだらう？」

いくら考へても、中斷された記憶の絲は、再び甦つて來さうにない。

「しかし、この船が海賊船であることは、疑ふまでもないことだ。自分は彼等の俘虜になつて、此室へ監禁されてるのだ。春夫君はだん／＼と考へを深くすゝめてゆく。」でも、自分をこゝへ監禁して、どうしようと云ふのだらう。殺してしまふつもりだらうか？ それとも支那へでもつれていつて賣り飛す考へだらうか？」

何にしても船は動いてゐる。支那の海賊船だ。行先は他にあらう筈がない。

「こいつ油斷ができないぞ！」

春夫君が我にもあらず呟いた時、カチリと音がして、扉が靜に開いたと思ふと、ものも云はずに這入つて來た辮髪の支那人。見れば汚い服装をした釜焚きの火夫。

春夫君は思はず拳を固めて身構へた。と相手はそれを制しながら、
「慌てゝはいけない！ 僕は日本人なんだ！」

變裝の男の正體

「僕も日本人だ！」——聞くからに齒切れのよい日本語。正しく、それは變裝した日本人だ。しかし同胞だとして、油斷は出來ない。やはり海賊の仲間かもしれぬ。

「その様子で見ると、君はこの船がどうした船だか知つてゐるね？」

變裝の男が靜に訊いた。

「僕、今氣がついたんですが、海賊船でせう。この船は？」

「さうだ。海賊船だ。で、君はどうしてこゝへ連れて來られたんだ？」

「知るもんですか、そんなこと。僕はボートで海賊を追つかけて行つて、彼等の巢窟へ忍び込んだところを捕まつたんです。」

「海賊を追つかけて行つた？」 變裝の男は急に眼を輝して訊き返した。「ちや、君は最初から海賊だと知つてゐたんだね？」

「えゝ、知つてゐたんです。僕はある人に頼まれて、永代橋の船津屋へ行つたんです。すると訪ねる人がゐなくて——」

「ちよと待ちたまへ。船津屋へ誰を訪ねて行つたんだ？」

「金仙春といふ變名の——」

「金仙春を？ で、誰に頼まれて？」

「松井といふ人です。」

「や、これは奇遇だ！ 僕はその金仙春だよ。」

「えゝ！、ちや貴下は白根さんですか？」

「さうだ、僕が白根だ。」

ほんとの奇遇だ。深夜の道を自動車を飛ばして訪ねていつたその人、白根氏がこゝにゐようとは？　これが奇遇でなくて何であらう。

「それぢや、君は松井君に頼まれて、船津屋へ僕を訪ねて行つたんだね？」

「さうです。僞僞の海賊が松井さんを襲つたことを、貴下に報告してくれと云ふので、僕は目黒から自動車を飛ばして船津屋へ駆けつけたのです。すると貴下がゐないので待つてゐると、そこへ支那人がやつて来たので、僕はつきり貴下だと思つて後へ随いて行つたんです——」

春夫君はそれから海賊の根拠へ忍び込んで、捕つたまでのことをすつかり話した。

「さうかね、それは君に濟まなかつた。僕はあの日は朝から海賊の後を尾けてゐたんだ。すると海賊の一人、吳巻章といふあの僞僞が松井君を襲ふことが分つたんだ。が、僕は海賊團の團長を尾行してゐる、それにあの晩、海賊船が出帆することも分つたので、前日から火夫に化け込んでゐた僕は、ちつとも早く船へ乗込まなくてはならなかつたのだ。そこで松井君に電話を掛けたが話中で通じない。仕方がないので紙片へ松井君の電話番号を書いて、後から入つた人は電話をかけてもらつつもりで、常盤橋の自動電話へ投げ込んでおいたんだ。」

「僕がその紙片を見て、松井さんへ電話をかけたんです。」

「ほう！　それは愈よ奇縁だ。」金仙春の白根氏は事の意外に驚きながら、「ところで、まだ君の

名を聞かないが——」

「僕は明智春夫といふです。」

「春夫君、うむ冒険少年には優し過ぎる名前だね。が、君、元氣はいゝかね？」

「元氣は大丈夫ですが、腹がペコ／＼です。」

「さうだらう、四日も食はず飲まずで寝てゐたんだもの。」

「四日ですつて？」春夫君はわれながら驚いた。では、あれからもう四日の日が経つたのか。それにして、船は今何處を通つてゐるんです。

「もう間もなく門司へ着くところだ。」

「えゝ、門司へ！」

「さうだ、君が寝つてゐる間に、品川灣を出て、相模灘から紀淡海峡を通つて、今瀬戸内海を走つてゐるんだ。」

「それで、これから支那へ向いて行くんですか？」

「さうなんだ。門司へちよつと寄つて荷物を積んだら、そのまま支那へ直航するんだ。それについて、一つ君に相談があるんだがね。どうだ、春夫君。冒険ついでに、君支那まで行つてくれな

いか！」

甲板の箱の中へ

「實は僕自身で、海賊の根據を突止めるつもりで、かうして火夫に化け込んだんだ。ところが僕が日本人だといふことを彼等は薄々気がついたらしく、船が日本を離れたら、僕を殺さうと計畫してゐるのだ。」

白根氏の聲は低い。が、その聲には熱がある。

「無論、僕は生命なんか惜しくはない。しかし目的を達しないで、犬死するのは残念だ。卑怯なやうでも、今少し生命を大切にして海賊の正體や本據を突止めたうんだ。それでだ、僕に代つて、君に支那まで行つてもらひたいんだ。」

「よろしい、僕行きませう！」春夫君はきつぱりと答へた。

「行つてくれる。そいつは有り難い！」

白根氏は我意を得た嬉しさに、春夫少年の手をぎゅつと握つた。

「ちや、もう時間がないから、大急ぎで話をしよう。この船の奴等は黃龍鬼といふ支那の海賊團の仲間なのだ。黃龍鬼の一味が、悉皆、この船に乗り込んでゐるなら、こゝまで尾けて來ないでも品川灣で一網打盡にやつつけたんだ。が、この船は彼等の手先きに過ぎないので、黃龍鬼の本據は支那にあつて、東洋一帯に亘つて悪事を働いてゐるらしいんだ。いや、或は單なる海

賊ではなくて、もつと大きな秘密があるかも知れぬ。現に彼等が日本へ來て、品川灣へ船をつけ、たのも、密に武器や彈藥を購入れて、支那へ運ぶのが目的で、甲板や船艙には一ぱい小銃や彈藥を積んでゐるんだ。

「それで、僕の考へは、この船の船員に化けて、彼等が船に積んでる小銃や彈藥を何處へ陸揚げするか、また彼等の根據地が何處か、それを確めた後、日本なり支那なりの政府と打合せて、徹底的に彼等を緘滅するつもりだつたんだ。が、今も云ふとほり、僕の身邊が危ふくなつた。で、僕は仕方なく門司で上陸して、後の事は君に頼み、君からの通信を待つて、更に第二段の活動をしよう」と決心したのだ。かういふ譯で、これは東洋の平和のために、生命を投げ出してかゝつた國家的の大探偵事業だ。君もその心算で身命を賭して働いてくれたまへ！」

「判りました！ 生命がけでやりませう！」春夫君の言葉は感激に顫えてゐた。「しかし、僕はど

うすればいゝんです？ このまゝでは、僕だつてどんな目に遭ふかしれません。」

「それは僕が心得てゐる。此方へ來たまへ。僕は君のために好い匿れ場所をこしらへておいたんだ。」

白根氏は春夫君を磨きながら、扉を開けて外に出た。空は暗く、海も暗い、直ぐ間近に黒い

島山が影繪のやうに浮いて見える。海賊船でも、品川からこゝまで乗つて來た船だ。それからもまだ乗つてゆかねばならないの

だ。どんな船か、大きさはどれ位か、調べてみたいは山々だが、今の場合、そんな餘裕は少しもない。そここゝに點つた仄暗い電燈を便りに、左舷の甲板を、ゆらめく足を踏みしめ、尾いてゆくと、白根氏は前甲板の通風孔の傍まで来て、つと足を停めたと思ふと、

「春夫君！」と目の前に山と積んだ箱の一つを指しながら、

「これだよ、隠れ場所と云ふのは。」

「えー！ その箱ですか？」

流石の春夫君もこれにはちよつと驚いた。

「さうだ。この箱の中へ匿れて行くんだ。僕が四晩かゝつて拵らへた箱だ。少しは窮屈だらうが、決して息の寒るやうな心配はなく、向ふ一週間分の食料も入れてある。それから中につかまるところが出来てるから、陸揚げをする時には、しつかりとそれへつかまつてゐたまへ。海賊共は他の箱同様、小銃が入つてゐると思つて、決して怪しみはしないんだ。それで陸揚げが済んだら、そつと忍び出て、最寄の郵便局から直ぐ電報を打つてくれたまへ。それから、其附近に潜んでゐて、これらの武器を何處へ送るか、それを見届けてくれれば、更に結構だ。」

「承知しました。しかし僕があゝの部屋にゐないことを知つたら、海賊共は不審を起しはしないでせうか？」

「その點は、大丈夫だ。僕に名案がある。僕はこれから行つてあの室の扉を内側から壊しておく

んだ。そして今一時間もすれば、門司の港外へ差し蒐るから、皆が目を醒すに違ひない。その時分を見はからつて、何か重いものを僕が海の中へ投げ込むんだ。すると彼等は無論君が扉を破つて海へ飛び込んだと思つて、騒ぎ出すに極つてゐる。それを利用して、今度は僕が巧く脱船しようといふ計畫だ。その邊のことは僕に委しておきたまへ。決して心配ないんだから。」

「よく判りました。それで電報を打つ先は？」

「それはこの名刺に書いてある。それから、この囊には彼方へ上陸してからの旅費と電報料が入つてゐるから、持つていつてくれたまへ。苦しいだらうが、骨折甲斐のある仕事だ。一つ生命を投げ出すつもりで、働いてくれたまへ！」

難航海を終へて

身體だけやつと入れる位の、寝返りも自由にならない細長い箱。それも荒削りの板を打合せただけの箱の中に身を忍ばせて、頭部の方に開いた小さい錐の孔からやつと呼吸をつづけながら、堅パンと水筒の水に露命を繋いで、春夫君は海賊船の甲板にまる二日の目を送つた。

二日目の夜、船は難航海を終へて、遂に目的の港に着いたらしかつた。

甲板の上が段々と騒々しくなつて来た。耳許近く波を蹴つて蒸汽艇の駛る音が聞える。

やがてポツポツといふ長い汽笛が頭上に鳴つて、何かに打突る衝撃と共に、汽船はびたりと進航を止めた。と同時に繫索を投げる音、埠頭と甲板から互ひに呼び合ふ聲。船は正しく目的の港に着いたのだ。

春夫君の心に躍る。愈よ使命を果す時が近づいたのだ！ それからの二三時間を、春夫君はどんなに緊張した氣持で待つことであらう。陸揚げの時に、感附れはしましいか！ 感附かれな いまでも、甲板から力一ぱい投げ出されはしまいか？ 陸揚げされてから下積になりはしないだらうか？

しかし案じる程のことはなかつた。小銃や彈藥が入つてゐるので、特に大切にしたり。箱は一つ／＼起重機にかけられて、波止場の上に卸され、春夫君の入つた箱は一番遠くにあつたため、一番最後に卸されて、最上層に積み上げられた。お蔭で出入は自由なわけ。

「それにしても、一體こゝは何處だらう？」
どうせ支那の何處かの港だとは分つてゐるが、さてそれが何處なのか、一刻も早く知りた い。

不思議な男

春夫君はそうと細目に蓋を開けた。

眞暗い夜の港、橋頭の燈火を點した大小の帆船や汽船。目を轉ずると薄靄をとほして瞬く海岸の灯。そこに立ち並ぶ洋館の建物——。何處か遠く／＼歐洲の港へでも來たやうだ。
四邊を見廻すと人氣はない。

「よし、今だ！」

春夫君は急いで箱の中から脱け出した。そして山と積んだ箱の椽につかまつて、そうと地上に足を下した。白根氏から渡された囊に、腰の帶皮に結へたまゝだ。

先づ市街へ足を踏み込んで、第一の電報を打たねばならぬ。小銃や彈藥が、何方へ向いて運ばれてゆくか、それを見届けるのは、第二の仕事だ。

とに角、托された使命は、夜さへ明ければ果されるのだ。それも今一二時間の後である。春夫君は躍る心を抑へながら、眞直に埠頭の道を足も軽く歩いていつた。道の兩側のそこ／＼に、陸揚げされた貨物が積んである。その前へ差蒐る毎に、春夫君は暗い貨物の影に、誰か隠れてゐるやうな氣がしてそうと四邊に氣を配つた。そして長い／＼一本道を半分近くも來た時であつた。

春夫君はつと足を止めて振り返つた。誰か後から呼んでゐるやうな氣がしたからだ。見ると背の高い一人の男が、此方へ向いて歩いて來る。海賊の仲間かも知れぬ。掛りあつては厄介だ。春夫君は素知らぬ風をしてまたすたと歩き出した。すると、
「君々！」とその男が呼びかけた。

「僕ですか！」春夫君は再び足を止めて、振り向いた。
 「さうだ。君を呼んでるんだ。」明晰な日本語が聞えた。
 「君はこれから何處へ行くつもりだね？」
 「知人のところへ行くんです。」
 「知人のところへ？　しかし、君は乗船券を持つてゐない！」
 「え……」春夫君はぎつくりとした。
 「乗船券がなくては、上陸は出来まい。貨物箱の中から飛び出したところを見ると、旅券は持つてない筈だ——しかし、そんなことは如何でもいゝ。僕の後に随いて来たまへ！」
 不思議な男は、さう云つてぐんぐんと歩き出した。
 その聲にも態度にも抵抗しがたい一種の威厳があつた。春夫君は云はれるまゝに、その男の後に随いて行くの他はなかつた。

頭の後に光る眼

「乗船券をもたずに上陸は出来まい。僕の後に随いて来たまへ！」
 背の高い不思議な男は、さう云つて、ぐんぐんと歩いてゆく。一種の威厳をもつたその態度と言葉に氣をのまれて、春夫君は心ならずもその後について歩き出した。

長い棧橋を突つ切つて、切符の改札口まで来ると、その男はズボンの衣囊から無雑作に幾枚かの銀貨をつかみ出して、眠むさうな顔をして立つてゐる改札係の手に握らしながら、言葉も云はずに外に出た。春夫君も何にはぬ顔で、その後についていた。
 改札口につゞく廣場をぬけると、そこにもう立派な西洋建築が立ち並ぶ海岸通りであつた。東京にも見られないやうな立派な街！　一體こゝは、何處だらう？
 春夫君はそれを知りたかつた。そして一刻も早く白根氏に電報を打ちたいと思つた。が、方角さへも分らない深夜の街である。灯の入つた商店の窓を覗いても、夜目にはハッキリ判らぬ英語の金文字ばかり。それに不思議な男の後を、引きずられるやうな氣持で歩いてゐては、ゆつくりと四邊に眼をやる暇もない。
 「それにしても、一體どうした人間だらう？」
 あれきり口もきかねば、振向きもせずたゞ黙々として大股に歩いてゆく。不思議な人の後姿を見上げながら春夫君は考へる。
 「四邊には誰もゐなかつた筈なのに、自分が箱から出たことを知つてゐるのが不思議だ。きつと海賊船から見えてゐたんだ。それに改札係を誤魔化したところを見ても、尋常者とは受取れぬ。海賊だ、海賊に違ひない——」

さうなると、おめくこの男の後に随いて行くのは危険である。此上、彼等海賊團の巢窟へ

つれ込まれてひどい目に會はされたりしては、折角の大冒険も水の泡だ。九奴の功を一簣に缺くといふもの。宜し、相手が後を振向かないのを幸ひ、何處かそこで逃げ出してやらう。さう決心した春夫君が、何處か逃げ込む露路でもないかと氣を配りながら歩いてみると、突然、不思議な人の聲がした。

「びく／＼したまうな、君も海賊船へ乗つて来た日本男兒ぢやないか。安心して隨つて来たまへ！」

頭の背後にまで眼をもつてゐるのだらうか、振向きもせねば足も止めずに、相手の腹の底まで看抜いたやうなその一言——春夫君は思はずぞつと身顫ひした。

黒猫の妖術

「こゝが僕の住居だ。さあ、入りたまへ。」

海岸通りを右に折れて四五丁、小高い山の手の中腹に建つた小さつぱりした洋館の前まで來ると、不思議な男はさう云ひながら、自分から門を開いて中に入った。

今更逃げ出すわけにもゆかぬ。云はれるまゝに石段を踏んで、玄關を中に通ると、少時此方で待つやうにと云つて、通されたのは左側の小さい一室。これと云ふ裝飾もない代りに三方の壁に沿うて立てられた書棚には、何千冊とも知れぬ和洋さまざまの書物が、すき間もなく詰め込まれてある。

である。

春夫君はいさゝか豫想が違つたのに驚いた。今の今まで海賊だとはばかり思つてゐた不思議な男が、こんなに澤山の書物を持つてゐようとは意外である。少々見當が違つたぞ——海賊ではなくて立派な學者かも知れぬ。

春夫君が頭を傾げながら、そんなことを考へてゐると、入口とは反對の側にある扉が靜に開いて、眞黒い寛衣に着換へた不思議な人がこちらへと云つて麾いた。

そこは十疊敷もある大きな部屋で、西側には美しい飾り硝子の窓があり、周圍の壁には古代の武器や、掛物などが調和よく飾られてあつた。それに天井から吊り下げた三つの電燈は、床に敷きつめた緋色の絨氈を眩いばかりに照して、中央に据ゑられたテーブルにも、椅子にも、この家の主人公の尋常ならぬ趣味性がうかゞはれた。

「その椅子へかけたまへ。」

不思議な人はストーヴの前の椅子を指しながら、自分も對ひ合つて腰を下した。春夫君は初めて、正面からその顔を見ることが出來たのである。年齢は三十七八でもあらうか、色の白い輪廓のくつきりした顔貌、そして見るからに頭の鋭さを示す慧者の眼光。と云つて、それは暗の棧橋で想像したやうな薄氣味悪い顔ではなく、威嚴の中に優みをもつた人なつこい顔である。

「下關からこゝまで、箱の中に入つて來ては随分草臥れたらうね」

不思議な人が口を切つた。

どうしてあの船が下關から来たことを知つてゐるだらう。やつぱり海賊の仲間かしら？

それとも海賊を欺いてあの船へ乗り込んでゐたのかしら？

春夫君が怪訝な面持をして、相手の顔を見詰めてゐると、

「何も驚くことはない。あの海賊船が一週間前に品川灣を出て、下關を通つてこゝへ着いたことは、すつかり分つてゐるのだ。」

「どうしてそれが分つたのです？」

「如何してつて、僕は魔力をもつてゐるのだ。」

魔力だなんて出鱈目にきまつてゐる。やつぱり海賊の仲間だらうか？ でなくて、海賊船の行動を、そんなに詳しく知つてゐる筈がない。しかし顔を見ても、言葉を聞いても、真正銘の日本人に違ひない。

春夫君は何と答へていゝか、どう判断していゝのか、困つてゐると、

「ハ、ア、まだ僕を疑つてゐるね。では一つその魔力を君に見せて上げよう。」

不思議な人は、さう云つて傍のテーブルの上から二尺四方もある畫用紙と木炭を取り上げて、ピューと一聲鋭く口笛を吹いた。と思ふと、突然、何の豫告もなく、大きな黒猫が、部屋の片隅に現れて、長い尻尾を振りながら二人の前に近づいた。

「この猫を見たまへ、不思議な人は俯向いて黒猫の脊を撫でながら、「こいつは、僕のたつた一人の親友だ。僕の手ともなり、足ともなつてくれる友達だ。僕が一言、こいつに命ずれば、世界中のいかなる學者も、舌をまいて驚くやうな摩訶不思議の力を示すのだ。いや、口上は後からでいい、百聞は一見に如ずといふことがある。先づ實驗して見ることにしよう。」

何にをすると云ふのだらう？ 春夫君が呆氣にとられて見てゐると、不思議な人は木炭を右手

に持つて、眞白い畫用紙の面へ1から9までの西洋數字を二段に書いて、ストーヴの前、絨氈の上へそれを置くと、今度は足許にうづくまる黒猫を抱き上げて、その耳許に何事か囁き出した。

コップの水

主人の言葉が終ると一緒に、黒猫はひらりと膝から飛び下りた。

春夫君はまばたきもせず眼を見はつた。と、猫は紙の上のそりくと、這ひ上つて、右前脚で上段に記した1の字をきつと踏んだ。

「よろしい。」不思議な人が聲をかけた。「大正元年と判断する。次は？」

すると1を踏んだ黒猫の足が、後へ戻つて8を踏へた。

「よろしい、八月と判断する。その次は？」

右前脚が再び向ふへ進んでいつて、2の字を踏んだ、と同時に、左前脚が斜に下段の7を踏ん

だ。

「よろしい。二十七日。間違ひはないな？ よし／＼。さあこつちへお出で……」

不思議な人は再び猫を抱き上げた。

「大正元年八月二十七日——この日は君にとつて、何か深い縁故のある日であらう？」

急に改つた言葉の調子。

ハツと我に還つた春夫君は、愕然として驚いた。年月日を切り離して別々に聞いたがためではない。不思議極る猫の動作に眼を見はつて、他の何事を考へる餘裕もなかつたといふのが眞實だ。

「が、今、大正元年八月二十七日と一息に云はれてみると、思ひ出すも出さぬもない。それは自分——明智春夫が、この世に呱呱の産聲を挙げたその年月日ではないか！」

「それは僕の生れた日です！」

「さうだ、大正元年八月二十七日は君の生れた日だ。それをこの猫は知つてゐるのだ。いや、猫が知つてゐると云ふよりも、かうした不思議が出来るやうに、僕が教へ込んだのだ。そこでちや、一匹の猫にさへ、これだけのことが出来るなら、人間にはもつとく靈妙不可思議な力があるべき筈だ——新しい文明、新しい學問は、この世界に不可思議はないと教へる。しかし僕をして云はしめれば、世界至るところに不可思議はあるのだ。遠くに求めずとも、我々の眼前一步の

ところにある。いや、一步を隔てず、我々自身が既に解き難い不可思議な謎ではないか。君にはまだ解らんかも知れないが、我々が死んでしまへば後はどうなる？ 學者は灰になると云ひ、坊主は靈だけは肉體を離れて天へ昇るといふ。そのいづれが正しいか、學者も宗教家も互ひに自分の方が眞實だと信じてゐる。笑止な話ぢや。」

「あなたは何方が正しいと思ひます？」

話につりこまれた春夫君が、今の驚きも忘れて熱心に訊いた。

「さア、それは僕にも判断がつかぬ。今云ふ不可思議の一つぢや。しかし、うまず撓まず研究を續ければ、その不可思議もやがて分つて來ると思ふ。」

「何を研究すればです？」

「摩訶不思議の力だ。今日の學問では判断の出来ない魔力だ。今一つ二つ、その不思議な力を君に見せよう——その棚にあるコップと水壘をとりたまへ。」

春夫君がストーヴの傍にある棚の上からコップと水壘を取つて渡すと、主人公はコップに満々と水を注いでテーブルの上に置き、背後を向いて姿見の前にある燭臺をとつて火を點した。そして溢れるばかりの水の眞上に、手にした蠟燭を斜にしたながら、

「さア、これから二十算へる間、コップの中を見詰めてゐたまへ。」

燃えてゆく蠟燭の焰の下から、透明な蠟が水の上にポタリと落ちた。

一滴、二滴、三滴、
不思議！ 不思議！

その一滴々々と共に、そして口中靜に數を讀む主人公の聲と共に、コップの水は見る見る内に減つていつて、瞬く間にコップの中には一滴の水もなくなつた。

腕に浮出た文字

コップの底に、或はその蠟燭の蠟の中に何か仕掛があるだらうか？ それとも自分の眼が催眠術にでも罹つてゐるではあるまいか。

春夫君がわれと我が眼を疑ひながら、茫然として見詰めてゐると、

「立ち上つて、よくコップの中を見えてきたまへ、確に水は一滴もないのだ。」

立ち上るまでもない目と鼻の間。コップの中は乾したやうに綺麗である。

「それでは、今一度、コップに注意してゐたまへ。」

蠟燭は再び手にとられた。そして萬事は前と同様、たゞ二十の數を逆に算へてゆくのが違つただけ。

十九、十八、十七——

見よ！ コップの中には、何處から湧き出づるともなく、澄み切つた液體がもく／＼と湧き上

つて来るではないか。

八ツ——七ツ——六ツ——五ツ——

水は既にコップの縁に漾々として、微妙なる表面張力に辛くも支へられてゐるばかり。

そこに數秒の沈黙があつた。餘りの不可思議に、感嘆の聲も出ない驚きの沈黙であつた。

その間に、主人公は水壘の中にコップの水を戻して、春夫君の前に空のコップを差出しながら、

「ようく、このコップを注意して檢べたまへ。奇術師が用ひるやうな二重底の仕掛けはないのだ。」

春夫君は云はれるまゝに手にとつて、内側から外側から、注意の上に注意して檢べてみたが、無論どこにも仕掛けはない。やはり普通のコップである。

「僕には分りません。これに仕掛けのないことだけは確ですが——」

「分らんと云ふのは、手品の種が分らないといふ意味だらう」主人公が——不思議な人がにやりと笑つた。「君はまだ僕のすること、手品か奇術とばかり思つてゐるだらう。では、君の疑惑を

解くために今一つ實驗をしよう。燧爐棚のこの時計だ。今、午前二時二十八分を指してゐる。この長針が三十分を報せるまで、僕の顔をしっかりと見詰めてゐたまへ。」

凜とした威嚴のある聲、春夫君の眼は自づと吸ひつけられたやうに、主人公の兩眼に引きつけ

られた。

何といふ鋭い眼光であらう。底知れぬ強いその光。春夫君は瞳の底に針尖に觸れるやうな痛みをさへ感じた。そして時の経つのが遅かつたこと。二分が二時間のやうにも思はれた。その待ち遠しい六十秒が過ぎて、チンと半を報せる音がした。

「洋服の左の袖口をぐつと捲つて、腕を見たまへ！」
ホツとする間もなく威壓的な言辭が響く。春夫君は無意識に洋服の袖を捲り、襦袢の釦を外した。

と同時に、春夫君は思はずアツと叫んだ。

叫んだも道理、柔道で鍊えた腕の内側、隆々たる筋肉の上に、朱肉で捺したやうな四つの文字。しかも、それは判然と明智春夫の四字ではないか！

驚きの餘り、聲も出なくなつた春夫君が、魂を奪はれた人のやうに自分の腕を見詰めてゐると、これは更に不思議、四つの文字はだん／＼とその色が薄らいで映寫幕の最後に残る文字のやうに、何時とはなしに消えてしまつたのではないか。

まるで夢である。現の中で、正しく眺めた夢である。人を疑ぐるまでもない。わが眼を疑ふこともない。はつきりと眼覺めたる意識の下に、まざ／＼と見た四つの文字である。がこの事實を何と云つて説明したらい／＼だらう？ 不可思議だ。たゞ不可思議といふ他はない。

「春夫君！」

「ハイ」

「學問では解釋が出来ぬ摩訶不思議な力が分つたであらう。これは手品でも魔術でもない。僕のはゆる魔力なのだ。」

「分りました。確に魔力です。でも、どうして僕の名を知つてゐられるのです？」

「それが魔力だ。その魔力が僕の思ふまゝに、凡てのことを知らしてくれるのだ。」

「僕には解りません。その魔力といふのは、一體何でせう？」

不思議な杖

「はゝア、流石に君らしい質問をする。率直な處が面白い。よし、君にだけは見せよう。その魔力といふのはこれだ。」

不思議な人がさう云つて、黒い寛衣の釦を外して、胸衣の中から取出したのは、長さ五寸位の黒味を帯びた一本の棒。消えかゝつた金の象形文字がそこ／＼に見えるのと、黄金のリボンがその一端に飾られた。他には何の特徴もない短い棒で、ちよつとは飾具のついた萬年筆のやうに見える。

「この杖に恐ろしい魔力があると云つても、恐らく誰も信ずる者はあるまい。しかしだ、僕が今

「僕には合點がいきません——その杖の何處に、そんな力があるのでせう？」

「さア、それは僕にも解らない。その秘密を知つてゐる者はこの世界にたつた二人しか無い筈だ。」

「たつた二人ですつて？ あなたと、今一人は？」

「いや、僕ではない。僕はたゞこの杖を持つてゐるといふに過ぎないのだ。實はこの杖には古い古い歴史と、世にも稀しい物語があるのだ。今から約三千年の昔、その當時、世界第一の文明國であつた印度の北方アフガニスタンに、時を同じくして三人の傑れた僧侶が現はれたことがある。彼等は不思議な力をもつて、人間の心からその靈を奪ひ、さては死せるものを蘇らせた。りしたと云ふ。それが爲、世の人々から惡魔の使と認められ、遂に國王の命によつてアフガニスタンを逐はれ印度から支那に渡つて、いづれかの地に隠遁してその生涯を送つたと云はれてゐる。」「ところで、三人の僧侶が、その魔訶不思議を行ふ時、必ず手にしたものがあつた。それがこの不思議な杖なのだ。即ち、この杖は三千年前の昔、アフガニスタンを追はれた三人の名僧が、それぞれ手にした三本の杖の一つである。それがどうして、今、僕の手にあるか、そのことはまた日を更めてゆつくりと話をしよう。が、それは兎に角、問題は後の二本の杖だ。それが何處にあるか、僕は永い間、捜して居つたのだ。と云ふのは、その二本の杖を手にする者は、必ずや三人の

名僧から、この杖の秘密と共に、その不思議な力を傳へられてゐるに違ひないと思つたからだ。ところが、最近になつて、ふとした機會からその一本の杖の所在が判つたのだ。それはこゝから約百里の山河を隔てた朝鮮國境の前人未踏の秘密境だ。で僕は君と一緒に、その秘密境へ探險に出掛けたいと思ふんだ。」

「僕と一緒にですつて？」 春夫君が思はず叫んだ。

「左様だ。是非君に行つてもらひたいのだ。君の豪膽と勇氣さへあれば何でも出来ないことはあるまい。」

「え、勇氣はもつてゐます。しかし、僕には外に大切な目的があるのです。」

「分つてゐる。しかし、君の目的も、僕の目的も結局同じことなんだ。」

「え、？」 意外な言葉に春夫君は驚きの目を見張つた。

「驚くことはない。君の目的といふのは、黄龍鬼の根據を突き止めようと云ふのだらう。僕の探し求めてゐる一本の杖が、やつぱりその黄龍鬼と深い關係があるのだ！」

國境の秘密殿堂

黄龍鬼の根據！

春夫君の眼は急に生々と輝いて來た。白根氏の命を受けて、苦心慘澹、海賊船に身を潜まし、

玄海の波濤を乗切つて、遙々こゝまでやつて来たのは、他に望みがあつたのではない。黄龍鬼の根拠を突き止め、それを白根氏に報告して、彼等海賊團を一網打盡に掃蕩するのが目的なのだ。もし、不思議な人の言葉が眞實ならば、探検はもとより望むところ、朝鮮國境が蒙古の奥でも、決して辭するところでない。しかし、春夫君にはまだ腑に落ち兼ねる點がある。海上を横行する海賊團の根拠が、遠く朝鮮の國境にあるといふのも怪しいし、不思議な魔力を持った杖と黄龍鬼との間に深い關係があるといふのも合點がゆかぬ。

「すると、黄龍鬼の根拠は、その秘密境にあるんですか？」
春夫君は先づ質問の一矢を放つた。

「さうだ。僕が或る方面から受けとつた報告によると、その秘密境といふのは、鴨綠江の流に沿ふた朝鮮の國境にあるのだ。それも周圍を斷崖絶壁に取圍まれた深い溪谷の中にあつて、秘密の通路によらない限り、決して近づくことは出来ないのだ。」

「どうして又、海賊がそんなところへ根拠を置いたものでせうね？ 海賊と云へば僕なんか直ぐ無人島を想ふんですが。」

「いや、それは海賊だとばかり思つてゐるからだ。黄龍鬼といふのは、海賊の大將であると同時に、また馬賊の大將でもあるのだ。そして數百人の部下を指揮して、一方では馬賊や山賊を働か、一方では朝鮮近海から遠く上海香港の邊まで荒し廻つてゐるのだ。しかも、その遣口が極

めて巧妙で、何百人といふ乾兒があつても、黄龍鬼の顔を知つてゐる者は、恐らく二人か三人しかないだらう。」

「どうしてせう？ 變装でもしてゐるんでせうか？」

「いや、變装ではない。彼自身、立派な名僧を装うて、秘密の殿堂から一步も外に出ないからだ。と云ふのが、元來、彼は先刻話したアフガニスタンを逐はれて、支那へ遁れて来た三人の名僧の後裔なんだ。それで、彼の根拠といふものも、その先祖が何百年もかゝつて築き上げた不可思議と秘密の大殿堂で、その秘密を探り出すことは、到底不可能だと云はれてゐる。こゝに、彼は世を通れた名僧知識を装ひ、實は數百人の部下を指揮して、恐ろしい罪業を重ねてゐるのだ。つまり表は立派な大僧正であり、裏面では兇惡極まる賊の首魁だ。しかも、彼は三人の名僧が遺した三本の杖の一つを持ち、それによつて、到底我々の想像も及ばないやうな魔訶不思議を行ひ、宛然、秘密王國の王様のやうに振舞つてゐるといふことだ。そこで僕は如何にもして黄龍鬼に近づいて、彼の行ふ魔訶不思議を究めると同時に、あはよくば彼を逮捕して、彼等の一味を根絶したいと思つてゐるのだ。が、それには有力な同志が要る。それも大人ではなくて、豪膽で敏捷な少年が欲しかつたのだ。と言ふのは、秘密の王國へ乗り込むとなれば、そこには特別の作戦が必要だ。大人では出来ない活動の舞臺がある。そこへ、運よく白根君から君のことを云つて来たので、實は今夜出迎へに行つたわけだ。」

「え、あなたは白根さんを知つてゐるんですか？」

不思議な人の正體

これは意外、あの白根氏とこの不思議な人が、知合であるとは、夢にも思ひがけなかつた。それならば、白根氏は何んで自分にこの人を紹介してくれなかつたらう？

「白根君と僕とは、十年からの親友だ。それが黄龍鬼の海賊船が日本へ向けて出帆すると、僕は直ちに白根君にその事を打電して、彼等の行動を詳しく調べてくれるやうに頼んだのだ。それで、白根君は遂に海賊船へ乗込んで此方へ来るつもりだつたのが、君の知つてのとほり、途中で看破されたので、下關で上陸すると早速僕のところへ右の事情を知して來たのだ。」

「それなら、何故、僕に貴下のことを云つてくれなかつたでせう？ 僕はそんなことゝは知らないので、どんなに心配したか知れませんが——」

「それは尤もだ。しかし白根君は海賊船が何處の港へ着くか知らなかつたから黙つてゐたんだらう。僕は或る方面から、彼等がこの港へ入ることを知つたので、出迎へに行つたんだけど、白根君は君からの報告を待つて、更にそれを僕に報して來るつもりだつたんだ。が、白根君へは今電報を打つて置いたから、安心したまへ。白根君のことだから、事によると君の後を追うて來るかも知れない。しかし、今も云ふとほり祕密探検のためには十人の白根君よりも、一人の君が僕

にとつては力になるのだ。如何だね、君、僕と一緒に黄龍鬼の根據へ乗り込んでみる勇氣はな

いかね？」

「ありますとも！ 喜んでお伴をませう！」 春夫君は言下に答へた。「でも、そんな要害堅固な祕密境へどうして乗り込むことが出来るんです？」

「それには方法があるのだ。天津の或る大寺院の僧正が、今度黄龍鬼のところへ使者を送るとなつてゐる。その使者は僧正からの祕密を持つて行く筈だから、それを途中で奪ひとつて、使者の身代りになつて行かうといふのだ。」

「途中で奪ふんですつて——」

春夫少年はきつとなつて不思議な人の顔を凝視めた。兇賊の逮捕ならこそ、途中で他の祕密を奪ふなんて、餘り感心出來ないことだ。

春夫君の不快な顔色を、早くもそれと見とつたらしい。不思議な人はカラ／＼と大きな聲で高笑ひして、

「君は盗賊見たいな眞似は嫌やだといふんだらう。それは尤も千萬だ。しかし、春夫君、大功は細瑾を顧みずといふ言葉もある。海陸を荒し廻る兇賊を退治するために、密書を奪ふくらゐのことは、敢て問題とするに足りんぢやないか。それにだ、天津からの使者といふのが、黄龍鬼の御機嫌取りに行く奴だ。そんな奴の一人二人如何ならうと問題ではないんだ。況して、彼等の生

命を奪ふの何のと云ふではない。盜賊にしても、普通の盜賊とは違ふんだ。」
 「判りました。確に左様です！」春夫君はきつぱり答へた。
 「では、僕はもう無條件で貴下の言ふ通りにします！」
 「うむ。宜いことを云つてくれた。實はその言葉を聴きたかつたのだ。僕と一緒に働く以上は、絶対に僕の言ふとほりになつてもらひたいのだ。何事も協同一致が大切だからね。」
 「承知です。手足のつもりで使つて下さい。僕に出来ることなら何でもします。でも、僕、一つ訊きたいことがあるんですが——」

「何でも訊きたまへ——」

「僕はまだ貴下の名前を知らないんです。何と云つて呼んだら宜いでせう。」

「は、ア、左様だ。話の夢中になつてまだ名前を云はなかつたね。僕には幾らも名前があるが、風間榮といふのが本名だ。」

「え、では、あの風間博士ですか？」

春夫君は二度びつくり、風間榮と云へば、東京帝國大學に心理學講座を擔當し、少壯教授として學界に重きをなした人ではないか。その博士が、先輩の教授と意見が合はず、榮職を棄て、大學を去つたといふ話は、つひ二月程前の新聞紙上に傳へられたことであつた。それが今、目の前に對座したこの不思議な人であらうとは！
 春夫君は俄に心のときめくのを覺えて、今更のやう

に驚異の目を見張りながら、博士の顔をつくつく眺めた。

ヤンマアチヨ
洋馬車の高僧

舞臺はこゝに二轉して、廣漠涯しもなき大平原を、南から北に貫く滿洲鐵道の主要驛、吉林を東に向いて約三十里の地點に移る。

其處此處に點在する豚小屋のやうな滿洲土人の茅屋が、目路の限り打續く高粱畑の中に低い軒を見せてゐる平野の中の一筋道を、とぼくと東へ向いて歩いてゆく一人の少年がある。

手にした一本の洋傘を材に、糧食でも詰めてゐるのであらう、重げに膨れたサツクを肩にか、支那人の穿く鞋子にゲートルを巻きつけた頓珍漢な足装束。しかも、頭にいたゞく帽子と服は、明に日本の中學生であることを語つてゐる。

何處から何處へ行くのであらう。北すればハルピンから浦鹽へ、南すれば奉天から大連へ——。いづれにしても、文明の世界へ出ようとすれば、滿鐵によつて南か北へ行くべきものを、何にを好んで馬賊の跳梁する蠻界へ向けて、友なき一人の旅をつゞけようとするのであらう。

見れば、脚も身體も疲労し切つてゐる様子。杖につく洋傘に寄りかゝつて、跛の足を引きずり引きずり歩いてゆく隣れさ。

平原の太陽は暮れるに遅い。でも、そろ／＼夕暮に近い時分。附近の旅宿も見えないのに、彼

は今宵の宿を何處に求めるつもりであらう。

その中に少年はふと足を停めて、後の方を振り返つた。彼は人里離れたこの邊の聞き馴れぬ轍の音が、何處か間近に聞えたやうに思つたのだ。

少年の耳に誤謬はなかつた。後方約三丁、先刻、少年が足を休めた道の曲角、高粱畑の蔭から忽然と現れた二臺の洋馬車、鈍くはあるが驟（ロバの事）に曳かれて、轍の音を立てながら、黄色い砂埃の道を此方へ向いて走つて来る。

少年は重い足を引きずりながら、後を振り向き、歩いてゆく、やがて二臺の洋馬車の傍近く来ると、少年は路傍に身を寄せて、ちつと車上の人を見た。

先の馬車には黒色の袷（僧衣）を着た一目でそれを知れる五十前後の僧侶が、従者らしい一人の男と共に乗り、後の馬車にはこれまた僧侶の従者と見える二人の男が澤山の荷物と一緒に乗つてゐた。

少年の前を先頭の馬車が過ぎようとした時、車上の老僧が馭者に向つて呼びかけた。そして馭者が慌て、驟の手綱を引きとめると、老僧は路傍に立つた少年を招きながら、

「お前は何處へ行くのだ？」と訊いた。

「間島を通つて、朝鮮へ出るつもりです。」

少年が覺束ない支那語で答へた。

「間島へ！」老僧は驚いたらしい口吻で、「それは容易なことではない。その様子では途中で行き暮れるに決つてゐる。次の驛まで、この馬車へ乗つていかれては如何ぢや。」

「有りがたうございます。」

顔に感謝の色を見せつゝも、尙ほ躊躇うてゐる少年を、老僧は手をとるやうにして、馬車に乗せた。そして自分の傍に腰をかけさせて、旅行の目的や年齢などを訊いた。

少年は吉林にゐる父を訪ねて遙々と日本から来たこと、その父が半月程前、間島の局子街へ移つたと知つて、今その後を追うて行く途中であることなどを、不自由な言葉でぼつりぼつりと話した。

「それは可愛相な事ぢや。老僧は少年の話にすつかり同情を寄せながら、「しかし、その足で間島まで歩いて行かうといふのはチト無理ではないかの。」

「大丈夫です。僕、靴に足を食はれたので鞋子なんか穿いて跛を引いてるんですけど、それが治ればいくらでも歩かれます。」

「その元氣はいゝが……その、局子街まで行つて、お父さんもゐなかつたら如何するつもりかな？」

「仕方ありません。朝鮮へ出て、日本へ歸ります。」

老僧は涙ぐましい目で少年の顔を見た。父に逢ひたさの一心に、充分の目的もなく、無人の境

にも等しい満洲の野を逍遙ひゆくこの少年を憐れに思つたであらう。その日も暮れ方、馬車が頭井溝といふ小村落に着いて、一行の宿舎が決ると、老僧はその少年を自分の部屋に招いて、食事を共にしながら間島行きを思ひ止まるやうにと口を酸くして説き勧めた。無言のまゝ、頭をうなだれて、老僧の言葉に聴き入つた少年の眼には、露のやうな涙が浮んでゐた。

深夜の冒険

死のやうな静寂に包まれた大平原の眞夜中。小村落頭井溝の夜は更けて、銀河の空に瞬く星屑の囁きも聴かれさうな静けさである。その眞夜半時を見はからつて、前夜、高僧の一行が車を停めた宿舎に近づく怪しい影。足許の小石を拾つて、合圖であらう、窓を目蒐けてボンと投げると、宿舎の窓が細目に開いてそつと裏庭に忍び出た少年。足音を忍ばしく後庭の堀に近づくと見る間に、堀の外から投げられた一本の綱に掴まつて、するく〜と丈餘の土堀を乗り越えて、ひらりと外に飛び下りた。「サア、御苦勞！ 何うだつた？」 怪しい影が慌て、訊いた。

「大丈夫です！」 後の方に氣を配りながら、囁くやうに少年は答へた。「間違ひないね。革の囊へ入つてたあれだね？」 「間違ひありません。これでせう。」 少年が衣囊から取出す小さい巻物を、黒い影は手にとつて星の光に透しながら、これ〜、確かにこれだ。この密書さへあれば、もう秘密の殿堂へ入つたも同然だ。君は先づ第一の仕事に成功したのだ。ちつと向ふに僕達の馬車が待つてゐる。ちつとも早く出發しよう！ 變装は馬車の中だ！」

數分の後、二つの影は村落の端に出て、そこに出發を待つ二頭曳の洋馬車に身を隠した。馬車は夜の静寂の中に轍の音を忍ばしながら涯知らぬ荒野の道を、東へ向いて走り出した。車上の二人——その二人が何者であるか？ そして彼等の目ざす目的の地が何處であるか、奇怪々なる秘密殿堂の大冒険は——。

二組の旅人

赤い夕陽の満洲に……その歌の文句をさながらに、血のやうに赤い落日の殘光が、満目涯しい大平原を照した五月初旬のある夕暮。

吉林省の端、朝鮮の國境に近い一寒村、局子溝に疲れた騾の手綱を控えて、洋馬車を停めた二人の旅人があつた。一人は六尺に近い長軀を袍套（外套）に包み、足に鞋子（靴）を穿いた堂々たる支那の紳士。今一人はその従者とも見える十四五歳の少年、これも一見して分る支那少年の服装、共に辮髪を垂れた帽頂をいたゞき、長途の旅をつゞけて来たやうにも見えぬ元氣さ。

一體、局子溝といふのは、滿洲の平野を貫いて、朝鮮に通ずる道路の終點ともいふべき主要點で、岷々たる山路二十餘里を東に越ゆれば、道はもう鴨綠江の岸に出で、朝鮮は對岸指呼の間にある。従つて、險路を越えて東から来た旅人はその勞を憩めるために、また西よりする旅人は險路を前にして旅装を整へるために、是非ともこゝに休息の宿を求めることになつてゐる。それが爲めに、數年前までは數十戸の町家が軒を並べて小さいながらも一つの町をしてゐたのであるが、近來、馬賊や不逞鮮人の度重なる襲來に、家は焼かれ住民は他に轉じて、今は豚小舎のやうな土人の家が、僅に十五六戸寂しく残つてゐるばかり。目につく建物と云へば村の入口にある古びた寺院一つきり。その寺院も今は廢寺同然となつて旅人宿のやうになつてゐる。

少年を伴れた支那人が、一夜の宿を求めて、その寺院に入つて一時間と經たないのに、その後を追うて今度は二臺の洋馬車がやつて来た。車上の人は一目でそれと知れる袈裟をまとふた僧侶と二人の従者であつた。そこで五人の旅人は偶然にも寺院の一室で顔を合した。すると僧侶の一人が紳士風の支那人に向つて丁寧な言葉で話しかけた。

「突然變なことをお尋ねしますが、貴方がたは何方からお出でなされましたか？」

「吉林の方から参りました。」

「それでは、私達より前に同じ道を通つて來られたわけだが、途中で一人の少年をお見かけにはなりませんでしたか？」

「少年は澤山に見かけましたが、どんな風の少年ですか？」

「日本の少年でしたが」と云つて、僧侶は紳士の傍にゐる少年の方を向いて、「そこにゐられる方と年齢も、背格好も同じ位で洋服を着けて居りました。」

「ハテ？ そんな日本の少年は見かけたやうに思ひませぬが、紳士は小首を傾げながら「その少年が如何かしたのですか？」

「實は頭井溝の村端で、その少年が難儀をしてゐるのを可哀相に思つて、馬車に乗せて同じ宿へ泊めてやりましたところ、夜中に大切の書面を盗んで逃げ出したのでございます。」

「それは、で、こゝまでその少年を追驅けて來られたのですか？」

「左様です。實は、盗まれた書類がなくては、目的の地へ行かれないので、是非ともそれを取返さなくてはならないのです。」

「それはお困りでせう。が、確に日本の少年でしたか？」

「間違ひありません。言葉の様子から服装から、立派な日本人でございました。」

「それならば、關所で訊けば判りませう。」
その時、茶を汲んで出て、傍で二人の話を聴くともなく聴いてゐた年とつた寺僧が、横合から口を出した。

「關所と申しますと？」

「向ふに見える山を越えると、小さい谷合の川があつて、そこに渡舟がございます。その川が關所になつてゐて、お役人が毎日朝と夕方とそこへ見えられて、旅人を檢べるのでございます。」

「お役人と云ふと？」

「支那服の紳士が訊いた。」

「黄龍鬼様の御下臣でございます。」

「黄龍鬼？」

「この地方の生神様で、死人を生したり、悪病を鎮めたり、不思議なことをなされる相でございます。」

「ほう！ 偉い人もあつたものぢや。それでその役人は旅人を檢べて、どうするのです？」

「それは朝鮮の方へ行く者は川下の道へ、黄龍鬼様の御殿へ行く者は川上の道へそれ／＼その關所で檢べて通すのでございます。何でもそのお役人といふのは、手が片方しかなく、それに隻眼で馬に乗つてゐるといふことですが、もし、今お話の少年がこの道を通つたとすれば、その關所を必ず通つた筈ですから、お訊きになれば分りませう。」

寺僧の話を聴いてゐる中に、やがて食膳の用意が出来て、粗末ながらも夕飯が済むと、二組の旅人は各々別室に入つて寢床に就いた。

片手隻眼の男

二組の旅人が局子溝の寺院に宿を求めた翌の日の夕方である。

局子溝を東へ約十五里、それも上り七里、下り七里の嶮路を越えた渡船場。昨夜の寺僧の話によれば、「黄龍鬼様のお關所」である谿谷の渡船場へ、驢馬に跨つた一人の支那少年が近づいた。服装から風貌から、それが昨夜支那紳士と共に寺院に一夜を明した少年であることは疑ふまでもなかつた。

少年が渡船場に近く来た時、河岸の上に突然巨人のやうな逗ましい姿を、ぬつと現した容貌魁偉な壯漢があつた。辨髪をくる／＼と頭に巻き、青龍刀を腰に佩びたその様子は、正しく滿洲馬賊の扮装、それによく見れば左の腕がなく、右眼は盲ひて潰れてゐる。寺僧の話した「黄龍鬼のお役人」である。

少年は驢馬から飛び下りながら、つか／＼とその男の前へ進んで、頭を低く辭儀をした。

「貴下は黄龍鬼様のお役人でございますか？」

少年の口からすらくと支那語が流れた。

「君は何處から来たのか？」

馬賊のやうな役人が横柄な態度で問ひ返した。

「私は黄龍 鬼様へお目にかゝる爲に、天津から遙々と参つたものでございます。僧正の代理は後から参りますが、夕方までにこの關所へ着けばお役人がゐられるから、早く行つて僧正からの書面を御目にかけて、渡船のお許しを得て置けとのことで出發して参りました。」

「その書面を出してみい。間違ひなければ通してやる。」

少年は支那服の衣囊から、小さい巻物を取出した。隻眼の男は片手でそれを受取つて、ちつとその面に書かれた不思議な記號を見てゐたが、

「確に僧正からの書面に相違ない。關所だけは通して上げるが、僧正の代理といふのは何時着くのか？」

「日が暮れてからだと思ひます。それで今一つのお願ひは、これを貴方様に差上げて、夜になつても特別に渡船を許していただきたいとのことでございます。」

少年はさう云ひながら、幾枚かの銀貨を相手の手中に握らした。隻眼の男は銀貨を一枚々々算へてから、懐に入れると

「承知した。他ならぬ天津の僧侶の使者とあれば、特別の取扱ひを致さう。俺は今半時間もすればこゝを引揚げるから、渡船の者にさう申しつけて置く。それからお殿の方へもその旨を傳へて

置かう。」

賂路の效目は早い。關所の役人は數枚の銀貨を懐にして、言葉まで急に優しくなつて、少年の訊ねるまゝに附近の地勢や、黄龍 鬼の殿堂への秘密通路などを話して聞かした。

その内に四邊は段々と薄暗くなつて、對岸の景色も見えぬまでになると、隻眼の男は渡船場の者に少年を紹介し、僧侶代理が到着すれば何時でも渡船を許すやうに命じておいて、對岸の方へ歸つて行つた。

その姿が向ふ岸に消えると一緒に、夕暗の中から忽然として現れた一人の壯漢が、少年の背後に近づきながら、低い聲で呼びかけた。と、つと振向いた少年が、

「やー」と云ひ様、壯漢の傍に駆け寄つた。見れば、これも亦片手に隻眼の容貌魁偉な大男。今、對岸へ去つた巨漢と、そつくりそのまゝの姿である。

「どうだね、これなら役人と見えるだらう？」片手の男が囁いた。「見えるどころぢやありません。そつくり其儘です。」少年は相手の顔を見上げながら、「僕は餘り似てゐるので、またあの男が出て来たかと思ひましたよ。」

「それ位似てゐるなら大丈夫だ。おや、足音が聞えるぞ！ 提灯も見える。さア、君はそこらへ隠れてゐたまへ。その岩の向ふが宜いだらう。」

少年が岩の蔭へ隠れて、二三分間も經つと、提灯を持った土人を先に立て、驢馬に跨つた三

人の僧侶が近いた。が、案内役の土人は道の中央に突つ立つた片手隻眼の壯漢を見ると、思はず後へ飛び退つて、馬上の僧侶に耳打した。と、慌て、地上に飛び下りた僧侶の一人が、壯漢の前に近きながら、

「お手敷をかけないやうに、今少し早目に着く筈でございましたが、途中で驢馬が斃れましたためにこんな遅くなりました。少年を伴れた旅人が、一二時間前にこゝを通つたこと、思ひますが……。」

「うむ、少年を伴れた男は、一時間ばかり前に着いて、今し方川を下つて、朝鮮の方へ行つたばかりぢや。」

「途中まであの旅人と一緒だったのでございます。それで實は特別のお願ひを致さなければなりません。私共は天津の大僧侶から黄龍鬼様へ差上る書面を持つて参つた使者でございます。ところが、道中でその書面を盗まれ、天津へも歸られず、仕方なく書面を盗んだ盜賊を追つかけて、こゝまで参りましてでございます。それで大僧侶の書面を持つた日本の少年が、この關所を通りはしなかつたか如何か、そのことをお訊ねしたのでございますが。」

「日本の少年など一人も通りはしない。それに大僧侶の書面といふのも見たことはない。」

「それでは仕方がございません。では、貴方様にお願ひして、こゝを通していただいて、黄龍鬼様に直々お目にかゝつてお詫びを申上げる他はありません。何分の御便宜を計つていただきます。」

たいと思ひます。」

三人の僧侶は低頭して特別の同情を得たいと懇願した。しかし關所の役人は斷然としてその言葉を斥けた。

「君達の言ふことに偽りは無いであらう。が、この關所は立派な證據のない限り決して通さぬことになつてゐる。それに今夜はもう渡船の時刻も過ぎてゐるので、とも角も引返して、向ふの山の麓へ行つて宿をとるが宜からう。明日にでも黄龍鬼様にお伺ひして、通してもよいことになれば、直ぐにもおしらせ致すこととする。」

「有難うございます。それでは何分ともにお取次ぎをお願いいたします。」
僧侶の一行は、悄然として足を後に返して、暗闇の中に消えていつた。

百尺の懸崖を

「やア！ あれです、黄龍鬼の根據は！」

斷崖の上に突つ立つた少年が叫んだ。

夜は今明けはなれたばかり、まだ薄靄に包まれた眼下遙の谿底に、夢の世界の御殿のやうに忽然として浮び出た秘密の殿堂！ 中央に一段高い大伽藍、青銅のやうに苔蒸した長い長い蔓の列、その周圍をぐるりと圍む高い塀、文明の世界を遠く離れた満鮮の國境、しかも疊々たる山嶽

に包まれて、こんな秘密境があらうとは意外である。

「ほう、いよ／＼目的の地へやつて来たね。」

少年の聲に夢を醒されたであらう。まだ眠むさうな眼を擦りながら、背後の天幕から出て来た身軽な支那服の偉丈夫が呟いた。

「まだ／＼ですよ。もう路はないぢやありませんか。これから如何します？」

「どうするつて、この斷崖を下りるんだよ。」

「えー！ これを下りるんですつて？」少年が思はず驚きの聲を擧げて、切り立つたやうな足下の斷崖を見た。「これから墜ちたら生命はありませんよ。」

「さうだね、百尺以上の斷崖だから、墜落したら粉微塵だ。しかし、路を踏み迷ふたからには仕方がない。愚圖々々してゐて、折角追拂つたあの坊主たちが、もし先になるやうなことにでもなれば、こゝまでの苦心が水の泡ぢやないか。ナニ生命を投げ出してかゝれば、何だつて出来んことはない！ さア、パンでも噛つて、生命懸けの冒險だ！」

二人は天幕の中へ取つて返して、背負囊の中から堅パンを取り出して噛りながら、水筒の口を開いた。

「春夫君！ 今までだつて随分冒險はやつて来たが、眞實の冒險はこれからなんだ。僧侶の手紙を奪つたり、關所の役人に化けたりするとは異つて、今度こそ生命懸けだ。一つ別れの水盃を

汲まうぢやないか！」

背の高い偉丈夫——風間博士はさう云つて水筒の蓋をとつて、春夫少年の前に差出した。

「水盃だなんて縁起でもありませんね。」

春夫君は手を出し兼ねて躊躇する。

「いや、死を覺悟した冒險だ。成功したら今度は大いに祝杯を擧げよう。お互ひに生命を投げ出した仕事だから、死んだつもりで水盃を飲んでかゝるんだ。」

「ぢや、飲みませう！」

春夫少年は水盃をくつと飲んで、風間博士に盃を返すと、博士は自分で水筒の水を注ぎながら、愉快相にたゞ一息に飲み干した。

「ぢや、いよ／＼これから冒險だ。君の外套を貸したまへ。」

堅パンを腹へ詰めこむと、風間博士が云つた。

「外套をどうします？」

春夫君は不審に思ひながらも、外套を脱いで前に置いた。

「どうするか見てみたまへ。何事にも細心緻密な注意が必要だといふことを教へて上げる。」

さう云つて、春夫君の外套を掴んで立ち上つた博士は、天幕の傍にある大きい樹木に近づいて、その根本へ春夫君の外套をぐる／＼と巻きつけた。

何にをするだらうと思つて、春夫君が見ると、博士は再び天幕の中へ入つて行つて、長い長い麻繩を持つて来て、その端を外套を巻いた上から幹の根本へしつかりと結へつけた。それから今度は自分の外套を脱いで、絶壁の突端へかけながら、その上から綱をだらりと吊り下げた。「これで宜い。」博士は春夫君を振り返つて、「綱が断れれば、僕達の生命はそれつきりだ。しかし、これ以上の方法も手段もないのだ。さア、手をはめて用意をしたまへ。持てゆくのはこの雑囊一つだ。天幕や背負囊は、みんな打棄つておくんだ。」博士がさう云つて、もう絶壁を下りようとする時、「先生！」と春夫少年が呼び止めた。

春夫少年の運命は？

「僕が先に下りませう。身體が軽いから僕の方が安全です。」
「後から下りても、先へ下りても、断れる以上は同じだ。僕が先に下りて、瀬踏みをして行く方がいゝだらう。後からゆつくり随いて来たまへ。」

博士はもう一本の綱をたよりに、兩足に絶壁を踏んばりながら、一歩々々と下り始めた。

「大丈夫ですか？」

春夫君が断崖の端に片膝ついて呼びかけた。見れば博士は截り立つたやうな絶壁に沿うて、蔓

にぶら下る猿のやうに下へくと降りてゆく。

「大丈夫だ！」博士の聲が聴えた。

「ぢや下りますよ！」

「うん、下りて来たまへ！」

春夫君は兩手に綱をぐつと掴んだ。そして顛へる足先に絶壁の端を踏へながら、そうと身體を宙に浮した。全身の力を兩手にかけて、全身の體重を一本の綱に托して、いよく必死の放れ業だ。

一間二間はわけもなく下りた。が、その内に綱を握る指先がだんくと熱くなつて、次第々々に腕の力が弱つて来る。

「大丈夫か？」下から博士の聲がした。

「大丈夫です！」絞り出すやうな聲。それもやつとだ。

「もう少しだ。こゝまで来れば足場がある！ しつかりと掴まつて！」

ハイと答へようとしたが、もう聲が出なかつた。夢中である。懸命の努力である。一尺が十間にも思はれた。腕の關節がばらばらに脱けて、今にも眞逆様に墜落しさうな氣持がする。

「もう五尺だ、三尺だ！」

微に博士の聲が聴えた。次の瞬間、逞ましい二つの手が、自分の身體に觸つたのを知つた時、

春夫君はホットとして生き返つたやうな氣持がした。
二人は今絶壁の中間に突き出した岩角の上に立つた。それから約四五尺の間は足の踏場が多いだけに割合に樂々と下りられた。

しかし、それも二三十間に過ぎなかつた。岩角の盡きるところ、祕密殿堂の甍を眼前對等に見るやうになつた頃、二人は再び恐ろしい懸崖にさしかゝつた。

高い塀に圍まれた黄龍鬼の殿堂は、直ぐ眼の前に見えてゐる。呼べば應へる距離である。が、截り立つたやうな十餘間の懸崖、飛んで下りるにしては餘りに危険だ。

博士は雜囊を開いて豫備の細引を取り出した。博士は細引の端を岩角に結へて、再び宙にぶら下つた。

「春夫君、今度は綱が短いから、途中で飛び下りなくちやならんよ。氣をつけたまへ！」

博士の聲を聴きながら、春夫君は後について下りはじめた。綱が細いので、ともすれば掴んだ手がする／＼と迂りさうになつて来る。それを兩足で支へとめて危い空中の綱渡り、涼々しながら一歩一歩と下りてゆく内に、懸崖を踏へた足がつると迂つたと思ふと、身體はぶらりと一直線に宙に浮いた。その瞬間、頭の上で岩角に細引の摩擦する微かな音がした。春夫君はハッと思つた。が、もう遅かつた。春夫君の身體は投げ落された石のやうに地上へ向いて墜落した。細引が二人の體重を支へかねて、岩角の突端で擦り斷れたのだ。さて、春夫君の運命は？

祕密の殿堂へ

「春夫君！ しつかりしたまへ！ しつかり。」

風間博士の聲に呼び醒されて、春夫君はふと目を開けた。氣がつくと、博士に抱かれて、軟い草の上に横はつてゐる。

「え、大丈夫です。僕何だか、夢を見てゐたやうな氣持です。」

「墜ちた時、軽い脳震蕩を起したのだ。負傷はないやうだが、關節でも挫いてはゐないかね？」

「何處にも痛いところはないやうですが。」

春夫君はむつくり起ち上つて、元氣よく手足を振り動かしてゐたが、

「大丈夫です。サア、行きませう。」

「それなら安心だ。ぢや行かう。」

二人は大きい岩がそこ／＼に屹立してゐる叢の間を縫うて、彼方に見える嚴しい朱塗の門に近づいた。が、扉は嚴重に閉ざされて、そこには門衛の影もない。

小さい門ならばこそ、高い塀を左右に連ねた櫓構えの大門である。扉を叩いても中へ聽える筈はない。已を得ぬ。他の門へ廻らうとして歩きかけると、

「誰だ？ そこに立つてゐるのは？」

と何處からともなく聲がした。二人は周圍を見廻した。それから眼を上げて櫓の上を仰ぎ見た。しかし、何處にも聲の主はない。と、云つて、扉の彼方から聴えたとも思へない。何だか蓄音器のやうな聲である。

「城内へ近づいたのは、誰だと訊くの？」

再び同じ聲がした。依然として、姿は見えぬ。

「關所のお役人からお耳に入つてゐること、思ひます。天津から參つた大僧正の使者でございます。」

博士が流暢な支那語で答へた。

「天津からの使者とな？ では、今出迎への者を遣すから、少時、待つてゐるが宜からう。」

聲はそれきり聴えなかつた。でも、一體、何處からその聲は響いて來るのであらう。扉か扉に

小さい孔でもあつて、内側から覗いてでもゐるのだらうか？ それにしても聲の調子が怪しい。

春夫君が不思議に思つて、四邊をじろくくと見廻してゐると、ぎいといと音がして正面の扉が静に開いた。と、そこへ一寸法師のやうな怪異な姿をした小男が現れて、

「どうか、此方へ！」

と云つたと思ふと、くるりと踵を返して歩き出した。扉の中に一歩足を踏み入れると、側は石の壁になつて、薄暗い洞穴の中へ入つたやうな氣持である。

その廊下を、辮髪を垂れた小男の後に、二人は奥へくと進んでゆく。四邊は段々と暗くなつて、足許もはつきりと見えぬ位。まして祕密宮殿の何處を何方へ歩いてゐるか、皆目見當もつかない。

五六十間も來たと思ふと、廊下へ右へ曲つて、石の階段へ突き當つた。と、不意に傍の扉が開いて、炬火を手にした同じやうな小男が現はれて、互ひに黙禮を交しながら、案内役を交代した。

暗の中に、黒い煙を立て、炎々と燃え上る炬火の灯を頼りに、二人は新しい案内者の後に、石の階段を昇ると今度は右へ左へ、廊下を廻り石段を昇つて、まるで迷路の中を彷徨やうに、三十分の餘も歩きつゞけて、最後の石段を昇りきると、やつと大きな扉の前へ來て立ち停つた。

その扉を開けて中に入ると、寺院の大廣間と云つた風の大きい部屋で、一方の窓から射し込む太陽の光線が、部屋の中を微に照してゐるばかり。

案内役の小男は、部屋の中央へ進むと、少時そこで待つやうにと云つて、二人をそこへ殘したまゝ、扉の外に消えていつた。

黒衣怪人の行列

後はひつそりとして、物音一つしない静寂さである。二人は明りの射し込む窓の方を見詰めながら、咳きもせず時の経つのを待つてゐた。五分十分、薄氣味悪い沈黙の時間が可なり續いた。

と、何の豫告もなく、不意に微かな音楽の音が響いて来た。笙やひちりきの交つた單調な奏樂であるが、何だか地獄の底へでも引き入れられるやうに耳に響く。それが約五分も續いたと思ふと、突然、右手の扉が開いて、異様な姿をした黒い者が、續々と後につづいて現れ出した。

頭の目のところだけ開けて、すつぽりと黒い布で包み、身體には袖の廣い、踵にまでとゞく長い衣を着けた黒装束の姿である。後から後からと、扉を潜つて現れた二十人餘りの異様な行列は、しづくと部屋の中に入つて来ると、ずらりと二人の周圍を取り圍んだ。そして床の上に兩膝をついて、二三十分間も呪文のやうな祈りの言葉を繰返してゐたと思ふと、やがてまた行列をつくつて、扉を向ふへ去つて行つた。

「一體、あれは何の意味でせうね？」

最後の一人が見えなくなると、春夫君は囁くやうに訊いた。

「さあアね、これでも表面は大きな寺院だから、何か歓迎の意味の儀式だらう。」

「儀式にしても、何か歓迎の辭でも述べさうなものですね」

「シッ！」博士が制止した。「足音が聴える！」

その言葉がまだ終らないのに、再び扉が開いたと思ふと、黒い衣を纏ふた一人の僧侶が二人の前に現れた。

「天津から来た大僧正の使者といふのは、お前達であるか？」

威嚴のこもつた聲で訊いた。

「左様でございます。博士が丁重な言葉を返した。」

「大僧正の使命は、書面によつて分つたが、尙ほ黄龍鬼様にお目にかゝつて、摩訶不思議の魔術を拜見したい希望があるとのことぢやが、事實であるか？」

「是非拜見を願ひたいと存じます。」

「しかし、よく考へ直してみても如何か。餘りの不思議に驚いて、眼を廻す者もあるのだから――」

「それは重々大僧正から承つて參りました。出来れば、不思議の術の一端なり御傳授にあれば、かりたいと思ひ居ります。決してその御心配には及びませぬ。」

「それだけの決心があるならば宜しからう。では、後から隨つて来るやうに……」

さう云つて、扉の方へ足を返す僧侶の後から、博士と春夫君が歩き出すと、僧侶はつと振り返つて、春夫君を睨まへながら、

「その方は従者であらう。従者の身分で奥御殿へ入ることは許されぬ。こゝで待つてゐるが宜か

らう。」
と叱りつけるやうな調子で云ふ。春夫君は少からず不満であつた。しかし許されぬものは仕方がない。それに博士も後を向いて、少時そこで、待つやうにと半ば眼色で指圖をするので、濫々ながら後へ残つた。

二人の足音が扉の彼方に、段々と小さく消えてゆくと、春夫君は今更のやうに廣間の中を見廻した。がらんとして、何の裝飾もない薄暗い部屋である。

何かしらついと目の前を掠めた。

慌てゝ、その後を追ふと、何處から飛んで來たのか大きな蝙蝠が、高く低く目にもとまらず飛んでゐる。

何といふ静寂さであらう。春夫君は餘りの静けさに、周圍から身體を壓へつけられるやうな氣持がして、何だか、このまゝじつとしてゐるに堪へられなくなつて來た。

死を賭しての冒險ならば、水火の中も厭ひはせぬ。しかし、死のやうな静寂の中に、たゞ一人ぼつねんとして立つてゐることは、元氣に満ちた春夫君には、何となく、離れ小島へ取残されたやうな氣がして、坐しても立つてもゐられない。それに、考へてみれば、大連から何百里の道を苦心慘澹、遙々とこゝまでやつて來た目的は、黃龍 鬼に近づいて、彼を逮捕するにあるではないか、それなのに、その顔を見ることも出來ないとは、残念至極、宜し、後を追うて行つて見よ

う。見附れば、その時のこと、何とでも辯解の途はある――。

白髮白髯の老翁

扉はわけもなく開いた。

その扉をすりと抜けると、春夫君は足音を忍ばし、前方に氣を配りながら、靜に一步々々と進み出した。

廿間も來ると、下方へ向いた石の階段にさしかゝつた。それを下りると、廊下は左へ折れて再び階段になつてゐた。そこまで來ると、春夫君はつと足を止めた。階段の下から炬火の明りが射してゐたからである。

でも、火は此方へ近づく様子もなく、それに人の足音も聞えないので、拔足差足、階段を下りてゆくと、右の方に大圓柱の立ち並んだ廣間があつて、その中央に大きい篝火が炎々と燃えてゐるのであつた。

四邊に人影のないのを確めた春夫君は、幾抱へもありさうな大圓柱に沿ひながら、更に次ぎの廊下へ突き進むべき入口を捜して歩いた。

が、入口はもとより、秘密の扉らしいものも、何處にもなかつた。二度三度、大廣間の周圍をぐるぐると廻つてみたが、大きい圓柱と圓柱の間は、不思議な半人半獸の彫刻を施した厚い石の

壁で、秘密の通路などいくら捜しても見附りさうにはなかつた。

「怪しいナ？ こゝより他に來るべきところはない筈だが……」

春夫君はじつと小首を傾けた。右や左に曲りはしたが、自分は正しく一本の道を辿つて來た。

他に岐路はなかつた筈だ。されば、否が應でも博士の後を跟いて來たのだ。それなのに、こゝまで來て博士はもとよりあの僧侶の姿も見えないとは？

二人は途中で消えたのだらうか？ いや、そんなことあるべき筈は斷じてない。何として

もこゝへ來たのに相違ないのだ。この篝火が何よりの證據である。

それなのに、何處にも通路がないとは不思議である。仕方がない、このまゝ後へ引返さうか……

……

春夫君はいかにも残り惜しさに、今一度廣間の中を見廻した。と、ふと目についたのは、直

ぐ自分の背後にある大圓柱の基礎に近く、直線を引いたやうに見える一分位の隙間である。

最初は墨の線かと思つた。が、眼を近づけてよく見ると上から下へ一直線に、約三尺の隙間で

ある。春夫君の眼はざらりと光つた。そしてポケットから取り出したナイフの尖端を、その隙間

へ差し込んでぐつと捻ぢると、これは意外、隙間と見えたは秘密の仕掛けになつた扉の立て詰め

で、そこに大きい口が開いた。見れば大圓柱の中は大人一人自由に通り抜けられる程の空洞で、

しかも其處には小さい鐵の梯子がある。

春夫君は雀躍して喜んだ。秘密の通路を發見したのだ。痛快な冒險心がむら／＼とその胸中に

燃えて來た。

秘密の扉を押し開けると、春夫君はそつと鐵の梯子に足を掛けた。そして元の通りに扉を閉め

て、眞暗い圓筒の中を一步々々と降りて行つた。そして二分とかゝらないのに、その梯子を降り

切つた。

耳をすますと何處からか人の聲が聞える。いよ／＼秘密殿堂の奥御殿へ近づいたのだ。春夫君

は暗の中を手捜りながら、扉の引手を捜し當て、靜に／＼押しあけた。

見ると、直ぐ眼の前に半ば開かれた扉があつて、その奥から炬火の灯と一緒に、話の聲が洩れ

て來る。春夫君は四邊に氣を配りながら、圓柱の外に這ひ出すと、扉の蔭に近づいて、そつと中

を覗き込んだ。

そこは四十疊敷きもありさうな眞四角な大廣間で、これと云ふ裝飾は一つもないが、正面一段

高く金色に輝く佛像、その前方に設けられた聖壇、周圍の壁に張り廻した注連——見るからに不

気味な大廣間の正面、佛像を背にして突立つた二人の人物。一人は白髮白髯の老僧、今一人はま

ぎれもない風間博士。

春夫君はじつと聞耳を立てながら二人の方を注視した。

老僧の魔術

金色に輝く大きい佛像を背にして、聖壇の前に立つた白髪白髯の老僧が、合圖の銅鑼を打つと一緒に、一方のドアが静かに開いて、黒衣の男が現れた。

老僧が何事か命じると、黒衣の男は足を返して、ドアの彼方に去つたが、五分間も経たないのに、今度は二人の僧侶をつれて入つて来た。見ると、彼等は病人か死人か、身動きもせぬ一人の男を載せた吊床を抱へてゐる。老僧はその吊床を部屋の中央へ置くやうに命じてから、三人の僧侶が去ると、風間博士に向つて、吊床の上の男を検べてみるやうにと云つた。

博士は静に吊床の傍に近き、床の上に片膝をついて、じつとその男を診てゐるが、やがて起ち上つたと思ふと、

「全身が麻痺して、死人も同様になつた病人かと存じます。」

「左様ぢや、この男は、恐ろしい毒蛇に足を噛まれて、全身が麻痺してゐる。いかなる文明世界の醫術をもつてしても、この大病人を立ちどころに歩かすことは出来まい。それを俺は麻訶不思議の術をもつて、目の前で起たしてみせるのぢや。」

老僧はさう云つて聖壇を下りると、静に病人の前に進み寄つた。そして後に従ふ侍僧の手が差出す豆粒ほどの白い丸薬を受取つて、それを今一人の侍僧が捧げた香爐の中にそつと落した。

すると、香爐の中から白い煙が濛々と立つて、鼻をつく變な臭氣が春夫君のところまで漂ふて来た。それは白檀に樟腦を混ぜたやうな一種異様の臭ひであつた。

香爐を捧げた侍僧が、病人の枕頭に跪ついた。白煙は病人の頭から胸へ絲のやうに流れてゆく。

その時、老僧は懐から黒味が、つた短い杖を取出して、両手にそれを持ちながら、何か呪文のやうな言葉を唱へ出した。距離があるので、よく分らないが、春夫君は老僧の手にした杖を見て、風間博士が肌身離さず持つてゐる不思議な杖を思ひ出した。きつとあれと同じ杖に違ひない。數千年の昔、印度の北方アフガニスタンに現れた三人の名僧が遺したといふ三本の杖の一つであらう。そして、これを持つてゐるからには、あの老僧こそ、實は怪賊黃龍鬼に相違ない。

「手を挙げよ！」

突然、老僧の口から命令の言葉が洩れた。と、病人が両手をぐつと高く上げた。

「足を動かせ！」

二本の足が正しく動いた。

「その兩足で起ち上れ！」

その言葉がまだ終らぬに、半死半生の大病人が、まるで普通の人のやうに、老僧の前にすつくと立つた。

「明日今一度、この治療を繰返せば、明後日からは舊の通りの身體になるであらう。もう用はない、次の部屋へ去れ！」老僧は嚴肅な態度でさう云ふと、今度は博士の方へ振り向いて、「見られるとほりぢや。病人を治すことは、餘りにもいと易い。ついでに起死回生の秘術を示さう。恰度、死人が一人ある筈ぢや。」

老僧が傍の侍僧に目醒せして銅鑼を打たすと、再び先刻の黒衣の僧侶が現れ、やがて擔架に載せた死人が運ばれて來た。

「これは人の世の勤めを終つて、今日、安かな死の旅路についた佛ぢや。この死人を呼び覺すことは罪深いことにも思はれるが、それも貴い實驗のためぢや。一應、生死の程を確めて見られよ！」

蘇つた死人

「仰せのとほり、正しくこの同胞の魂は肉體を離れて居りまする。」

前と同様、擔架の前に片膝をついて、死人の身體に手を觸れてゐた風間博士が、沈んだ聲で答へた。

「確に死人と認めるであらうな？」

「間違ひはございませぬ。」

「では、今一度、不思議な秘術を示すであらう。」

その時、二人の侍僧が何處からか、扇風機のやうな形をした直径三尺もある唐箕のやうなものを運んで來た。そして老僧の命ずるまゝに、その中軸から出た一本の針金を死人の足に結へつけ一端についた柄を擱んでぐる／＼と力一ぱい廻しはじめた。

一方、老僧はと見ると、死人の頭部に近く突つ立つて、例の不思議な杖を兩手に持つて、目を瞑つたまま呪文を口に唱へながら、しきりと禱りをつゞてけるる。

五分、十分、約二十分も経つたであらう。呪文がハタと止んだと思ふと、老僧は死人に向つて大きい呼吸を吐きかけながら、右手の食指で死者の額を指した。

と、どうだ！今の今まで固く塞つた死人の目がカツと開いた。次いで老僧の指が右手を指し、左手を指した。すると、死者の兩手が目に見えぬ力に引かれたやうに持上つた。

默禱數刻。老僧は再びその指を死者の足に向けた。足が微に動いた——と思ふと、老僧の口から耳も聳するやうな大きい聲が發せられた。

「死せる者よ！起て！」

その聲が高い天井にこだまして響き渡ると一緒に、今の今まで枯木のやうに横つた老人の死體が、まるで電氣仕掛の人形のやうに、むく／＼擔架の上上半身を起すと思ふと、すつくと兩の足で起ち上つて、よろ／＼と前方へ歩き出さうとした。

「危い！」

春夫君の口から思はず聲が出ようとした。が、その時遅し、侍僧の一人がつと背後から、その身體を抱き止めようとした。が、侍僧の手がふれるか觸れぬに、蘇つた死者はぐにやりとなつて、再び床の上に打ち倒れた。

「起死回生の秘術はこれぢや。いかなる文明の世界にも、この秘術に勝る醫術はあるまい。」
老僧は誇り顔に博士の方を振り返つた。

「たゞく不思議と申す他はございませぬ。博士がいかに驚嘆したらしい口振で答へた。『まづたく、如何なる文明の世界へ参りませうとも、死人を蘇らす秘術を心得た者はあるまいと存じます。』」

「その通りぢや。單に起死回生の術ばかりではない。まだまだ不思議な秘術があるのぢや。例へば數百年の昔、死についた人々をこゝへ呼び返すことも出来るし、また死者と話をすることも出来るのぢや——。」

老僧の言葉が終るか終らないのに、背後の扉が開いた。そして四人が其方を振向く間もなく、あわたゞしく入つて來た一人の僧侶が、一人の侍僧に近いて何事かひそくと囁いた。

すると侍僧の顔色がさつと變つて、風間博士をいぶかし相にじろく／＼と見やりながら、老僧の耳許近く口を寄せて、僧侶の言葉を傳へた。

と、老僧の顔もまた變つた。そしてきつと博士の顔を睨みつけたと思ふと、

「天津からの使者が二人もあるべき筈はない。何方かが偽物にきまつてゐる。その者呼べ。二人をこの場で對決させて目の前で眞偽を決しよう！」

天津からの使者が二人？——その言葉は果して何を意味するだらう。圓柱の中に身を潜ました春夫君は、ハツと思つて、われ知らず身顫ひを感じた。

天津僧正の使者

起死回生の實驗に供せられた老人の死體が運び去られると、老僧を中心に、二人の侍僧は左右に、風間博士はその前に、四人は互ひに探るやうな眼を見交しながら、そこに少時無言の時が経つた。

しかし、それは長い時間ではなかつた。ものゝ五分と經つか經たぬに、再び扉が開いたと思ふと、先刻の男に案内されて二人の僧侶が現れた。

太陽に焼けた顔、塵埃に白くさらけた僧服、見るからに長い旅路に疲れたらしい姿である。が、それよりも、その二人を見た春夫少年の驚きは、どんなであつたらう！

それは正しく天津から來た僧侶の使者ではないか。頭井溝の旅舎で自分のために大切な密書を奪はれて以來、夜に日をついで自分たちの後を追つて來たあの二人である。昨日、自分達が谿谷

の渡船場で、片手隻眼の男を欺いて無事に關所を越えたからには、もう追驅けて來る憂ひはあるまい。假令、追驅けて來たとしても、僧侶の密書は彼等の手にはないのだから、關所を通れる筈がない——さう思つて、安心をしてゐたのに、忽然として彼等が秘密宮殿の中に姿を現さうとは、全くもつて意外である。

それにしても、黃龍鬼の面前で、彼等と對決させられたら、博士は何と云つて彼等に答へるつもりだらう？ 巧く云ひくるめてくれ、ば宜いが……もし、化の皮が顯れたら、博士はもとより自分の命も立ちどころに奪はれてしまふに決つてゐる。

あゝ、困つたことになつた。ほんたうに博士は何と云つて、彼等に答辯するだらう？ 春夫少年はもう安き心もなく、鼓動する心臓をじつと押へて、まばたきもせず博士の顔を見つめてゐる。

「其方たちは何者ぢや？」老僧に代つて侍僧の一人が、入口に立つて面も得上げず低頭した二人の僧正に呼びかけた。

「お尋ねにあづかり恐縮に存じます。私共は天津から僧正の代理として、大僧正様の御機嫌を伺ひに參つた者でございます。」

年とつた方の僧正が答へた。

「天津から參つたと？ たわけたことを申すな。天津僧正の使者は今朝程到着して、現に其方

たちの前に立つてゐるのぢや。」

「恐れながら申し上げます。その使者といふのは僞者でございます。僧正の使者とは眞赤な僞りで、實は日本の少年を伴つた惡漢に相違ございません。」

「何れが僞者か判つたものではない。」老僧の代理はハツタと二人を睨めつけた。「もし、其方の言ふことが正しければ、僧正の書面がある筈ぢや？」

「その書面は頭井溝の旅宿で、その男のつれて居ります少年のために、夜中盗み去られたのでございませぬ。それも、その少年が道に行きくれて難澁してゐる様子を憐れに思ふて、宿旅へ伴ひましたところ、夜中に姿を晦らしましたので、不審に思つて取調べましたところ、私が身につけました僧正の密書が紛失してゐることが判りました。それ故、察するに、二人はその密書をもつて、お關所を渡り、こちらへ忍び込んだものと思はれます。私の申すところには、決して僞りはございませぬ。御不審の點があれば、どうか、その男と直々對決をお許し下さいますように、またその男のつれて居ります少年をお呼び出して下さいませすれば、どのやうに變裝してゐませうとも、十分顔に見覚えがございませぬ。」

死刑の宣告

春夫君はひやりとして、身體が奈落の底へ沈んでゆくやうな氣がせられた。いくら風間博士で

も、辯明の方法はあるまい。ましてや、自分がそこに呼び出されたら事細かに變装を調べられるまでもないこと。頭にいたゞく帽子を取つてのけるだけで、日本人である事は、忽ち證據立てられるのだ。

間諜々々してはゐられない。一刻も早く何處かへ姿を隠さねばならぬ。——春夫君はさう思つて、鐵の梯子へ手をかけた。が、待て、博士を残して逃げ隠れるのは卑怯である。死はもとより覺悟の前だ。萬々一、博士が立派に辯明して、最後の審判が自分の變装で決せらるゝやうなことにでもなれば、その時こそ、博士を救ふために、どうにでもして身を隠さう。それまではあわてふためくことはない。

春夫君は思ひ直して、再び扉の隙間に目を當てた。その時何事か老僧と相談をしてゐた侍僧が、つと博士の方に向きながら、徐に口を開いて問ひかけた。

「僧正の密書を持参したとその方を決して疑ふわけではないが、二人の使者が現れた以上、そのいづれかゞ偽物でなければならぬ。ついでには念のために相方を取調べることとする。そして何方にせよ、偽物と判明すれば、大僧正を偽つた罪により、死刑に處する。相方、異存はあるまいな？」

「もとより異存はございません。」

「私共の言葉にもし偽りがありましたなら、喜んで脚處罰を受けます。」

「よし、それでは先づ二人の者に訊ねる。天津の僧正は本年幾歳になるのぢや？」

侍僧が先づ二人に向つて質問の一矢を放つた。

「六十七才と存じます。」

「では、其方に尋ねる、今度は博士の方へ向いて、天津の寺院の山門に大きな額がかゝつてゐる。その額に何といふ文字が記してあるか？」

「光明遍照の四字が記してございます。」

博士が言下に答へた。

「その山門を潜つて石段を登ると、そこに何があるか？」

「見上げるばかりの石の大燈籠がございます。」

博士は何のためらふところもなく、再びすらくと答辯した。春夫君はホツと安堵の胸を撫でた。

が、それは一瞬、審判の侍僧はきつとなつて博士の顔を睨みつけると、今度は老僧の方へ向いて、

「偽者は判明いたしました。僧正の年齢は確に六十七歳と覺えます。一方山門に記された文字は光明遍照ではなく、またあの寺院には山門を潜つて石段などはございませぬ。従つて事は甚だ明瞭、後から参つた方が眞實の使者で、此方に居るのは偽者に相違ありません！」

審判を聞いた老僧の顔が怒りに燃えた。
 「欺瞞者奴！よくも我々を欺し居つたナ。天津僧正の使者など、偽つて、こゝに忍び込んだのは、何か他に目的があつてのことに相違ない。名を偽り、關所を破つて、この王城に忍び入つた者は、何者であらうとも死に處せらるゝ掟を知らぬか？——此奴とその従者を一室に監禁して嚴重に見張りを致せ。死刑は明早朝、あの岩壁に引出して、例の極刑を以ていたせ！」
 老僧の言葉が終ると一緒に、黒衣の男がつか／＼と進み出で、博士の腕をむんづと掴んだ。そして博士が老僧に向つて一禮する間もなく、ぐん／＼と彼方へ向いて引張つていつた。

退路に迷うて

假面を剥かれた風間博士が、二人の男に手をとられて、ドアを向ふに引立てられてゆくのをみると、いた春夫少年は、慌て、圓柱の中の鐵の梯子をよち上つた。
 間諜々々してゐる時ではない。もし、博士の方が自分よりも先に、部屋へつれてゆかれて、自分のみないことが分つたら、きつと彼等は騒ぎ始めるに違ひない。それに、入口のドアを閉め切られたら、あの部屋へ入ることも出来ないし、また再び博士と相見る機會がないかもしれぬ。
 何にしても、一刻も早く、あの部屋へとつて返して、素知らぬ顔をしてゐなくてはならないのだ。春夫少年は梯子を上り切つて、圓柱を外に飛び出すと、簣火の燃えてゐる廣間を横切り、階

段を飛鳥のやうに駆け上つた。そして足音を立てないやうに靴を脱いで両手に持ち、暗い廊下を一散に駆け出した。が、十間と来ない中に、春夫少年はつと足を停めて立ち止つた。
 嚴重なドアへぶつかつたのだ。眞暗い中で、やつとハンドルを捜しあて、右へ左へ捻つてみたが、びくとも動くものではない。
 先刻来た時には、こんなドアは無かつた筈なのに——さう思つて、ふと耳を立てると、ドアの向ふからどろ／＼と水でも落ちるやうな凄まじい音が聴えて来る。
 「瀧だ！」思はず春夫少年が呟いた。
 「すると、道を迷つたのだ！」
 瀧の音は今聴くのが始めてである。きつと道を迷ふたに違ひない。さう気がつくつと、下の廣間に同じやうな階段が、三つも四つもあつたことが思ひ出される。急いだあまり、その階段を取り違へて、こんなところへ迷ふて来たのだ！
 春夫君は直ぐ様足を後に、再び廣間へ取つて返した。そして四つの階段のどれであつたか見定めようとしたが、四つが四つとも同じやうな階段で、そのいづれであつたのか、見覚えもなければ判断もつかない。
 さア、困つた。降りて来た時に、何か見覚えをしておけば宜かつたのに……もし見附かつたらと、その方にばかり氣をとられて、急いで圓柱の蔭に身を隠したため、後に振返る閑もなく、こん

なことになつてしまつた。

仕方がない、片つ端から四つの階段を昇つてみようか？ いや、そんな時間潰しはしてゐられぬ。と云つて、階段とにらめつくらをしてゐては、尙ほ更ら時間をとるばかりだ。

已むを得ない。やつぱり四つの階段を片つ端から昇つてみよう！ 外に方法はないんだから――

春夫君がさう決心して、第一の階段に足を踏みかけた時、背後の方でコトンといふ音、ふと振向くと、何處にもドアはないと思つた廣間の彼方、圓柱と圓柱の間が一尺ばかり細目に開いて、黒衣の男が身體を斜にして此方へ向いて出て來ようとするところ。

祕密の扉だ！

しかも、その後には、確に變装の風間博士――では、二人の男は博士をつれて、こゝを昇つてゆくのだ。よし、ぢや階段の蔭に隠れてゐて、そつと後をつけてゆかう！

春夫君は踏みかけた足を後に退いて、薄暗い階段の横手へつと身を潜めた。そして息を殺して待つてゐると、博士を中に前後を護りながら此方へ近づいた二人の男は、手にした龕燈の灯で足を照しながら、右から二つ目の階段をぐんぐんと昇つてゆく。

三人の足音が階段の上に消えかゝると、春夫君はそつとその後を追ひ始めた。今度は立派な目標がある。廊下に圓い灯影を落す龕燈の灯を尾けてさへ行けば大丈夫だ。但し、博士が再び舊の

部屋へ監禁される時、どうして自分も一緒に部屋の中へ忍び込んだらいいであらう。氣にかゝるはその一事。

暗い廊下を右へ左へ、幾度か曲り曲つて、やつと三人が部屋の前へ立ち停つた。一人が扉を開けるらしい。博士を中に押し込めば、ドアは嚴重に閉されるのだ。いや、その前にもし龕燈の灯で中を照せば、彼等は自分がそこにゐないことを知つて騒ぎ出すにきまつてゐる。

すれば、今だ！ 彼等がドアを開けて博士を中に監禁する一瞬間に、忍び込まねばならないのだ。

春夫君は廊下の壁に寄り沿ひながら、颯のやうに三人の背後に近づいた。しかし、ドアの前に立ち塞がった三人の間をどうして潜り抜けられよう。春夫君はドアを前に見つめながら、どうすることも出来なくなつた。

と、その折も折、風間博士の聲がした。

「おや！ 落しものをした！」

同時に、博士は五六歩バタ／＼と引返した。二人の男は慌てゝ博士の後を追ふた。

天の助け！ 間髪を容れず、春夫君はするりと部屋の中に飛び込んだ。

死を前にして

「春夫君、君は僕がゐない間に、何處へ行つてゐた？」
二人の男が、部屋の中に蠟燭を點してから、ドアを後に閉め切つて、嚴重に錠をおろして去つてしまふと、博士が靜に口を切つた。

「えゝ？」

二人の黒衣の男さへ氣がつかぬのを、博士がどうして知つてゐるだらう？ 春夫君が訝しげな面

持をして、仄暗い蠟燭の灯で博士の顔を見返すと、

「はゝ、僕が知らんと思つてゐるね。僕のお蔭で、君はこゝへ戻つて來られたぢやないか。僕が落し物をしたなんて、芝居を打たなかつたら、君はドアの外に閉め出しを食ふところだつたらう。」

「ぢや先生は僕が部屋の中にあることを御存知でしたか？」

「うん、それくらゐなことが判らなくて如何する。僕が彼等がドアを開けた時、直ぐそれと知つたんだ。君がもしゐたならば、僕の歸つて來るのを待ち兼ねて、ドアが開くと一緒に飛んで來る筈だ。まさか、眞暗い部屋の中で、一人で居睡りをしてゐるわけもないからね。それがコトリとも音がしないので、僕は直ぐそれと知つたんだ。で、こいつは怪しい、うっかり僕が中へはつて君が閉め出しを食つたら大變だと思つたので、落し物をしたなんて出鱈目を云つて、引返したんだ。すると、君が直ぐ後の壁に寄り沿うて立つてゐるので、二三間もゆくと見附けた風をして戻

つて來たんだがね、一體何處へ行つてたんだ？」

「ぢや、先生に助けていたゞいたんだね。これは驚きました。僕、巧くやつたつもりだつたのに……。」

春夫君はその炯眼に驚きながら、博士の後を追うて廣間の圓柱の秘密の入口から忍び込んで、不思議な魔術の實驗をはじめ、聖壇の前での出來事を残らず偷み見たことを告げた。と、今度は博士の方で驚きながら、

「左様か、では僕の化の皮を剥れるところも見たんだね。いや、流石の僕も眞實の使者と對決をさせられるとなつた時には、萬事休したと思つて觀念したんだ。しかし、審判に當るあの侍僧が、天津の寺院のことを知つてゐなければ、何とでも云つて相手を言ひくるめてやらうと、圖々しく構へ込んで見たんだが、意外にもあの侍僧の奴が何も彼も知つてゐたので、誤魔化しが利かなかつたんだ。」

「それも仕方のないことです。ところで、これから如何します？」

「どうつて、格別方法はあるまい。」

博士は明日の朝、自分が死刑に處せられるなんといふことは、まるで念頭にもないらしく、何か外のことも考へてゐる風である。

「ぢや、彼等の手にかゝつて、このまゝ死んでゆくんですか？」

春夫君はきつとなつて、博士の顔を見つめた。
 「殺されたくはないが、袋の鼠も同様、逃げ出す望みがないんだから、如何しようもないではないか。」

「だつて、どうせ殺されるくらゐなら、このドアを打ち破つて、逃げるだけ逃げてみたらいいぢやありませんか！」

「ドアを一つぐらゐ打ち壊しても、こゝから逃げ出せるものではなるまい。一步踏み出せば、そこに關門がある。一つの關門を潜つても第二、第三の關門があるんだ。それに何方へ向いて逃げればいいのか、迷宮も同様のこの秘密宮殿では、まるで方角も立たないんだ。間諜々々してれば、直ぐにも彼等の手に捕まるにきまつてゐる。」

「すると、やつぱりこゝにじつとしてゐて、死を待つ外の外はないんですね？」
 流石に春夫君の聲は低かつた。

「ああ、その心算であるんだ。どうせ死は覺悟の前で乗り込んだんだからね。しかし、まだ絞首臺の上に立つたわけではない。急いで事は仕損じる。今夜はゆつくり寝ることにしよう。」

博士はさういふと部屋の片隅へ行つて、そこにある敷物を寢臺代りに、その上へごろりと横になつた。

春夫君は、博士の心を測りかねた。最後の言葉を聴けば、何だか意味があるやうにも思はれ

る。それに死を前にして平氣で眠られるところを見れば、何か心に恃むところがあるらしい。しかし、自分に對して、何事も隠し立てする博士ではないのに、何にも云はずに寝込んでしまふ様子から判断すると、或は萬策盡きて死は覺悟しつゝも、自分を安心せしめようとて、わざと平氣を装ふてゐるのではあるまいか！

懸崖上の死刑場

不安な一夜が明けて、二人の前に手輕な朝飯が運ばれた。

それがこの世での最後の食事かと思ふと、春夫君はゆつくりと箸を取る氣にもなれなかつた。しかし、博士は相變らず落ちつきまして、目の前に恐ろしい死を控へた人のやうにも思へない。夜が明ければ、何かこゝを逃げ出す計畫でも話してくれるかと、内々心頼みにしてゐた春夫君は、すつかり失望してしまつた。博士はこのまゝ彼等の手にかゝつて、むざ／＼と殺されてしまふつもりであらうか？ それならば仕方のないこと。生死を盟つた二人である。何事も運命と諦めるの外はない。

春夫君が絶望的な氣持になつて、やつと食事を済すと、間もなく入口のドアが開いて、二人の僧侶がつか／＼と部屋の中に入つて來た。この二人の男は黒衣をまとふた辯髪、そしてこれから刑場へ同行するのだと云つて、手にした捕縄でいきなり博士の兩手を縛り上げやうとした。と、

今まで猫のやうに温和しかつた博士の態度がガラリと變つて、「待つた！」と相手の男を睨みつけた。「この期になつて逃げ隠れはしないんだ。何にも繩をかける必要はあるまい！」

凜とした博士の聲に、その男が差し出した手を思はず後に引込めると、

「さア、何處へでも案内したまへ。春夫君、君も一緒に往かう！」

と自分から先に立つて歩き出した。その權幕に恐れをなしたか、二人の男は手出しもならず、博士と春夫君の前後を警戒しつゝ、部屋を外に廊下へ出た。

元氣のいゝ博士の歩調に引かれて、その後について、ぐんぐんと歩いてはいつたものゝ、今數分の後、死刑に處せられることを思ふと、春夫君は何處をどう通つてゆくか、そんなことを考へてみる氣にもなれなかつた。廊下を曲り曲つて、洞穴のやうな狭い通路を幾度か潜り抜けて、やつと一つの扉の前まで來ると、直ぐ間近で凄まじい飛瀑の音がするのに始めて氣がついたくらゐであつた。

春夫君は夢から覺めたやうにハツとした。それは昨夜道を迷うて聽いた瀧の音である。すると、刑場は瀧壺の近くにあるに違ひない——。いや、ことによると、自分達はその瀧壺へ投げ入れられるではあるまいか？

その時、先頭に立つた男が重い扉をぎいと開けた。と同時に、目を射る眩しい太陽の光と一緒に、耳を聳らす大飛瀑が彼等の前に現はれた。

危機一髪

霧と降る飛沫、その中に懸る七彩の虹、ほんの一瞬ではあつたが、春夫君は自分が今刑場に引かれゆく身であることも忘れて、恍惚として壯大な眼前の光景に見とれてゐると、突然、傍で聲がした。

「宮殿へ忍び込んだ悪漢といふのはこれか。ふむ、一人はまだ少年だナ？」

ふと振向くと、二人を連れて來た僧侶は何時の間にか姿を消して、それはまた、何處から飛び出したか、目と口ばかり見せたゞけで、全身を黒い衣で包んだ二人の男が、じろくくと自分を見ながら立つてゐる。春夫君は一目で、それが恐ろしい死刑執行人であることを見てとつた。

春夫君の心臓は急に高い鼓動を打ち出した。いよゝゝ、最後の時が來たのだ。それも、きつとあの絶壁の上から、底知れぬ瀧壺へ向いて突き落とされるに相違ない。おめくくと突き落とされるくらゐなら、一層のことこの二人と格闘して、彼等を逆に突き落してやればいゝのに。

混乱した頭腦の中で、春夫君がそんなことを考へてゐると、死刑執行人は博士の顔を睨めながら、

「これから其方たちを死刑に處する。何か申し残すことはないか？」
と重々しい聲で云ひ放つた。しかし博士は頭を横に振つただけで、一言も口を開かうとはしな

かつた。博士は一切沈黙を守つて、深く死んでゆかうといふのであらうか。
「何にも言ひ残すことはないと思えるな。それでは死に就く準備をしながら、少時、そこに待つて居れ！」

どうせ死刑に處せられるなら、一刻も早い方がよい。死んで行くのに、何の準備があるものか。何で愚圖々々するのだらうと春夫君が不審に思つて立つてみると、後の方で騒々しい人聲。やがて扉が開くと、三四人の僧侶が両手を背後に縛り上げた一人の支那人を引立て、来て、石段のところから突つ放すと、そのまま扉を閉め切つた。

「その方は親殺しの大悪人だ。即刻、汝を死刑に處する！」

嚴かな宣告の聲と同時に、二人の死刑執行人は荒れ狂ふ支那人の傍に近づくを見ると、両方からその肩をむんづと掴んで、喚き叫ぶ悲鳴には耳も藉さず、ぐんぐんと斷崖の突端へ引立て、いつて、ドンと瀧壺へ突き飛ばした。今度はいよいよ自分達の順番だ！春夫君は思はずツ身顫ひしながら、ツと博士の顔を振り返つた。すると博士の方でも春夫君の顔を振向いた。無言の數秒――しかし、互ひに言葉を交す餘裕はなかつた。

その時、つか／＼と二人の前に近づいた黒衣の男は、物も云はずに博士の両手をぐつと掴んで懸崖の方へ引立てた。

三間、二間、一間……博士の身體は今や底知れぬ懸崖の突端に立つた。危機正に一髪。

斷崖上の三人

一人は右手を、一人は左手を、二人の死刑執行人は、左右から博士の手の背をつかんで、ぐんぐんと絶壁の突端へ引立て、ゆく。

博士の生命は今や風前の燈火も同然。足一度、斷崖の端へかゝるも一緒、彼等は左右から博士の身體を、たゞ一と突きに瀧壺目がけて、突き墜すにきまつてゐる。

せめて、自分に大人の半分の方があれば、敵はぬまでもあの二人に飛びかゝつて、生か死か最後の奮闘をしてみるものを――。しかし、それも少年の自分には到底望めない望みである。

今はもう凡てを運命と諦めるの外はない。と云つて、博士の最後を目のあたり見るに忍びやうか。大連を出て以來、數十日、遠い道程を、艱難辛苦を共にして來た博士が、鼠賊の手にか

かつて死んでゆくのを、どうしてぢつとして見てゐることが出來よう！

春夫は目を閉ぢて、他處を向かうとした。が、その瞬間、彼は駭然として、思はずも目を見張つた。そこに、眼前數歩斷崖の突端に、餘りにも意外な出來事が起つたのだ。

博士の足が斷崖にかゝり、兩側に立つた二人の男が、博士の背後からたゞ一と突きに突き墜さうと身構へた一刹那、左側にあつた黒衣の男がつと博士の背後に廻つたと見ると、間髪を容れず、その男の両手がぐつと伸びた。伸びた両手は博士を突くと思ひきや、右側に立つた黒衣の男

を力一ぱいぐつと押した。と思つたは瞬間、身體の中心を失つた右側の男はよろ／＼として斷崖の突端を泳ぐやうにして、消えるやうに瀧壺の底へ落ちていつた。博士を突き落すべき手が、その同役を突いたのだ。一體どうしたといふのだらう？ あの男は氣でも狂つたであらうか？

あまりの意外さに春夫は呆然として立つてゐた。すると黒衣の死刑執行人は、四邊を見廻して三人の外誰もゐないのを確かめると、博士の手を取らんばかりにして、春夫君の方へ歩いて来る。いよく不思議。やがて、春夫の前まで来ると、黒衣の男は、

「春夫君、久くだつたね！」

と云ふも一緒、頭をくるんだ黒い布を、かなぐるやうに取つて除けた。

現れたは辨髪をくる／＼と頭に巻いた色の浅黒い一偉丈夫。しかも、今、聞いた明晰な日本語から察すれば、それは正しく立派な日本人に相違ない。でも、一體誰だらう？ 春夫少年はたまじ／＼と相手の顔を見つめ、

「思ひ出せないかね、この顔が？ 海賊船の上で別れた白根だよ。」

「あゝ！ 白根さんでしたか！」

春夫少年は魂消んばかりの聲を上げて、驚きと嬉しさに思はず白根氏にとびついた。その双頬には歡喜と感謝に湧き立つ熱い涙がポロ／＼とこぼれてゐた。

白根氏の物語

讀者諸君。この物語の當初に遡つて、春夫少年が海賊船に監禁されて品川灣を後にした當時のことを、記憶の底から呼び起されんことを切望する。

その海賊船が、關門海峡を後に正に日本を離れやうとした時、春夫少年を監禁された密室から救ひ出してくれた變裝の男があつた。彼は海賊の根據を突きとめるべく、重大な使命を春夫少年に囑して、甲板の上に山と積んだ武器彈藥の箱の一つに匿れしめ、自分は海中に身を投じて海賊船を脱れ去つた。その變裝の支那人こそ、誰あらう、今こゝに突如として姿を現した白根氏である。

それにしても白根氏はどうして黃龍鬼の根據に忍び込んでゐたのであらう？

それは白根氏その人の口から聴くの外はない。

「風間君にはちよつと合圖をしといたから宜かつたが、春夫君は定めし吃驚しただらう。無理もない、門司で別れたきり何の消息もしなかつた僕が、君達の先廻りをして、秘密宮殿に忍び込んでゐようとは、恐らく夢にも思はなかつたらうからね。僕は君と別れて門司へ上ると、直ぐ風間君に電報を打つて、君のことを頼んだのだ。そして四五日して風間君から詳しい返辭を受取る、直ぐ後を消うて大連へ行つたのだ。しかし、三人も一緒に變裝して秘密宮殿へ乗込むといふ

のは決して容易なことではない。途中の困難よりも、先づ彼等のために變装を看破られる懼れがある。そこで、僕は諸君とは違つた方法をとらうと考へ、彼等海賊團の仲間が鴨綠江を遡つてゆくのを探知して、人夫募集を幸ひ支那人の苦力に化けて彼等の仲間に加はり、遂々こゝまでやつて來たのだ。祕密宮殿へ入れば、もう一人で逃げ出すわけにはゆかぬ、そこで僕は君達がやつて來るのを待ちうけるつもりで、誰も望み人のない死刑執行人を志願して、既に半月以上も君達の來るのを待つてゐたのだ。」

「有り難い！ 君のお蔭で僕たちは助かつたのだ！」 風間博士が感謝に咽ぶ聲で云つた。「先刻、君が僕の手を擱んだ時、何だか意味ありげに手頸を握りしめるので、果てなと思つてぢつと君の瞳を見て始めてそれと知つたんだ。もし君と判らなかつたら、僕は君達二人を相手にして、大格闘をやつてゐるに違ひない。とも角も、君が死刑執行人になつてゐてくれたのは、全く天の助けだつた。」

「いや、僕も最後に君達を救ふことが出来るのは、死刑執行役だと思つたので、嫌々ながら希望したのだ。それに死刑執行人は全身を黒い衣で包むことになつてゐるので、正體を隠すにも都合がよかつたんだ。」

「何にしても感謝の他はない。ところで、君のお蔭で生命は助かつたとして、さてこれから如何したらいいだらう？」

「どうするも、斯うするもない。逃げ出すばかりだ。」

「その逃げ出す方法は？」

「それは雜作もないことだ。關所を抜け出す方法はいくらもある。君は今、瀧壺へ落ちた男の身代りになつて、黒い衣ですつかり身體を包んでしまへば分りつこはない。困るのは春夫君だが、少年だから死刑執行人に變装するわけにはゆくまいが、それには又何か方法があるだらうよ。」

「僕ですか、僕はこゝで死んでしまつたと思へば、どうなつたつて宜いんです。」

春夫君少年が決然たる口調で云つた。

「いや、君は殊勳者だ。日本を出て以來、一番苦心したのは君なんだ。その君を後へ残して、僕たち二人で逃げて歸るやうなことは出来ないよ。」

「さうとも！」 風間博士が合槌を打つた。「三人一緒でなければ逃げ出すことは止さう。春夫君を殘して行く位なら、皆で死んでしまつた方がいゝ。」

「大丈夫だ！ 心配したまふな、僕に成算がある！」

白根氏の言葉には、いかにも自信がありさうだつた。風間博士はそれを聴くと、ホツとした風で、

「それで安心した。しかし、たゞ逃げて歸るのも残念だね。」

「折角、こゝまで來ておいて——といふんだらう。それや、無論たゞでは歸らないさ。それに就

て、君達に相談したいことがある。それは他でもない、黄龍鬼の生命を奪ふといふことは、到底、われ／＼三人の力では出来ないことだ。と云ふのは、彼の身邊には晝夜を分たず四人の下臣が嚴重に警戒をしてゐるんだから。そこで、怪賊退治の目的は後廻しとして、今は黄龍鬼が生命から二番目に大切にしてゐるものがあるので、それを奪ひとつて行かうと思ふんだ。」

「それは不思議な魔術の杖だらう？」

「うん、左様だ。が、君はどうして知つてる？」

「どうしてつて、僕がこゝへ忍び込んだ目的の一半は、あの魔術の杖を手に入れたかつたからだよ。」

「ぢや、相談するもしないも無いことだ。黄龍鬼が多数の部下から恐れられてゐるのは、事實、あの杖をもつてゐるんな不思議を行つてみせるからだ。あれを奪ひ取れば、彼の信望は忽ち地に墜ちてしまふにきまつてゐる。宜し、それでは如何にでもして、あれを盗み出すことにしよう。」

關所を急ぐ箱車

その日の夕方、秘密宮殿の大奥に、夕食時を報す時鐘が鳴り響いて間もないこと、黄龍鬼の奥御殿に隣る寶物庫の前へ、慌てた風で驅けて來た一人の少年侍僧があつた。

彼は寶物庫の前に近づくと、そこに立つた番人の男に向いて、

「黄龍鬼様が急いで魔術の杖を持つて參るやうにとの仰せでございます。」と云つた。

「魔術の杖を？」番人は訝し相な顔をして、

「でも、黄龍鬼様は今お食事であらうがナ？」

「ハイ、天津のお客様とお食事中でございますが、至急に入用だからと仰せられました。」

それでは、お食事中に、何か不思議な魔術を御馳走としてお見せなさるつもりかナ……」

番人は、さう云つて腰に吊した大きい鍵を手にとり、背後を向いて寶物庫の鍵孔に差し込んだ。やがて、重い扉がぎいと音して靜に開くと、番人はそのまゝ中へ入つて行つた。背後に眼のない彼は、その後ろに寄り添ふやうにして少年が隨つて來たことには氣のつく筈はなかつた。

廣い寶物庫の周圍には、何層もの棚があつて、その上にはいろ／＼な武器や、海に陸に無辜の良民を襲うて奪ひとつて來たらしい財寶が山のやうに積まれてあつた。番人は、その正面一段高く設けられた神棚のやうなもの前に進むだ。そして兩手を合せて恭々しく禮拜しながら、そう

つと前面の扉を開けて、目も眩い錦欄の上に載せられた魔術の杖を恐る／＼手にとつた。そして杖を左手に捧げたまゝ、右手を伸べて扉を再び閉めようとした。その時も時、獲物を襲ふ猫のやうに、一躍身體を跳らした少年は、左の腕を番人の頸部にかけたと見る間に右手に持つたハンケチで目にもとまらず番人の鼻口をぐつと押へた。

少年の身體は番人の背に負ぶさつた格恰、しかも左腕は食ひ入るやうに頸を締め、右手のハンカチは異様な臭氣を含んだまゝ、しつかと鼻口と口を抑へてゐる……その間、僅に十數秒、少年が兩手を離してパツと後に飛びのくも一緒、六尺に近い番人の巨軀は、魂を抜かれたやうにぐにやりとなつて、枯木のやうに床に打倒れた。

「しめた！」

少年の口から低い歡びの聲が洩れた。と同時に、彼は右手に持つたハンケチを投げ棄て、番人が取り落した魔術の杖を拾ひ上げると、それを胸衣の奥に押し隠して、飛鳥のやうに寶物庫を出た。

* * *

それから約半時間も経つた時分、怪賊黃龍鬼の奥御殿から七八町も隔つた秘密宮殿の裏門を、驟に小さい箱車を曳かしてその兩脇に附添ひながら、關所の方に急ぐ二人の黒衣の男があつた。

彼等は何か急ぎの用を命じられてゐるのであらう、裏門口を出るも一緒、忽ち鞭を振上げて驟を追ひつゝ、二散に谿谷の道を駆け出した。秘密宮殿から關所まで約半里の道、息もつかずに河岸の關所に駆けつけた二人は、そこに立つ隻眼の役人に、急用の旨を告げると、急いで渡船を命じた。秘密宮殿の急用——渡船は時を移さず彼等を向岸に渡した。夕暗の岸に下り立つた二人は、

更に驟を追うて、彼方へくと走つた。その二人の黒衣の男、それは何者であるか？ それは敢て事細に説明するまでもないこと。こゝにはたゞそれから約一ヶ月の後、滿洲駐屯の日本軍隊が滿鮮國境に派遣され、世に隠れたる怪賊黃龍鬼の根據を襲うて、彼等を殲滅したといふ報があつたことを書き加へておく。

(をはり)

魔の棲む家

深夜の銃聲

前夜と交代した水田巡査が、受持區域の巡邏に出たのは、かつきりと午前の一時であつた。いつものやうに、赤阪見附を青山行き、電車線路に沿うて、四五町も行く、貨物自動車屋の角を右へ、御所に沿うた寂しい通りを、佩劍の音をガチャつかせながら、濠端の方へと歩いていった。

そこは電車通りとは違つて、今時分になれば、一人一人通らぬ寂しい通りであつた。でも流石に時候は争はれないもので、四月の末と云へば、もう額にあたる夜風も、何となく氣持よく感じられて、風の寒い夜、凍てついた道をコツ／＼と、わざと靴音を高く鳴して通り過ぎた冬の間のやうな不氣味な寂しさはなかつた。

水田巡査は目をつぶつても、平氣で歩かれる程、歩き馴れた爪先下りの道をゆつたりと歩きた

がら、そろ／＼活動寫眞の葵館の方へ曲らうといふ二又路の近くへ来た。と、突然、ズドン！といふ銃聲がした。

ピストルだ！それも直ぐ間近である。

ぼんやりした氣持で、歩いてゐた水田巡査は、何を考へる餘裕もなく、バタ／＼と駆け出した。そして五六間も来ると、つと立停つて右側の建物をきつと見上げた。

それは三階建の小ざつぱりしたアパートメントであつた。その手前は、露路を置いてやはり二階建の西洋建築があり、向ふ隣は何處かの邸の庭になつてゐた。

「確にこゝだつた？」

水田巡査は眩きながら、わづかに燈火の洩れる三階建の窓を睨むやうに見た。しかし、そこにはコトリとも物音がしなかつた。無論、悲鳴も聞えねば、人の唸る聲を聞えない。

「怪しいぞ？ では、もつと向ふかしら？」

水田巡査は不審相に、頭を傾げながら、向ふへむいて歩きかけた。すると、まだ五六歩もゆかない内に、アパートメントの扉がつかつと開いて、夜着のままの男が水田巡査の後を追ふやうに、往來へ飛び出して来た。

水田巡査がつと後を振り向くと、その男は、夜着の前をつくるひながら、「たつた今ピストルの音がしたでせう。」

と、幾らか怯えたやうな聲で云つた。

「それで駆けつけて来たんですがね。何處でしたんです？」

水田巡査は慌て、訊いた。

「僕の部屋の二階だつたやうですがね。それもびつくりして目をさましたんで、確かなことは分らないんだが、あの後で取組合ふやうな物音も聞えたやうですから。」

「二階と云ふと、どの部屋です？」

「二階は二室しかないんですから、上つてみれば直ぐ分りますがね。御案内ませうか？」

「さあ。」水田巡査はちよつと考へてから、「その前に署へ報告しなくちやならんが、こゝには電話がありませんか。」

「ありますよ。御自由にお使ひ下さい。入つたら直ぐです。」

その男は先に立つて、扉の中に入つていつた。石段を上ると、直ぐに廊下になつてゐて、その突當りに二階へ上る階段があつて、電話室は階段の下になつてゐた。

水田巡査はつか／＼と電話室へ入ると、いきなり受話器を手にとつた。

「もし／＼、もし／＼」

いくら呼んでも交換手が出来ないので、水田巡査は一度ガチャンと受話器を元に戻して、また「もし／＼、もし／＼」を繰返した。が、交換手は何時まで待つても出ては來ない。

「はてナ？ これや電話線が切断されてるんだ！」

水田巡査はさう叫ぶと一緒に、色を變へて扉を外に駆け出した。

急報によつて、二十分と経たないに本署から一人刑事が自動自轉車を駆つて、飛んで來た。

「やあ、西本さん、何だか厄介な事件のやうですよ。」

目標に石段のところ立つてゐた水田巡査は、自動自轉車が停るのを待ち兼ねて云つた。

「ふむ、殺人事件だつてね。」サイドカーを飛び出した西本刑事は、緊張した口吻で、

「犯人はどうしたんだ？」

「まだ現場へは入らないんです。貴下を待つてからにしようと思つて——。」

「さうかね。で、その部屋は二階かい？」

西本刑事がさう云つた時、

「あゝ、此方ですよ！」

と唐突に頭の上から聲がした。二人がびつくりして、顔を上げると、何時の間にか上つていつたのか、先刻の男がすっかり服装を整へて、階段の上から呼んでゐるのであつた。

「あの男が出て來て教へてくれたんです。」

水田巡査が低い聲で囁いた。

二人が階段を上つてゆくと、その男は右側の扉を指して、

「音がしたのは、確かにこの部屋ですがね。」
と云つた。
西本刑事は黙つて、扉のハンドルに手をかけた。鍵はかゝつてなかつたと見えて、扉はすつと音もなく開いた。

見ると、そこは空間も同然のがらんとした部屋で、何處にも人の影はなかつた。しかし部屋は區切をして、二つになつてゐるので、三人は次の部屋へ入つていつた。が、そこも圓卓や椅子があるきりで、什器類はきちんと片附けられて、無論、怪しい人間の姿などは何處にもなかつた。

「何も怪しいことはないぢやないか？」

西本刑事がいさゝか拍子抜けの氣味で云つた。

「今一部屋寢室と、臺所がある筈ですがね？」と階下の部屋に住んでゐるといふ男が云つた。

それを聞いて、西本刑事は扉を開けて、奥の方を覗いてゐるが、

「誰もゐやせん。」と引返しながら、「水田君、ピストルの音がしたと云ふのは、眞實かね？」

と相手を疑ぐるやうに云つた。

「音のしたのは確です。それにこの方の話では、取組合ひの物音も聞えたといふんですもの。」

「そんな物音がしたんですか？」

「確に聞きましたかね。」

「他の部屋ぢやないんですか？」

「他の部屋とは思はれませんでしたよ。直ぐ頭の上でしたから——僕の部屋はこの眞下になるんです。」

「しかし、ピストルの音や、取組み合ひの物音がしたとすれば、何か痕跡がなくぢやならないんだが——。」

「さうですね。何か痕跡がありさうなものだが——。」

その男は刑事の言葉を繰返しながら、傍にあつた肘附椅子を、押しやるやうに向ふへ突いた。と、同時に、

「や！ 血だ！」

と水田巡査が魂消た聲で叫んだ。

青年探偵冠秀三

ある重大事件の犯人捜査に従事して、過去三ヶ月あまりと云ふもの、寢食を忘れて活動した結果、やつと犯人を検挙して殊勳を奏した青年探偵冠秀三君は、恰度この事件のあつた日から、向ふ一週間の慰勞休暇をもらつて、何處かへ旅行でもするつもりであつた。

親はなし、子供はなし、探偵希望の浦川少年とたつた二人で暮してゐるので、旅に出るといつ

ても、面倒なことは一つもない。着のみ着のまま、身体一つでぶらりと家を出ればよい。「だが、何處へいつたものだらう。伊豆の方にしようか、それとも房州の方を廻つて、震災の跡でも見て来ようか。」

冠探偵はもう朝の光がぼつと射した窓を見ながら、寢床の中で考へてゐた。と、階下で電話の呼鈴の鳴る音がして、間もなく浦川少年が上つて来た。

「お目覚めですか、先生？」

「うゝ、何處から掛つて来たんだい？」

「署長さんからです。お氣の毒ですが、直ぐ署まで来ていたゞきたいさうです。」

「署まで！ ふん、また事件だな。」

冠探偵はさう云ふと一緒に床を蹴つて飛び起きた。そして身支度もそこくくに、浦川少年が差出す牛乳を一ぱいぐつと飲みほすと、そのまま家を飛び出した。慰勞休暇も、旅行のことも、もう冠探偵の頭の中からは煙のやうに消えてゐた。

「やあ、冠君か。氣の毒だが、君の慰勞休暇を少し延期してもらはなくちやならぬことになつた。」

冠探偵が署長室へ入つてゆくと、待ち兼ねてゐた署長はいきなり話しかけた。

「本来なら警視廳へ報告して、早速應援を乞ふべきところだが、——いや、無論報告はするんだ

が、實は、報告するだけのしつかりした材料がないんだ。それに出来れば、こつちですつかり方をつける方がいゝんで、御苦勞でも一つこれを読んで、現場へ行つてみてくれたまへ。君でなくちやちよつと解決の出来さうにない事件なんだ。」

署長はさう云ひながら、卓の上の野紙を取つて、

冠探偵に渡した。それは西本刑事の認めた簡単な第一

一回報告書であつた。

時日 大正十三年四月二十五日午前一時三十分頃。

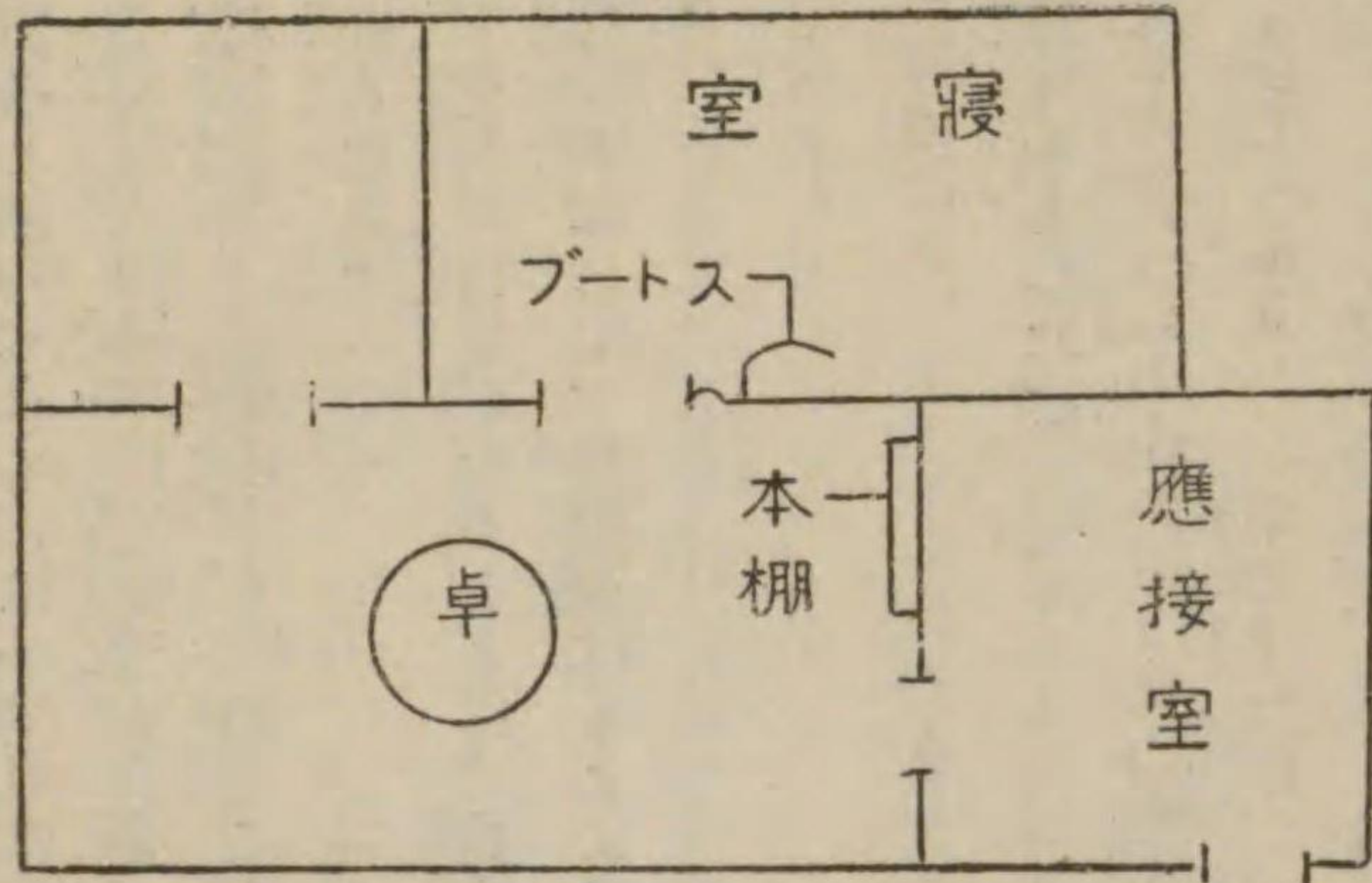
場所 赤坂區××町五十二番地所在、山根アパート

メント

水田巡查巡邏中、右アパートメント二階より拳銃發射の音響ありし旨の急報に接し即時出張取調べたる結果、概要左の如し。

一 階段下の電話線切斷しあり、犯人の所爲と認めらる。

二 兇行の場所は二階にして、應接室、居室、食堂、臺所の四室あり。間借人は目下旅行中にて、四室共整然と片付けあり。



三 兇行の現場と目すべきは居室なるも、肱附椅子の下に多量の血痕あるのみにて、他に犯行の證據と認むべきものは一切見當らず。

四 同居人は階下に石巻澄澄夫妻（無職業）と、三隔に黒井浩一郎（十五歳）なる少年あり。右石巻澄澄夫妻は巡邏中の水田巡査に事件を報告し、階上に案内したる者にて、血痕を發見したるも同人なり。

五 兇行の行はれたることは、血痕により確實なりと認めらるるも、犯人及び被害者の行方は全然不明にして、遺留品はもとより、犯罪の手懸りと認むべきものは目下のところ全然見當らず。

右取敢へず報告候也

刑事 西本 健三

「大體判りました。」

「一わたりずつと目をとほした冠探偵は、報告書を四つに折つて、ポケットに藏ふと、つと椅子から起上つた。」

「引續いての事件で氣の毒だが、かうした事件は君の専門だから、まあ一つやつてみてくれたまへ。」

「承知しました。では、又當分自由に働かしてもらへませうね。」

「それは無論だ。」署長は大きくうなづきながら、「君に一切を委せるから、自由に働いてくれたまへ。西本刑事は當分君專屬といふことにしておかう。今も、水田巡査は現場にゐる筈だ。」

「ぢや、西本君を援軍に頼むかもしれません。とに角、直ぐ現場へ行つてみませう。」

卓上を睨んだ眼

「やあ、西本君、御苦勞々々々。何か新發見でもあつたかね？」

冠探偵はアパートメントの入口で、中から出て来る西本刑事と顔を合すと、先づさう云つて問ひかけた。

「いや、まるきり見當もつかないんだ。確に兇行はあつたと思はれるんだが、血痕以外に何にも證據物件がないんだからね——。」

「うむ、ピストルの音がして、血痕があつて、それで證據が何にもないのかい？」

「無いのだ。全く足跡一つないんだから不思議だよ——尤も怪しいと睨んだ人間はあるがね。」

「誰だい？ この家の同居人かい？」

「さうだ。一階にゐる石巻——。」

「シツ！」

冠探偵は低い聲で相手の口を遮つた。西本刑事がその眼色を讀んで、つと振向くと、廊下に

沿うた扉の中に、さうと消えた男の姿——それは確に噂の當人、石巻であつた。
 「話は後で聞かう。」冠探偵はわざと大きな聲で、「君は家の周囲を調べてくれたまへ。僕は現場
 を見てくるから。」

「現場なら、僕、案内しよう。」

「いや、一人で大丈夫だ。」それから、急に聲を落して、「監視を頼むぜ。」と半分は眼で物を云ひな
 がら、どん／＼と階段を二階へ上つていつた。

青年探偵の目は、先づ扉の入口からハンドルの上に注がれた。しかし、そこには何も目につく
 やうなものはない。扉を開けて部屋に入ると、床から周囲の壁を注意深く調べた後、更
 に次の部屋へ入つた。

そこは兇行が行はれたと推定される問題の部屋であつた。南と西が硝子窓になり、北側に二つ
 の入口があつて、一つは臺所へ、一つは寢室へ通じてゐた。部屋の隅に煖爐があり、應接室との
 境の壁には本棚が立てかけてあつた。家財道具類は何處かへ藏つてゐるのか何一つなく、壁
 にかゝつた油繪と、書棚につめこんだ二三百冊の書物だけが、まるきりの空室でないことを語つ
 てゐるに過ぎなかつた。

問題の血痕は煖爐の前三尺餘りの床の上へべつ／＼と附いてゐた。さうして多量といふではな
 いが、それでも氣の弱い人達の目には、戦慄を催さすに充分であつた。

少時、血痕に見入つてゐた冠探偵は、目を上げると、そのまゝ臺所から寢室へと入つていつ
 た。そして下の露路に面した窓のところに仔細に調べて、何事か一人で首肯してゐるが、やがて
 再び居室へ取つて返すと、今度は獲物の臭氣を嗅いでゆく獵犬のやうな鋭い眼光で、部屋の中を
 調べた。

先づ床の上に片膝をついて、隅から隅へ床板の上を透してみた。すると血痕とは、反對の窓際
 の方にある椅子の周囲に、普通の塵とは違つた埃のやうなものが、點々と散かつてゐるのが見え
 だ。這ひ寄るやうにその傍へ近づいた冠探偵は、両手でさうとそれを掻き集めながら、ポケツ
 トから取り出した擴大鏡に映してみた。

それは疑ふべくもない紙巻煙草の灰であつた。シガラの灰！もう、それだけでそこに何者か
 がゐたことは確である。犯人が被害者か？ とに角、實在の人間が、この部屋の中にもゐたことだ
 けは事實となつた。

他に何等か有力な手懸りはないだらうか？

青年探偵は炯炯たる眼光を部屋の隅々に曝した。
 テーブル
 卓の上から、椅子の背に、さては本棚の書物の一つ／＼に順々に注がれてゆくその燃犀な搜
 索眼が、最後に片隅のストーヴに落ちた時、冠探偵は思はずあつと叫んだ。

それは驚きの叫びと同時に、心の底から迸り出る喜びの叫びであつた。

冠探偵は果して、そこに何を見出したであらう。

S・I の頭文字

深夜に耳を劈くピストルの音がした。それから半時と経たないに、その現場へ飛び込んだが、犯人の姿はもとより、被害者の影も、形も見えない。しかも卓の傍の椅子の下には、生々しい血痕がべつとりと附いてゐる。確に何者か、狙撃されたことは、疑ひもない事實である。犯人はまんまと逃亡したとしても、被害者は一體どうしただらう？ 流れ出た血痕から判断すれば、可なりの重傷を受けてゐるに相違ない。それなのに影も形も見えないとはどう考へても不思議である。

この祕密を解くべき使命を帯びた青年探偵冠秀三君は、その爛々たる搜索眼を以つて、先づ床の上に落ち散つた巻煙草の灰を發見した。次で部屋の片隅にあるストーヴにその眼を向けた時、思はずあつと去つて叫んだ。

と同時に、つか／＼とストーヴの前に近づいた冠探偵は、つと身體を屈めたと思ふと、ピカピカ光る小さい釘のやうなものを拾ひ上げた。

手にとつて見ると、それは擬ひもない純金のカフス釘であつた。冠探偵はじつと眼を近づけて、その表面に見入つた。服の袖口と擦れ合つて、眼もまばゆいほど光つてゐる釘の面に、小さくS・Iといふ羅馬字が刻んである。

「S・I——S・I」

探偵は口の中で繰返して呟いた。それが、釘の主の頭文字であることは云ふまでもない。そしてその頭文字の男がピストルを發射した男か、それとも發射された男であることも想像するに難くはない。

「S・Iと云ふと……」

さう云つて再び繰返した時、青年探偵は何を思ひつたのか、ニコと快心の笑を浮べた。それから、そのカフス釘を洋服の内衣囊にしまひ込むと、今一度部屋の隅々を注意深く見廻して、もう何一つ見落しのないことを確かめながら、靜に部屋を出た。

扉の後に閉め切つてから、青年探偵は三階へ上らうか、階下へ降りようかと考へてゐる風であつたが、やがて三階へ向いて階段を上つてゆくと、突當りの部屋の前に立つてコツコツと扉を叩いた。すると、

「ハイ」

ともの優しい聲がして、ハンドルを捻ぢる音と一緒に、十五六歳の青白い顔をした可愛い少年が現れた。

「あなたが黒井浩一郎さんですか？」 青年探偵が靜に訊いた。

「さうです。僕、黒井ですが、あなたは？」

少年は寝呆けたやうな眼をパチつかせてながら云つた。
 「僕は警察の者ですが、一寸あなたにお訊ねしたいことがあるんですが、お邪魔ではないでせうか？」

「昨夜の事についてせう。僕、何にも知らないんですけれど、まあお入り下さい。」
 少年は格別驚いたやうな顔もせず、冠探偵を部屋の中に招じ入れた。

黒井少年

「昨夜二階でピストルの音がしたさうですが、あなたは聞きませんでしたか？」
 探偵は充分に相手を尊敬した言葉で訊ねた。

「今朝もそのことを訊かれましたが、僕何にも知らないのです。そんなに寢坊ではないつもりなんですけど、昨夜は餘程ぐつすり寢込んでゐたに違ひありません。平常なら、ちよつと物音がしても、直ぐ目が覚めるのに、實際、何にも知らないのです。」

その言葉から態度から、少年の云ふことに嘘偽はないらしく思はれた。

「それで昨夜は何時頃に寢みましたか？」

「十時でした。僕、十時が来たら必ず寢ることにしてゐますので。」

「それから、今朝まで目が醒めなかつたんですか？」

「醒めませんでした。昨夜、扉を叩いて呼んで下さつたといふことですが、僕、それも知らないのです。だから、自分でも不思議に思つてゐます。」

黒井少年はさう云ひながら、虫にでも刺されたのか、ポツリと紅くなつた右の手頸を、痒ゆさうに搔くの、じつと見てゐた冠探偵が、

「どうなさつたのです。何かに刺されたんですか？」と訊いた。

「さうでせうかしら。變に痒ゆくつて仕方がないので。」

「何時からですか？」

「今朝目が醒めたら、こんなに紅くなつてたんです、何でもありません。」

少年は餘計なものを見附かつたとしても云ふ風で、両手を卓の下に隠した。

「あなたは一人でこゝにゐらつしやるんですか？」

探偵は話頭を轉じて、質問をつゞけた。

「一人でゐます。父は始終旅行をしてゐるものですから。」

「旅行といふと、何か御商賣の用事でですか？」

「えゝ……。」

「何の御商賣ですか？」

「僕、よく知りません……。」

少年はもぢくしながら答へた。

「今、何地を旅行してゐられるんですか？」

「それも、わかりません。」

「時々、便りがありますか？」

「いゝえ……。」少年は困つたやうな顔をして、もぢくしてゐたが「父はもうずっと前から旅
かりしてゐて、何處にゐるかわかりませんので、僕、もう昨年から會つたこともないので。」

「では、お金だけ送つて来て、あなたは學校へでも通つてゐるんですね？」

「金は僕の要るがけ銀行に預けてあるのです。學校の方は僕身體が弱いから二年で退いて、今は
フランス語を教はりに毎日丸ビルへ行つてゐます。」

黒井少年は訊かれるまゝに、何事も包み隠さず答へはするが、犯罪の事實に關しては、全然何
事も知らないらしい。

冠探偵は訊くだけの事は訊いたので、そこを出て、階段を下へ、階下の石巻氏の部屋の前へ
行つて、扉を叩いてみたが中からは何の返事もない。把手に觸つてみると、鍵がかゝつてゐるの
で、そのままにしてアパートメントを外に出た。すると向ふの横町から西本刑事が待ち兼ねた風
でやつて来た。

「西本君、石巻といふ男が出掛けたらう？」

「いや、誰も出ては來ないよ。」

「怪しいねえ、扉を叩いても返辭がないんだ。寝てる筈はないね、先刻から起きてたから。」

「もう十一時過ぎだもの、まさか寝てやしまい。返事がないつて怪しいね。いくら何でも、妻君
は起きてるだらうに……」

「それはまあ如何でも宜いんだ。御苦勞でもやつぱり見張つてくれたまへ。僕は他に調べるこ
とがあるんだから。階下の男に特に注意したまへ。」

名簿にない人

西本刑事と別れた冠探偵は、赤坂見附の自動電話へ飛び込んで、電話帳を繰つて何事か調べ
てゐたが、やがて芝橋行きの電車に乗つて虎の門で下車すると、四ツ角から二軒目の山根事務所
と看板のかゝつた洋館の中へ入つて行つて、名刺を出しながら、支配人に面會を求めた。

應接室へ通されると、間もなく頭の禿げ上つた五十二三の支配人が出て来て用向きを尋ねた。

「他でもありませんが、赤坂見附のアパートメントの間借人について、ちよつとお訊ねしたいん
ですが、あすこには三家族しかありませんね？」

「左様です。あすこはわたしの方のアパートメントでも一等狭い方でして、三家族で一杯なんで
す？」

「下の部屋には石巻といふ夫婦者がゐますね。あの人はどうした人です？」
 「どうした人だか詳しいことは分りませんが、南洋の方へ行つたことがあるやうです。わたしの方では、餘り大勢の家族は歓迎しませんので、大概夫婦者にお貸してゐます。今旅行中ですが、二階の小峰さんも、やはり御夫婦きりでした。」
 「その旅行先が分つてゐませうか。貴下の方で？」

冠探偵は支配人の言葉を遮るやうに訊いた。

「分つてゐます。上海共租界小峰洋一方です。出發前に宛名書を置いてゆかれたし、それに二三日前にも、留守を見廻つてくれといふ手紙がやはりそこから來ましたから、間違ひはありません。」
 「上海共租界ですね。」冠探偵は手帳へ宛名を書きつけながら

「それであなたの方では、見廻りに誰か人を遣られたんですか？」

「いゝえ、つい忙しいもので、まだその閑がありませんが——。」

「それで三階には黒井浩一郎といふ少年がゐますね？」

「えゝ？ 黒井ですつて？」 支配人は變な顔をして、「黒井といふ人はあすこにはゐない筈ですが……。」

「ゐないと云つて、現在黒井といふ十五六歳の少年がゐるんですがな。」

「それは怪しいですな。あすこの三階は古瀬といふ人に貸してある筈です。私の記憶に間違ひ

ないと思ひますが、尙ほ念のために調べて見ませう。」
 支配人は卓の上の呼鈴を押して、給仕に間借人名簿を持つて來るやうに命じた。給仕が大きな厚い名簿を抱へて來ると、支配人は早速頁を繰つて、冠探偵の前に出しながら、
 「このとほり、古瀬直造といふ人に貸してあります。黒井といふ名は他のアパートにもないやうです。」
 「怪しいですなあ。確かに黒井といふ少年がゐるんですが——その古瀬といふ人に貸したのは、一體何時のことです。」
 「昨年の八月からですが。」
 「間代は毎月入つてゐますか？」
 「一ヶ月前拂ひになつてゐます。それは屹度古瀬といふ人の親戚か何かでせう。わたしの方としては、間代を綺麗にもらつてゐるので宜いやうなものです。何かあのアパートメントに御不審なことでもありませんか？」
 冠探偵は宜加減な返事をして、そこを出ると、間近い郵便局へ飛び込んで一通の電報を打つた。

『犯人はあの男』

「……あのアパートメントの中で、殺人が行はれたことは間違ひない。しかも、その殺人は、床上に血痕を残したゞけで、頗る巧妙に行はれたのだ。そこで、先づ犯人が外のものか、中のものかといふ問題から考なへなければならぬ。」

山根事務所を出て、ちよつと警察へ立ち寄つてから自分の家へ歸つて来た冠探偵は、二階の部屋へ入ると、安樂椅子へよりかゝつて、考へだした。難問題に逢着する毎に、現場についての調査をすませば、直ぐ自分の家へ歸つて来て、誰にも邪魔されないうで、一人かうして推理の糸を手繰つてゆくのが冠探偵の習慣である。

「假に、犯人を外の者として考へてみる、すると、犯人はあの二階を借りてゐる小峰夫妻が旅行中であることを知つてゐる者に相違ない。即ち留守だことを知つてゐて、被害者を連れ込んで殺害したと考へるの他はない。すると小峰氏を知つてゐる者か、あすこへそれとも屢々出入りをする者でなければならぬ。しかし、留守だことを知つてゐるとしても、人の留守宅へ他人を誘き入れて、これを殺害して、半時間も経たないのに、姿を晦まさうといふことは一寸出来さうなことはではない。すると、やはり、あのアパートメントの中の者だと考へるのが至當であらうか。」

「あすこの中の者とすれば、石巻といふ男と、三階にゐる黒井少年の二人だ。石巻といふ人間の舉動に不審な點のあることは今更云ふまでもない。西本刑事と話してゐる時、扉の隙間から覗いた様子、それから自分の質問に對するあの誠意のない返事振、——殊に、ストーヴの中に落ちて

ゐたカフス釦の頭文字。どう考へても怪しい嫌疑者の一人である。——が、それにしても、水田巡查がピストルの音を聞いて駈つけたのは五分とは経つてゐない。その時、あの男は入口の扉を開けて出て来たといふのだから、その間に死體の始末が出来よう筈はない？ 待てよ、かうなると、ちよつと分らなくなつて来るぞ……」

その折も折、扉が開いて支關番の浦川少年が、

「西本さんが見えました。」と告げた。

オートバイの怪漢

「大発見をしたんでね。早速報告に来たんだ！ 犯人はあの男に決つたよ。」

「あの男つて、誰だい？」 冠探偵は落着いた言葉で聞いた。

「S・Iや。あの石巻といふ男だよ。」

「何かしつかりした證據でも掴んだかい？」

「まあ、かういふ譯さ、聞いてくれたまへ。君が行つちまうと、僕はあの四辻の煙草屋へ入り込んで、二時頃までずつと警戒してたんだ。すると丁度二時半だね。三階にゐる黒井といふ少年がアパートメントから出て来て電車通りへ歩いて行つたのだ。僕は格別何とも思はないで、後姿を見送つてゐると、一分と経たないに、またアパートメントの扉が開いたと思ふと、今度はあの石

巻といふ男が顔を出して、四邊をうろろろと見廻してゐると思ふと、黒井少年の後をつけてやつぱり電車通りへ向いて歩いてゆくのだ。道を歩き／＼ネクタイを直してゐた所から判断すると、餘程慌てゝ飛び出して来たと思える。無論、黒井少年を追駈けてゆくつもりらしいんだ。そこで、僕も、いきなり煙草屋を飛び出して、二人の後をつけていつたんだ。尾ける後を更に尾けるんだから、これで自動車でもあつたら、大いに愉快だらうにと思つてゐると、赤坂見附まで出ると黒井少年が、そこへやつて来た市街自動車に乗つたんだ。するとあの男も後から来た自動車へ飛び乗つたものだ。二臺とも三宅坂廻りの日比谷行きだ。電車では間に合はない、後を見るとお誂へ向きに安自動車は来ないと来てゐる。仕方がないので、僕は貸自動車へ飛び込んで、早速後を追つたんだ。

「正に活劇物だね。それから如何した？」

「日比谷までゆくと、あの男が自動車を下りたんで、僕も自動車を下りると、二十間程向ふの濠端を黒井少年が歩いてゐる。石巻の後から、それを尾けてゆくと黒井少年は右へ曲つて丸ビルの中へ入つたと思ふとそのまゝ昇降機で階上へ消えてしまつた。あの男はどうするかと見てゐると、やつぱり次ぎの昇降機で上つてゆくのだ。僕は一緒に乗つては都合が悪いし、と云つて後から行つたんでは何階で下りたか分らんので、そこで尾行は断念して、大急ぎでアパートメントへ取つて返したんだ。」

「取つて返した？ どういふつもりで？」

「留守の間に家宅搜索をしてやらうと考へたんだ。……あゝ、露路の方の窓から忍び込んで、すつかり部屋を捜して見たのだ。」

「何か獲物があつたかい？」

「いや、犯罪の證據品は何もなかつたが、あの男が宜加減な出鱈目を云つてゐることが判つたのだ。」

「出鱈目を？」

「あの男は自分で夫婦者だと云つてゐる癖に、實は夫婦者ぢやなくて、一人であの廣い部屋の中にあるのだ。」

「一人者だつて？」

「冠探偵が初めて意外な面持をして云つた時、コツと何かに突當るやうな物音がしたと思ふと、ドン／＼と飛ぶやうに階段を駆け下りてゆく足音がした。」

「曲者だ！」 冠探偵が叫んだ。

と同時に、二人は椅子を蹴つて後を追うた。が、二人が階段を下に降り切つた時、凄まじい爆音と一緒に一臺の自動自轉車が砂塵を立て、暗の中に消えて行つた。

二人の探偵は、齒を喰ひしばつて口惜しがつた、が既に遅い——。

窓から覗く顔

怪しい問題の家——山根アパートメントの前に、黒い二つの人影が、何處からともなく忽然として現れた。

二人は階下の硝子窓に映つた大きな影法師をきつと睨んだ。その影法師は、檻の中の熊のやうに、部屋の中をぐる／＼と歩き廻つてゐる。二人は立ち停つて少時それを眺めてゐたが、やがて再び歩き出したと思ふと、十四五間も行き過ぎて、ピーと口笛を吹き鳴らした。

と、その合圖を待つてでもゐたかのやうに、傍の露路からまた一つの黒い影が飛び出した。

「何時、歸つたね？ あの男は？」

口笛を吹いた方の男が、囁くやうに訊いた。

「今歸つたばかりです。」

「三階の少年は？」

「これは半時間ばかり前に歸つて來ました。」

「ふむ——何か他に變つたことはなかつたのか？」

「あるんです、先刻變な男があすこへ入つて行きましたかね……。」

「變な男が？ どんな服装をしてた？」

「やつぱり洋服を着てゐました。それも私はあの石巻といふ男だと思つたので、大して注意もしなかつたんです。ところが、石巻といふ男は後から歸つて來たのです——」

「それは何時頃のことだね？」

「日が暮れて間もなくです。六時四十分頃でした。」

「すると、黒井少年が歸るよりも、ずっと前だね？」

「一時間も前です。」

「怪しいね。誰もゐない家の中へ入つていつて、一時間以上も出て來ないなんて？」

「部屋にはみんな鍵がかゝつてゐた筈ですからね。」

「或は廊下にも歸りを待つてゐて、話しこんでゐるかもしれぬが——とに角、行つてみよう。」

水田君、御苦勞でも——。

と云ひかけた時、その水田巡查が、

「おや！」と云つてアパートメントの方を指した。

冠探偵と西本刑事が、つと後を振向くと、先刻影法師がうつゝゝてゐた階下の窓が、二尺ぐらゐ開いて、その間から背の高い男の顔が覗いてゐる。

電燈を背後にしてゐるので、はつきりとは分らないが、ひよいと彼方に向いた横顔を見ると、

これは意外！

「あれは人が違ふぢやないか、」西本刑事が慌てゝ云つた。「石巻といふ男ぢやないやうだぜ？」
 「え、口髯がありますね。石巻には、確か髯はなかつた——」
 水田巡査の言葉が終るか終らないに、黒い影がつと中へ引込んだ。と思ふとびしやと窓を締め
 る音がして、次いで電燈がパツと消えた。

「怪しいゾ！」

西本刑事が唸るやうに云つた。

「さあ、来たまへ！」

冠探偵は先に立つて、ぐんぐんとアパートメントの中へ入つていつた。

啜り泣く聲

冠探偵は門を中に、石段を駆け上りながら、石巻氏の部屋の前に立つて、コツ／＼と扉を叩
 いた。

が、中からは返事がない。更に拳を上げて？ つゞけ様に叩を繰返しながら、ぢつと扉に耳を
 あてた。しかし、やつぱり返事はなかつた。そののみか、部屋の中はひっそりと静りかへつて、
 人のゐさうな氣配など全くない。

たつた今、窓から首を出してゐたのだから、まだ寝つてしまつた筈がない。たとひ床についた

としても、あれだけ激しく扉を叩したのだから、醒でない限り聞えないといふ道理もない。或
 は寝つた風をしてゐるのではあるまいか。それとも眞實に部屋には誰もゐないのだらうか？

「どうも怪しい。今の間に部屋を外に出る筈はないんだのに——」

「部屋は出たかもしれぬが、家の外に出てゆく氣遣ひは決してないんだからね。」

「無論だ。すると三階へでも上つていつたかしら？」西本刑事が階段の上を見ながら云つた。

「さうかもしれない。しかし、それよりも、さつき窓から頭を出してた男が、ほんとうに石巻で
 あつたか、無かつたかといふことを、確めるのが、もつと重大な問題だ。僕はまだ一度も會つて
 ないから分らないんだが——」

「あれは確に別人だよ。石巻といふ男は口髯がないんだから間違ひつこないんだ。」

「すると、日暮れ方に這入つて来たといふ男に違ひないが……さうなると、石巻といふ男はどう
 したらう？ まさか、二人で消えてしまつたでもあるまいに——」

冠探偵は少時考へ込んでゐたが、

「西本君、とに角、僕は三階へ行つて見るからね、君はこゝで張番をしてゐてくれたまへ。用心
 してないと、何が飛び出すか知れんよ。」

「よし、大丈夫だ。」

西本刑事を後に残して、冠探偵はそつと階段を上つていつた。そして、淡い電燈の光に照さ

れた二階の廊下まで来ると、じろりと四邊を見廻した。それから密閉した例の問題の部屋の前へ近づいて、扉のハンドルに觸つてみた。鍵はしつかりとかゝつてゐる。無論密閉したまゝなのだ。誰も入つた様子はない。

それでも、尙ほ部屋の様子をかゞふらしく、少時、そこに立つてゐたが、やがて兩方の靴をそりと脱ぐと、それを手にもつて、三階へ向いて静にく上つていつた。

階段を上りきつた時、冠探偵はつと立ちどまつた。變な聲を聞いたからだ。

話し聲ではない。何だか人のすゝり泣くやうな聲だ。それも目の前の扉の中から洩れて来る。正しく黒井少年の部屋に違ひない。

耳をすますと、確に泣いてゐる。どうやら黒井少年らしい！

それにしても、あの少年が一人で泣いてゐる筈はない。きつと、誰かゞ部屋の中にあるのだらう。階下の石巻といふ男だらうか、それとも水田巡査が見たといふ不思議な男ならうか。

とに角、二人のどつちかに相違ない。何故と云つて、黒井少年を除けては、現在このアパートメントの内に、その二人しか人間はゐないんだから。

宜し！それが誰であつてもいゝ、扉を開ければ、その正體は分るのだ。と、同時に、この事件に關する意外な收穫があるかもしれぬ。

さう思ふと一緒に、冠探偵は再び靴を足に穿いて、扉をドン／＼と叩いた。

「ハイ」

といふ聲がした。が、返辭ばかりで扉は開かない。一分、二分、三分——やつと把手をねぢる音がしたと思ふと、扉は内側に細目に開いて、目を泣きはらした黒井少年の蒼白い顔が現れた。

「君は泣いてたんですね？」

冠探偵はいきなりさう云つて訊いた。

「えゝ……」

「どうして泣いたんです？ 何か悲しいことでもあつたんですか？」

「えゝ……」

少年はまた口ごもりながら下を俯いた。

「お客様はどなたです？ 階下の石巻さんですか？」

冠探偵が次の部屋を覗きこみながら訊くと、黒井少年は變な顔をして、

「いゝえ、誰もお客様はありません。」と静に答へた。

意外な返辭だ！ 黒井少年はきつと嘘を吐いてるに相違ない。

「では、君は一人で泣いてたの？」

「えゝ、僕、お父さんから悲しい手紙を受取つたのです。」

「悲しい手紙を受取つたつて？ お父さんから——何と云つて來たの？」

「見て下さい、こんな手紙です。僕、どうしたらいいか分からないので、一人で泣いてゐたのです。」

黒井少年はさう云つて、ポケットから西洋封筒を出した。見ると表に

「黒井浩一郎殿——父より」とあるきり、住所書もなければ切手も貼つてない。

「その手紙は誰か持つて来たの？」

冠探偵が不審相に訊いた。

「え、僕、先刻歸つて来たなら、扉の隙間に挟んであつたんです。誰が持つて来たのか分りませんが。」

「内容を拜見して宜いの？」

「構ひません、ご覧下さい。」

冠探偵は内から四つ折の手紙を取り出して、電燈の下で展げて見た。それには達者なペンの走り書きで、次ぎのやうな文句が記してあつた。

永年、お父さんが目録んでゐた仕事、すつかり失敗に終つた。お父さんの一生涯の目録は、根底から破壊されてしまつたのだ。もう、この世に楽しみはなくなつた。このまゝ生き存へてゐては、却つて、辛い苦しい思ひをしなければならぬ。お前には濟まないけれどお父さん

は自殺を決心した。この手紙がお前の手に入る時分には、もうこの世にはゐないと思つてくれ。お前が一人前の人間になるまでの教育費は、銀行に預けてある。どうか立派な人間になつて、黒井家の後を嗣いでくれ。

一切を祕密にするために、この手紙も或る人にたのんで、そつとお前の手許にとどける。お父さんのことは、今日限り忘れて、しつかり勉強して、偉い人間になつてくれ。そればかりを祈つてゐる。

父より

階下の悲鳴

冠探偵は二度三度、手紙を読み返すと、小首を傾げてじつと考へ込んでゐたが、

「これは、君のお父さんの筆蹟に違ひないの？」と訊いた。

「同じだと思ひます——滅多に手紙が來ないので、見比べるわけにゆきませんけれど。」

少年は涙にうるんだ聲で答へた。もし、この手紙の文面が眞實なら、黒井少年が泣いてゐたのも尤もだ。父親の遺書を手にして、泣かないでゐられる筈がない。まして少年は殆んど父の顔を見ず、何處に如何してゐるかさへ知らないほどだ。それで突然自殺するとの書信を受取つては、どんなにか膽をつぶして驚いた

ことであらう。

しかし冠探偵には合點のいかない事があつた。一つは手紙の眞偽だ。そして今一つは、手紙を持つて来た不思議な男の行衛である。その男は水田巡査が見たといふ男に相違ない。彼は扉の隙間へこの手紙を挿んでおいて、さて、何處へどう姿を晦ましたらう？

外へは出ない、と云つて、黒井少年の部屋にもゐないとすると、何處かの建物の中に潜み隠れてゐるだらうか。

冠探偵が頭を傾けて、解きがたい謎に考へ悩んでゐると、突然、階下の方でアツといふ悲鳴と一緒に、どさりと重いものゝ打倒れる音響がした。

その瞬間、面上たゞならぬ表情を見せた冠探偵は、言葉も云はずに、部屋を外に飛び出したと思ふと、轉げるやうに階段を下へ駆け下りた。

と、これはまた如何したといふのだ！

階段を下りきつた石巻氏の部屋の前に、西本刑事が投げ出されでもしたやうに俯向きになつて倒れてゐるではないか。

冠探偵に慌て、刑事の身體を抱き起した。血の氣もないまでに眞蒼な顔、くひしばつた唇——今にも呼吸の絶えさうな氣色である。

「西本君！ 如何した！ しつかりしたまへ！」

耳元に口をあて、大きな聲で呼んでみたが、僅に「うゝ——」と唸るやうな返事をしたゞけで、確かな意識はないらしい。

どこかに負傷でもしてはゐまいか？ ふと、左様思つた冠探偵は、注意深く西本刑事の身體を調べてみたが、何處にもこれといふ怪我はない。どうして昏倒したのか、原因は不明だ。

と云つて、このまゝにしては置かれぬ。一時も早く、車を呼んで来て、近くの病院へ連れ込まねばならぬ。

他に人手はないので、冠探偵はそつと西本刑事を臥しておいて、急いで廊下を駆け出した。が、入口の石段のところまで来ると、バツタリ水田巡査に出會した。

「宜いところへ来てくれた。今、君、君を呼びに行くところだつた。」

「さうですか、お宅の書生さんが電報を持つて来ましたもので——」

「浦川が電報を持つて来た！」

電報と聞いて、探偵の眼は急に光つた。その電報も見たい。しかし今はそれどころでない。

「よし、電報は受取つた。が、大急ぎで俵を呼んで来てくれたまへ。西本君が倒れたんだ。」

水田巡査が慌て、飛び出してゆくと、冠探偵は廊下を後へとつて返した。と、これは意外

今の先まで前後も知らず昏倒してゐた西本刑事がむつくりと起き上つて、夢からさめたやうな顔をしてばんやりと突つ立つてゐる。

目の前に立つ怪漢

「西本君！ 氣がついたのか！」

冠探偵が嬉々さうに呼びかけると、

「何だか呆ツとしてゐる——一體、僕はどうしてたんだらう？」
とまるで寝呆けたやうだ。

「どうしたつて、君、自分で何も知らないのか？」

「覚えてないのだ。こゝに立つて、窓の外を見てみると、後で人の足音がしたやうな氣がしたので、振向うとすると、何かしらプツリと耳の後を刺したんだ。と思ふと、そのまゝ何にも知らなくなつてしまつた——」

「その足音は階段の方から聞えたのか、それとも部屋の方から聞えたのかい？」

「それが判きりしないんだ。足音といふ程のものではなくて、たゞ、そんな氣がしたゞけなんだから。」

「ふむ、ちよつと向ふむいてみたまへ。この邊だね、」

冠探偵は西本刑事の後頭部を調べてゐたが、左の耳の後に針でついたやうな赤く血のにじんだ痕がある。

「こゝだらう？ やつぱりやられたんだ。猛烈な効目のある麻痺劑か何か注射されたんだ。しかし、まあ宜い、回復したんだから。——待つてくれたまへ、僕は大切な電報をまだ讀まないでゐるんだ。」

西本刑事が元氣な回復したのに安心して、探偵はポケットに突込んだまゝの電報を取出した。開けてみると、

イシマキトイフヒトハシラヌ アツタコトモナシ

コミネ

云はずとした上海へ旅行中の小峰氏からの返電だ。讀者諸君は、冠探偵が山根事務所を尋ねての歸途、郵便局へ立寄つて電報を打つことを御記憶であらう。その返事が今上海から來たのである。

電報を讀み終へた冠探偵は、きつと目の前の扉を睨んでゐたが、何か異常な決心でもしたらしく、腰のポケットから一つの鍵を取出すと、石巻氏の扉の鍵孔へ差込んで、ぎゅつと捻ぢた。

コトツ！ といふ音と一緒に、鍵はわけなく外れた。と同時に、冠探偵は把手を握んで、ぐつと扉を押し開けた。

と、これは意外、誰もゐないと思つた部屋の中に、しかも冠探偵の目の前に、丈の高い一人の男が突つ立つてゐるではないか！

浦川少年の冒険

「やあ、浦川君ぢやないか！」

冠探偵が叫んだ。と同時に、白川刑事が、

「君はこの少年を御存知ですか？」

と不思議相に訊いた。

「知つてるも知つてないも、僕の家の子生です。」

「さうですか！ それぢや氣が利いてる筈だ。そんなこととは、ちつとも知らないもので、馬鹿に氣の利いた少年が恰度折よく通りかゝつてくれたものだと思ひしてゐましたよ。——何に、先刻、西本君を殴り倒して拔道から逃げ出した曲物を追つかけてゆくと、露路の出口に浦川少年がゐたのです。僕が自分で後をつけては、ちよつと拙いと思つたので、今行つた男の行方を突き止めてくれ、お禮はいくらでも上げる！」といふと、「ハッ」と云つたきり、驅け出したのです。その様子がすつかり何も彼も心得てゐるらしいので、僕は安心して直ぐ引返して來たんです——さうですか、貴下のところにある少年ですか。それでは氣も利いてる筈だ。ところで、浦川君、追跡の結果はどうだつたね？」

白川刑事がさう云ふと、浦川少年は一步靜に前へ進んで、

「追跡の目的だけは達しましたが、それがお役に立つかどうかは分りません。あれから後をつけ赤坂見附までゆくと、あの男は電車の十字路を左へ曲つて、赤坂帝國館の前へ出たのです。そこにゐた自動車へ近づいて、運轉手に何か話しかけたと思ふと、ドアを開けてふいと中へ消える」と、同時に自動車はそのまゝスタートを切らうとしたのです。僕はこのいつ間違々してはゐられないと思つたので、いきなり自動車の後へくつつけた豫備タイヤへ飛びつきました。」

「ほう、そいつはえらい冒険だ！、それからどうした？」

「自動車は直ぐ動き出しました。すると誰かしら、後の方で「危い！」と叫ぶ聲がしましたが、僕はそれどころぢやありません。振り落されたらそれつきりなので、力限り根限りしがみついていたのです。自動車がどつちへ向いて走つてゐるかそんな事は無論判りません。その内に馬鹿に明るいところへ來たと思ふと、「危い！ 自動車待て！」と叫びながら、追つかけて來た者がありました。交番の巡査だつたかも知れませんが、僕はもう手がぐたびれ切つてをつたので、そのまゝ自動車を止めてくれる方が宜いと思ひましたが、運轉手はそれを聞いてびつくりしたでせう。急に全速力を出して、自動車を横町に曲げたと思ふと、薄暗い道をまつしぐらに突き進んで、ちよつと坂路を上ると、間もなくびたりと自動車を止めたのです。」

浦川少年は一息ついて、

「止まると一緒に、僕は自動車を離れて、薄暗い軒下へ隠れて見てゐると、あの男は自分でドア

を開けて出て来て、運轉手に『もう今晩は用はないよ』と云ふと、直ぐ右側の、門燈に『今井』と書いた立派な家の中へ入つてゆきました。

「今井？ たしかに今井だね？」

冠探偵が眼を輝しながら訊いた。

「今井です。自動車が行つてしまつたと、その家の前へ行つて、門札を見てみましたが、名前は書いてありませんでしたけれど、門燈にはハッキリ今井とありました。さう／＼、それから場所は牛込薬王寺町二丁目三番地で、電話もありました。牛込の一〇四番です。」

「ほ、電話番号まで記憶えて来たんだね、白川刑事はノートを出して、それを書きつけながら、いや、全く用意周到だ！」

「それで自動車の番號は？」

冠探偵が訊いた。

「自動車は九二七一號でした。貸自動車ではありません。」

「貸自動車ではないと！」白川刑事は浦川少年の注意力にいよいよ敬服した風で「そこまで、氣がついたのは偉い。君の今夜の冒険は大成功だ。犯人の根據を突き留めるし、捜査上のいろんな手懸りを擱んで来るし、全く大成功だ。浦川少年萬歳を叫んでもいゝ！」

兩探偵の發見

その翌朝、早くから家を出て、あちこちと駆け廻つてゐた冠探偵は、十一時過ぎに満面に喜色をたたへて歸つて来た。すると、玄關に出迎へた浦川少年が、

「先刻から白川さんがお待ち兼ねです。」と云ふ。

急いで應接間へ通ると、昨夜とは見違へるやうな瀟洒たる背廣服を着た白川刑事が、ほんとうに待ち兼ねてゐたらしく、

「ちつとも早く君に會ひたくて、ぢり／＼して待つてゐたのだ。何か、目新しい發見があつたんですか？」と訊く。

「實は昨夜の浦川少年の捜査のつゞきを調べてゐたんですが、僕としては非常な大發見をしたつもりです。」

「何です？ 大發見つて？ 早く聞してくれたまへ？」

白川刑事は急ぎこんで訊く。

「僕はある今井といふ男が自動車の持主だと思つたので、先づ自動車の番號からその持主を調べにかゝつたのです。ところが、意外にも九二七一號といふ自動車の持主は個人ではなくて、丸一商會といふ京橋の毛織物輸入商會の自動車なので、ちよつと失望したんです。それから今度は牛

込の區役所へ行つて、薬王寺町二丁目三番地の今井といふ人間について調べてみると、どうせう、その男は今井鈴吉といふのです。」

「今井鈴吉——すると頭文字をとると——」

「さうです、S、Iです。僕は躍り上つて喜びましたね。唯一つの遺留品で手懸りであるカフス釦にある頭文字とびつたり合ふんだから、躍り上らざるを得んぢやありませんか！」

「それは大発見だ。さう云へば、僕にも一つ新発見があるんだが。」

白川刑事はさう云つて、ポケットへ手をつ突つこんだと思ふと一枚の新新聞を取出して、

「これは昨日の××新聞の夕刊ですがね、君は見ましたかね？」

「いや、昨日はあのとほりの騒ぎで、新聞を見る閑もなかつたのです。何か出てみますか？」

冠探偵がのぞきこむと、白川刑事は黙つて新聞を開きながら、頁の下の方を指した。見ると「失踪人」といふ小さい表題で、こんな記事が書いてあつた。

京橋區銀座二丁目貿易商丸一商會の共同出資者古瀬順一郎（四八）は一昨日廿四日夕方同商會を出たるまゝ、四谷鹽町なる自宅にも歸らずそのまゝ行方不明となれり。同人は最近氣鬱症に陥りゐたれば、或は自殺したるに非ずやとて、同商會より警視廳に搜索願を出せり。

「ほう！ ヤツぱり丸一商會ですね？」

冠探偵が驚いたやうに云ふと、

「それに今一つ思ひ當ることがあるでせう？」と白川刑事が云ふ。

「失踪者の名前ですか？ 古瀬といふ？——あツ、さうだ。アパートメントの三階の間借人が古瀬と云つたつけ——」

冠探偵はアパートメントの事務所へ行つて間借人の事を訊ねた時、禿頭の事務員が黒井といふ人には貸してない、三階の間借人は古瀬といふ人だと云つたことを思ひ出した。てつきりその古瀬に違ひない。すると、昨夜の怪漢、今井鈴吉、丸一商會——それにこの失踪人——その間には、何か一脈祕密の絲がつかつてゐるに相違ない。

「僕はこれを見て、今朝、早速警視廳へ行つて調べてみたのです。すると、この新聞の記事とほり搜索願が出てゐる——ところで怪しいのは、その家族から何とも云つて来ないと云ふのでその足で直ぐ四谷鹽町の古瀬といふ人の家を訊ねると、御飯炊きの婆さんが一人ゐるきりで、家族といつては誰一人ないのです。婆さんに訊いてみたが二十四日の朝出たきり、歸つて来ないといふだけのことで、何も分らない。仕方がないので、銀座の丸一商會へ行つてみよいかと思つたが、うっかり飛び込んで却つて簞蛇なので、取敢君に相談をしに来たわけですがね。いづれにしても大體見當は附いたんだから、これからは犯罪の確證をつかむばかりなんだ。ところで、それには、何か策略を用ひんければ駄目だ。それも君や僕では、もう彼等からにまれてゐるのでどうしようにもならない。仕方がないので今一度あの浦川少年に働いてもらひたいと思ふんで